

のものであつてはならない。學校は民衆の支配するものだ。獨立した其の一社會内の犯罪は、民衆全體の批判により罰せられるものであり、少數なる教師の個人的偏執により其れの處罰の決定せられるものではない。なほ進んでは教師自身すら、民衆全體により非議せられるときはあり得べきだ。其れあるが故に師道は頹廢したので無い。現在は師道の名の下に、あらゆる教權の束縛を、學校は民衆の上に強制して居る。

學校が完全に民衆の支配下に置かれ、教權の集中主義を打破し得たとすれば、同時に當然、其の經濟的支持を爲すものも亦民衆自身でなければならぬ。より明瞭に私は斷言する。國民教育の爲めの費用を、民衆は國家の負擔す可きものとして要求してはならない。其れは教育に於ける小ブルジョアジイの一表現だ。無産者は無産者なるが故に、其の教育費を自律的に負擔しなければならぬ。ゴータ綱領の中には、右の如き國民教育の國家的負擔の要求が掲げられて居たが、マルクスは其れを批評して斷然此の條項の撤廢を主張した。蓋し國家による經濟的支持は、同時に國家の教權による教育の干渉を意味するが故だ。其の批判こそは、流石にマルクスならでは出来ない賢明のものであつた。

併し此の如くすべての教育費を地方民衆の負擔に歸して丁へば、今でさへ重荷に過ぎる教育費は、到底無産民衆の負擔に堪へないものになると批評するものがあらう。けれども此の費用を負

擔し得る財力を地方民衆は持つて居ないのでは無い。たゞ彼等の衣食住の私的費用に比較して、教育の爲めの公的費用が過大だといふのだ。併し其れは現在の如くに全く民衆が學校を支配して居ない場合のことだ。民衆は後に述べる如く、生涯永遠に勞働しつゝ學ぶ機會を自らの支配する學校に就て得、自らの生活の意義を其の教養に於て見出し、教育即ち生活だと信ずるに至つたことすれば、相當に多額である教育費の支出を惜むものでは無い。衣食住の私的費用に比較して、教育の爲めの公的費用は當然多額である可きだ。のみならず教育の意義をさへよく知れば、教育費は公的費用では無くて寧ろ私的費用と呼ぶ可きだ。すべての文化や政治經濟やが十分に地方化せられ、現在の集中主義を打破したときには、公的費用は悉く私的費用に化する筈であるが、今の場合には教育が其例を示したのだ。地方主義化せられた民衆は、此の費用の支出を悦んで果たす。其處に自らの個性の自由を體驗し得るが故だ。公的費用の多額に民衆が堪へ得ないのは、現在の如くに政治が中央集權化せられ、民衆は其の公的費用と自身の私的要求との間の關係を知ることが出來ず、且つ其の公的費用の消費に直接の支配を持たない場合に限られる。

現代我が國民は、教育に關しては餘りに國家へ政府へ信賴し過ぎる。そして此くすることが教育の効果を擧げる所以だと信ずるものゝ如くだ。小學校の教育が劃一化せられるはまだ已むを得ないとしても、其處を出て社會生活の中へ身を置くに至つたものは、出来るだけ自らの生活を個性

化しなければならぬに拘らず、民衆は其處に於てもなほ國家の、政府の干渉に俟ち、教養の動力を其れに委ねやうとして居る。例へば公民教育と呼ぶものが其れだ。青年會處女會と呼ぶものが其れだ。我國の青年會處女會が既に其の成立の意義を失つて居ることは、殊更に擧げて言ふまでも無い。毎次開會せられる全國青年會大會の代表參列者の大半が、實際の青年では無くて寧ろ老人と呼ぶが至當の人達である如きは、何としても全國青年の大いなる耻辱だ。其の耻辱を耻辱とさへ感じない青年輩に、我々は今何の期待をも置かない。嘗て其の大會では、全國青年の爲めの理想的青年讀本の編纂を當局者に希望する議決を爲して居る。成人教育の爲めの教科書を選択することをさへ、政府の手に委ねやうとするのであるか。我々は今教育概念の眞義を三省す可き時に際會した。教育の危機は我々の眼前に迫つて居る。

九 労働しつゝ學ぶ學校

第四に、其の教育は現在の如く、僅かに十數年の學校生活を以て終るものでは無く、生涯を悉くして自己教養を爲す其れである可きだ。教育の制度として其れは全く革命的の變改だ。我々は學校を卒業し社會の人となつた以後、自らの教養の爲めに特別の設備と時間とを持つことが出来ない。然るに今や學校は社會人全體の爲めのものとなつた。民衆は毎日労働をし且つ學校に就

て學ぶ。現在の所謂學校に於ての如く、何等の労働を爲さず、專一に學校に就て教養を受ける設備は、我々の所謂學校の變態の様式だ。正しい意味の學校は、労働を爲しつゝ生涯學ぶところの設備だ。當來社會にあつても其の變態的形式の學校は存在するが、其の範圍は今よりすつと狭いものになる。其の形式の學校さへ労働學校の内容を持つことは既に述べた通りだ。

労働しつゝ學ぶ正しい意味の學校は、民衆の労働に支障を來すものであつてはならないから、随つて至るところの地方に設立せられなければならぬ。其れを經濟的に支持するものは、前述の如く其の地方の民衆全體だ。其の學校の知識的程度が、大學の其れにまで達するは勿論のことだ。學校は毎日教師に就き講義を聴くだけの設備では無い。教育の様式自身が、現在の其れの如き講義萬能のものでは無くなる。或は其の圖書館に於て自修し、或は共通題目に就て討論し合ふであらう。講義は僅かに其の教育の一部だ。また教へるものと學ぶものとの間の區別さへ、嚴密のものでは無くなる。其の學校の包含する民衆の中の何人でもが新らしい意見を考へ出したとすれば、彼は其れを他の民衆全體へ傳達するであらう。さうした仕事は現在の所謂講義に代るものとなるであらう。

生涯に互る教育を從來は社會教育と呼んで來た。然るに私が今述べた様な主張は、現に成人教育の名稱を得て居る。此處に重要なことは、我國の教育學者教育行政家が、成人教育の意義を理

解せず、此れを従来の教育概念の下に包括して考察しつゝあることだ。彼等によれば、成人教育は所謂學校教育の延長だ。從來社會教育とか補習教育とか呼ばれて來たものゝ大いに整頓せられた形態だ。彼等は従来の學校概念を其儘に此の新概念の上へ適用するから、成人教育の意義を其れだけにしか理解し得ないのだ。成人教育の要求せられるに至つた根本原因は、教育に於けるデモクラシイの擴充だ。ブルジョア教化を打破する無産者教化の確立だ。成人教育の意義は社會教育や補習教育の其れとは斷じて異なる。

社會教育と補習教育とは、現在の所謂學校教育を教育の本幹と見、自らを其れの延長と見るものだ。其れには本幹に於ける如き確固たる組織と方案とを缺く。此等の教育が無くなつたからといつて、教育自身は滅亡したと言はれない。然るに成人教育は、教育の本幹だ。現在の所謂學校教育は其れへ入るまでの豫備的意義を持つに過ぎない。教育及び學校の概念は、彼れと此れとに於て全然顛倒した。だから成人教育のある他方に社會教育の存在することは、何の支障も無い。活動寫眞や通俗講演會によつての民衆教化は、社會教育に委ねられた仕事として此れ亦重要な意義を持つ。たゞ補習教育なるものだけは、全然其の姿を失ふに至るであらう。

成人教育を以て無産労働者に對する恩惠的施設の如くに解するものは、成人教育を大學擴張運動とさへ混同する。然るに大學擴張運動は、大學教育の集中主義を本位とした一の恩惠的施設

だ。其れは教育に於ける温情主義と呼ばる可きものだ。成人教育の理想は斷じて其處に無い。大學擴張運動は、現在の集中主義的教育機構と共に、正に我々の打破すべき當のものだ。

十 成人教育運動の前途

今や成人教育運動は、我國に於て相當に注意せられつゝある。歐米の其の運動に刺戟せられたのでは無く、全く従来の教育に對する不満を源泉として、民衆の中に惹き起された要求だ。既に其の標型的なる實現を果したものとさへ、二三にして止まらぬ。恐らく此の運動は今後の我國に着目せらるべき社會現象となるであらう。慶賀に堪へないことだ。

併し從來實現せられた其の設備を見れば、此れには概ね三つの種類を區別することが出来る。其の一はマルクス派社會主義を其れの精神とするもの、其の二は勞資協調的精神の上に立ち、學校概念の革命を経験しないものである。其の後者はよし其の形態は成人教育の其れに類するものであつたにせよ、實際は過去の教育形態に從屬する。我々は斷乎として此の教育を排斥する。次に其の前者には大いなる同情を持つことは出来るが、此れを成人教育の本流として許すことは出来ない。我々が今後我國に於て發達せしめようとして居る成人教育は、前二者の何れにも屬せず、十分に無産者精神を發揮しつゝ理想主義を其れの人生觀として取るものでありたい。さうし

た第三の形態も亦現に我國に見られるところのものだ。

私が此の教育運動に大いなる期待を置く所以のものは、其の精神、其の形態が、其儘に私の主張した社會改造方案に合致するものとなつて居るが故だ。成人教育運動は今現に我々が着手して、社會人の人生觀を全然一變せしめ、随つて社會の組織を根本的に變革せしめ得る。成人教育運動は、社會改造の實際的方策としては其れの本幹の地位を占めるものだ。

第十七章

現今の藝術及び宗教

一 藝術及び宗教と社會主義

我國現時の文藝は、社會改造の問題に著しく接近した。寧ろ適當に言へば、社會改造の問題を最も熱心に論じつゝあるものは、今其の實際的行動を論議の外に置くことすれば、實に文藝家の集群であると言つてよい。藝術は生活の展望だ。建築の造營に先立つ視野の廓大だ。藝術家が生活改造の問題、随つて社會再建の要求と先づ密接の關係を結ぶに至るは、當然の順序だ。現時の宗教は、其點では遙かに藝術より後れて居ると言へる。宗教は、其の創建の原始時にあつては、科學よりも藝術よりも、熾烈の破壊性と想像性を持つ。蓋し宗教は、綜合的的人生觀を要求するものとして、我々の人格との結び付きの最も鞏固なるものなるが故だ。宗教の飛躍は藝術の其れに優る。此の意味に於ては、宗教の社會改造欲は藝術の其れ以上に進む可きだ。併し其の潑刺は其れの發生期に限られる。宗教はまた甚だ保守的だ。改造の欲求への反應は鈍重だ。藝術の如く不斷の創造を欲せず、形式の沈澱晶化に特異の依據を感ずる。現時の宗教は正しく其の時代

に止まるのだ。宗教家の立場から社會改造の問題へ密接の關係を持つたものは甚だ少ない。

我が文藝家の中の少壯部分は、マルクスの唯物史觀を根基として社會主義の信奉者となり、自ら無産者文藝の創作者、從來の文藝家をブルジョア文藝の其れとして呼び、其の後者に挑戰狀を發した。藝術の問題は、即ち一般の經濟的生活改造の問題と共通の根基に立つたのだ。藝術が社會改造の問題に甚だ密接に關係したと爲す所以のものは其れだ。

私は先きに、教育と藝術と宗教とは改造の究極手段として我々の重視す可きものであると爲したが、随つて藝術と宗教とは社會改造の問題に甚だ密接の關係を持ち、また持つ可きものだと思つたが、其の意味は必ずしも右の社會主義的文藝家の場合を指すものではない。私は本來マルクス派社會主義の哲學の一部を誤謬だと信ずるものである。随つて文藝家が全部的に其の學說の上に立脚することには賛成出来ない。改造は普遍妥當なる人間理想の保障だ。永恆不滅なる人格品位の擁護だ。價値の立場に立たない相對的變化は人生改造では無い。併し此の如き人間理想、若くは人格品位は、其れを自覺するものに取つて以外には何の意味も無い。或る意味では、其の自覺は論理によつて教へられることの出来ないものだ。然らば我々は如何なる機縁によつて其の價値の自覺に達することが出来るか。價値に充たされた生活、價値を創造する人格への體驗移入により、自律的に其れの自覺に到達するのだ。此の移入の材料となるものが實に藝術であ

り、宗教であつた。勿論其れは道德と科學とに於ても同様に行はる可きだ。たゞ後の二者への體驗移入には、意志的努力が必要とせられる。道の自然的弘通力を持たない。此れに比較せられ、ば、藝術と宗教との體驗移入は自然的だ。暗示と想像との活潑に動く範圍だ。我々が藝術の美、宗教の聖を内驗的に自證した時には、其の價値の超越性を信じて疑はない。其時我々は、變化する人生の中に永恆的なる價値の支配し、斷滅する欲望の搖影の中に人格の品位の確立することを自覺したのだ。生活の再建、社會の改造は、此の絶對的價値の規準に於て計畫せられなければならない。然らざる限りあらゆる變化に相對的なるもの以上の意義を持つことが出来ない。よし其の表現は略々類似したものを示すにせよ、既に其の展開の軌道を異らしめるから、此の永恆的立脚地を無視する姑息の改造手段の演繹の中に、人類の光輝を保障するものを發見することは出来ないであらう。

唯物史觀論者の主張の一部に、私が常に同意し得ない根本の理由は、彼等の主張するものが規準なき變化なるが故だ。既に變化と呼ぶ。其處には變化を認識し得可き規準が必要だ。況んや此の理論を改造的努力の根基に立つものとする爲めには、其の變化の規準となるもの、背景に、我々の人格が立つとするのでなければいけない。人格の核心を離れて我々の努力は其の意義を爲し得ないからだ。然るに唯物史觀說の支持者には、其等の要素の無視せられる場合が多い。今若し藝

術社會主義、若くは宗教社會主義なるものが成立し得るとすれば、其れは唯物史觀説を藝術若くは宗教の形式で表現したといふだけのものであつてはならぬ。藝術的美の品位を保障する爲めに社會醜を憎惡し、宗教的聖への沈潜の故に社會的虚偽を脱却しようとする努力こそ、其等の名に値ひするものだ。モリスやラスキンの歩んだ途が其れであつた。すべての社會改造論者の立場は、此等の先覺者の其れを準模す可きだと私は信ずるものである。

二 所謂無産者藝術の問題

ブルジョア文藝とプロレタリア文藝との對立は、現に文壇の重要な論争題目だ。併し私が此の問題の判別にどういふ立場を取るかは、前に述べたことで明かになつたであらう。私は、ブルジョア文藝家が固守する立場だとする藝術至上主義に反對するものには無い。そして藝術價値を相對的にしか認容し得ないプロレタリア文藝家の見解の誤謬を指摘するであらう。併し其れは所謂ブルジョア文藝の擁護の爲めでは無い。私はまたプロレタリア文藝家が新らたに興隆せしめた立場だとする無産者精神を表現した藝術の價値を、相對的にしか容認しないものには無い。むしろ當來藝術の内容として、無産者の潑刺たる生活力が其れの充實した表現を見せるに相違無いことを信ずる。併し其れは現時の所謂プロレタリア文藝家の所論を私が肯定した結果として、は無

50

藝術價値を負荷し、表現するものは作品の形式だ。言ひ換へれば其れの描寫だ。素材が價値を實現するのでは無い。實現せられた價値とは、即ち素材が或る藝術的描寫に表現せられたものだ。其れ故に或る作品の取扱ふ題材が有産者の生活であらうと、随つて有産者の哲學、感情、意志であらうと、或は全く其れに反する無産者の其等であらうと、其れが藝術の價値を決定するのでは無い。同盟罷業を描いたが故の無産者文藝は意味を爲さない。大實業家の生活を題材としたからブルジョア文藝になつたのでは無い。藝術の題材は、一の統一的人生だ。其れは我々の現實の其れと全く同じい現實的生活統一を持つ。其の生活の上へは、我々の文化的見方の何れをも適用する事が出来るであらう。其れ故に、經濟的生活とはいかに僅かの關係をしか持たない題材を其の作品が取扱つて居たにせよ。なほ經濟の見方から、其の題材の性質が有産者のだとか、若しくは無産者のだとかいふことが出来るであらう。併し其れは單に觀客の任意の評價だ。藝術の題材は、一の統一的人生であるにせよ、作家自身は其の題材を選択し、創造したモチーフを持つ。其れは男女性の戀愛的葛藤であらう。親子の道德的反目であらう。或は又個人の宗教的苦悶であらう。其等のモチーフは必ずしも經濟的問題の其れでは無い。併し其れだから此の藝術は、無産者精神に於て稀薄だとはどうして言へよう。又其のモチーフとなつた問題を、飽くまでも經

濟問題の座標軸の上へ換元分析して、其の題材の價值を判定しようとするのは確かに偏見だ。我國の所謂無産者文藝家は屢々此の誤謬に陥つて居た。マルクスの唯物史觀說の上にのみ立脚するが爲めだ。戀愛的葛藤、道德的反目、宗教的苦悶は、戀愛として、道德として、宗教として其れ々々に我々の生活に強い影響を與へ得る問題だ。随つて其れ々々に、自らの問題の立場に於て藝術的作品のモティーフとなり得る。人生は深く、且つ廣い。人間の悩みは經濟問題だけでは無い。經濟階級の鬭争的反感で以て浸透せしめた作品でなければ、人生と社會の問題を取扱つたもので無いと考へ、其の價值を低く見ようとした一部のプロレタリア文藝家は、人生展望の甚だ狹量なるものである。

藝術の價值は絶對だ。永遠不變的普遍妥當的だ。科學と道德の價值が其の性質を持つと全く同じ根據に立つてだ。併し其れは價值の形式、なほ適當に言へば價值の品位を言つたので、其れの内容を言つたのでは無い。科學の眞價值は絶對だが、人類が眞理として信じて來たものは常に推移して居る。道德の品位は永恆的だが、社會が德義として容認したものは時代と共に變遷を重ねて居る。同じ根據を以て、私は藝術價值の至上を主張し、随つて一の優秀作品の價值を超時代的だと呼んだにせよ、其れ以外に優れた作品は創作し得られないとか、此の作品と全く同じく超時代的の其れが並立し得ないとか言つたのでは無い。のみならず藝術の題材は統一的現實だ。全

を個に分割する人生斷片としてでは無く、全を個に映する人生象徴として、現實の一面角だ。其れが時代と共に推移することには何の不思議も無い。其れ故に現代の藝術がプロレタリア的特質を持つは當然の徑路だ。寧ろ此れを離れる事が困難だといへる。プロレタリア藝術の主張者として有力なルナチャルスキイでさへ、當來藝術としては無産者精神を表現する藝術を熱心に主張するとはいふものゝ、其れあるが故に舊藝術をすべて葬り去らうとはしない。却て舊藝術の中の優秀なるものは保護せらる可きだとし、又事實に於て露國では其等は保護せられて居る。無産者藝術の勃興は、彼によつては一のシネトウルム、ウント、ドラクなどせられた。無氣力無感激の廢類的浪漫主義への挑戦だとせられた。此の意味の無産者藝術論は、私の全部的に賛成するところのものである。

無産者精神は、今後藝術のモティーフの中に、愈々強く支配する精神の一つであらう。即ち其れはルナチャルスキイが論じた如く、個人主義的な、ブルジョア、リベリズム的な私利競争の精神を打破し、共同社會の連帶的生產活動を眼目とする其の精神であらう。其れを離れることは、藝術家にあつては當然、藝術家で無いすべての人にあつても亦時代が既に許さない。無産者藝術は今後大いに興隆するに相違無く、又大いに興隆せしむ可きだ。併し我國に現はれた甚だ狹義の所謂プロレタリア文藝が其の標型的のものであるかどうかは疑問だ。私の觀察するところでは、

其れはマルクスの唯物史觀說、又は階級闘争說を宣傳する爲めに、其の理論の上へ藝術的技巧の衣を着せた様な感じを強く持たせるものであつた。餘りに生硬だ。餘りに知的だ。勿論私はルナチャルスキイと共に、プロレタリア文藝を既に成立したものだとは考へない。萌芽としての其れが、完成せられた、若しくは完成を豫想せしめる形式を持たないのは何の差支へも無い。萌芽は寧ろ混沌たる、しかし何等かの生命を暗示する其れであるが常だ。けれども其の發生地は必ずや全生活の衝動であり、本能である筈だ。片々たる知識によつての構案は大いなる藝術を生む所以で無い。現在の所謂プロレタリア文藝は、我々の待望する眞の無産者藝術を豫示する點に、まだ少しも到達して居ないと私は信ずるのである。

三 藝術文化の獨占

所謂プロレタリア文藝に就て、私は右に述べたこと以上に問題として見たい一つの疑問がある。此の文藝の主張者等の創作態度が單に主知的に止まることに、自づから關係を持つて居るでもあらうが、其れは彼等が衷心から無産者の幸福を思ひ、其の爲めに自らの全力を犠牲にし去らうと欲する、眞正の無産者精神、若しくは共同社會主義的精神によつて自らの動機を燃焼せしめて居るかどうかの疑問だ。私の觀察するところを以てすれば、彼等が挑戦狀を發する當の對手は、

現在の所謂ブルジョア文藝家であつて、其等の作品を批評し、自らの所謂プロレタリア文藝を創作すること以外には何の事業をも持つては居ない。其の評論、其の創作の發表せられる所謂文壇が、ブルジョア的であるかプロレタリア的であるかに就て、彼等は多くの反省をしない。然るに私の考へつゝある無産者藝術なるものは、さうした藝術の内容上の問題より前に、所謂文壇の階級的性質を重要な問題とする。そしてブルジョアの文壇へ提供せられた作品は、よしいかに其の創作の態度に於てプロレタリア的であるにせよ、なほ無産者藝術としては其の價値の乏しいものがあるとするのである。

文壇の上で、ブルジョア文藝家とプロレタリア文藝家との論争が盛んになつた時に、或る人は其の争ひを目して、要するに無名作家が有名作家の埒内へ這入り込むことを目的とした其れに過ぎないとした。そして此の批評の加へられた時に所謂プロレタリア文藝家は最も多く狼狽し、また文壇以外の人達は其の意見をいかにも至當らしいとした。現に文壇の上に現はれる作品を見れば、其の作品の特色だけを見て二つの文藝の區別立てをすることが出来ない。たゞ我々は、其中に社會主義的の論争が取扱はれて居るから、此れをプロレタリア文藝であらうと推察するだけのことである。然らば社會主義的問題以外の戀愛、道德、宗教等の問題は、其儘の姿を以てしてはプロレタリア文藝の取扱ふ題材となることは出来ないのであるか。プロレタリア文藝家にして、

其の創作の値打ちが勝れたものと見られ、文壇の所謂流行兒となりかけたときには、まだ流行兒にならない作家等は、早くも彼をプロレタリア作家の域外へ排斥しようとする。其の何れの場合にせよ二つの文藝の區別は明瞭で無い。少くも所謂プロレタリア文藝の意義は革命的に既成の文藝より區別せられるものでは無い。何故さうであるかといへば、此等二つの文藝が、共に藝術文化を特殊階級の手に独占した結果の所謂文壇、此れを正しく言へばブルジョア文壇へ提供せられたものなるが故だと私は信ずるのだ。

四 眞の無産者藝術

獨占の弊害の最も根本的なものは文化の獨占だ。財産の獨占は寧ろ前者の演繹に過ぎない。其れ故に私は先きに大學、大學教授、有産者等が知識と其の教育とを獨占しつゝある現状の打破を主張した。其の主張によつては學校又は教育の概念が根本的に革命化せられなければならなかつた。今私は其れと同じい要求を藝術と文壇との上に發する。文壇とは、藝術文化が或る特殊階級の手に獨占せられて居ることを標識する概念だ。そして現に我國の文壇は、愈々益々特殊の達人の手に獨占せられ、其の畸形的發達を助長して居る。文壇は破壊せられなければならぬ。そして藝術美の享受は、或る特殊の階級の手に獨占せられず、すべての民衆の前に其の機會を提供し

なければならぬ。其時私は始めて眞の無産者藝術が生れたと叫ぶであらう。

現時の所謂プロレタリア文藝は、いかによく其の上に無産者精神を載せ、新興階級へ宣傳的であつたにせよ、民衆の最大多數を占める眞の無産者は、其の藝術に接する機會を持たず、又よし幸運にも其の機會を持つたにせよ、其の藝術の價值へ味到する事が出來ず、又其れによつて無産者の創作的本能はいさゝかも刺戟せられない。眞に無産者の享受することの出來る藝術は、無産者精神を充滿しつゝもなほ其他に幾つかの條件を持たなければならぬ。其れは安價に民衆へ提供せられ、且つ無産者の藝術的萌芽に刺戟を與へ得るほど理解に容易なものでなければならぬ。プロレタリア文藝家が眞に無産者の協同意識を自らの動機とするならば、徒らに既成の文壇にあつて論争を事とせず、其等の仕事を放棄し、直ちに積極的に私の主張する意味の無産者藝術を創作したに相違無いと思ふ。我國のプロレタリア文藝家は單に知識の上での革命家だ。彼等の活動する動機が眞に無産者的に洗禮せられて居ると、私はまだ信じ得ない。

無産者が實質的に教育の機會を奪はれて居る如く、藝術に就ても彼等は其の享受と創作とのあらゆる機會を奪はれて居る。今日無産者の日常生活の上には全然藝術なるものが存在しない。當來の無産者藝術は、其等の無産者を藝術的に甦生せしめるであらう。そして人生には此の如く永恆的なる品位が確立することの自覺を、彼等の中に喚び覺ますであらう。文壇なる特殊的圏域が

打破せられた後には、藝術は徹底的に地方化せられる。現時の如く、藝術の優劣を以て英雄主義的の角逐を爲す必要は消失し、民衆は其の藝術を享受することを悦び、自らも一個の藝術家となつて、其れ々々に個性ある作品を創作するであらう。經濟的に潤澤なる生活は、必ずしも無産者の第一義的に要求する目標では無い。たゞ彼等は其れ以外に人生の光輝を知らないから、ひたすら其れへ集中するのだ。無産者の中に藝術的創作心を喚起することは割合に容易である。そして一旦其の意識の覺醒せられた後は、彼等は容易に藝術生活と經濟生活との價値を比較し得る。彼等の中からは、從來全く眠つて居た偉大なる藝術家が續々として發見せられて來る。私は此の如き事實を現に幾つか實見しつゝあるが故に、確信を以て此れを斷言するのである。

五 文壇的作家の商業主義

知識は反省し、分析する。人間の生活に起り、生活に對向する。此れに比すれば藝術は生活により密接だ。此れは本能其のものゝ壓力を惻々悲痛に、表現に即して感動せしめる。人生に二つと同じい生活、同じい本能の求められない個性を藝術は表現しなければならぬ。併し其の個性は、他の個性ある人格によつて理解し得られぬ其れでは無い。反感によつて排斥否定せられる偏執私情の其れでは無い。いかに不倫非道の個性であつても、藝術なる限り、其れは同感受容せ

られる。藝術は此の意味に於て、人間性の懺悔であり、本能の淨化である。十全の個性が十全の理解を得る所以は、藝術の個性は個性にして亦直ちに普遍なることを意味する。藝術家は自己の現實暴露によつて時代の現實暴露を爲す。彼は底深き人間の鏡だ。象徴の社會的機關だ。其の作品の具象性に於て作家たる彼自身が全部的に象徴せられ、時代が全部的に映發せしめられる。藝術の偉大なのは作家の人格が偉大であり、且つ作家の構現する時代が偉大であることを示す。

右の如く考へて我國現在の文壇を観察する時に、私は其處に大いなる不滿の感無しには止まり得ない。併し其の不滿は恐らくは私だけの持つ感慨では無いのである。所謂文壇的作家の創作は、今や民衆へ一の倦怠を投じつゝある。其の作品の與へる感銘によつて推察すれば、其等の作家の人格は餘り偉大なもので無いし、また作家の想望する時代も亦餘り偉大なものでは無いらしい。寧ろ其の卑少無氣力なのに、我々は憐憫の感を懷かなければならぬ場合さへある。恐らくは藝術が商品化せられ、隨つて藝術家が商品化せられたことは、明治文壇以後今日の如くに甚しい場合はあるまい。藝術と商業とは全然の對極だ。しかも今我國の藝術及び藝術家は、商業の支配に唯々諾々し、其れとは反對に商業の世界を打破し、超越するところが無い。試に此の數年間の文藝を取つて見よ。其中に幾つの傑作を數へ得るか。又盛名ある作家にして其の間は何の藝術的な仕事を爲したか。忌憚なく言へば、彼等には多くの報酬を得ることが創作の方向を決定する根本

動機であつた。藝術家たるよりは寧ろ商人であつた。

勿論私は、歴史に現はれる偉大なる作家が其の生活費を得る爲めに、純粹の藝術の創作から多大の時間を割いて卑俗なる仕事に其の精力を注がなければならなかつた事實を知つて居る。私は其れを咎めようとするものには無い。或る場合には其の苦痛と憤悶とが彼の生活を一層悲痛に深めて、其の作品を偉大ならしめた事實をさへ知つて居る。然るに我國現在の文藝家が卑俗なる家庭小説や翻譯小説に憂き身を俯す場合は、全く事情を其れと異らしめる。彼等は其の生活の資力としては既に十分なものを持つて居る。彼等の文壇的地位は、其の純粹なる藝術的作品の創作だけを以てして、よく其の生活を支持せしめるだけの報酬を得しめて居る。彼等は既に生活の安定を得た。其れにも拘らず彼等は尙ほ且つ溜々として其の商業的事業に身を委ねるのだ。百年の歴史を隔て、後代の文明批評家に現今の文壇を批評せしめよ。其れは明治以來作家の動機の最も墮落した時であつた。のみならず其の墮落に沈溺するものは、所謂老大家では無く、なほ將來に多くの未知數を残す中堅作家であつたことは、時代の汚濁を一層大ならしめる。所謂文壇人は此の墮落を隱蔽し、時代よりの攻撃を防衛せんが爲めに、頻りに朋黨を結んで策戦に怠りは無い。誠に現今の文壇は、人をして唾棄せしめるものがあると言はなければならぬ。

プロレタリア文藝家は、藝術内容のブルジョアジイを打破することだけで満足してはならぬ

い。プロレタリア文藝家とは、藝術價値の純真性を擁護して、其上への商業主義の侵略を防戦するもの、名でなければならぬ。經濟や政治に於けると同様に、藝術の視野に於ても、現代の人間性を蝕害して此れを物品化せしめる商業主義を否定しなければならぬ。彼の人格を逐日物品化せしめ、ブルジョアジイへの虜囚となりつゝある憐れな現今文藝家の人格を、其の蜘蛛網から救助することは、プロレタリア文藝家の怠つてならない一つの任務だと言はなければならぬ。

六 藝術の社會化と民衆生活

私は元來通俗文藝を否定するものには無い。寧ろ大いに其れの推奨者でありさへする。其れは私が理化學に於てまた思想に於て取らうと思ふ其の態度の同じい現はれた。思想は其れ自身に體系を持つ可きだから、専門化し、特殊知識化するものは自然の勢ひだ。デュルケムも言つたやうに、寒暑乾濕の概念を以て表現した中世紀の醫術は、科學化せられた其れでは無かつた。學問の體系は飽くまで非人間的傾向の發揮を以て進まなければならぬ。併し其の科學、其の思想を社會へ表現する形式は、必ずしも専門化し特殊化せられる必要を見ない。其れがどれだけの程度に社會的理解を期待して居るかによつて、其の思想家の愛社會心を表示するとも言へる。此の意味に於て現在我國の哲學者の書く文章は、餘りに難澁であり、社會的顧慮心の缺乏を示す。社會評論雜誌

に掲載せられる經濟論文は、特殊専門雜誌の上での其れと表現の區別を見ず、論者たる彼が社會經濟の民衆的問題を取扱ひつゝあるに拘らず、實は民衆を愛する念慮の薄弱なることを證據立てる。私は右の如き態度を好ましく思はない。其れと同じ根拠を以て、小説の形式の通俗化せられることは一の悦びにはなつても悲みにはならない。却て藝術家の心意に其れだけ通俗化せられる必要のある民衆の實在が映じたことを、私は通俗藝術家に感謝しなければならぬのだ。其れにも拘らず私は現今の通俗文藝家の作品には、決して讃頌の言葉を發することが出来ない。

通俗文藝なるが故に藝術價值を發揮し得ないものでは無い。其の作品が通俗的興趣を一部の目標としなければならぬから、直ちに藝術的描寫を妨害するとは言へない。最後に、其の題材と構想とが卑俗なる民衆の理解を焦點にしなければならぬから、随つて藝術的選擇が制限せられるとは言へない。通俗文藝であるが故に、通俗的なる興趣と題材と構想とを採つたとしても、藝術家の人格と創作力とさへ偉大であれば、十分其れを凌駕し得るであらうと思ふ。例へば我々の知悉する文豪の作品の中に、實は通俗的作品として書かれたものは幾つでも數へられる。我國の通俗文藝が偉大となり得ないのは、其等の通俗的なる興趣と題材と構想とより來る拘束では決して無い。此く考へて居る作家と讀者とがあると思ふれば、其れは全く一の幻覺に陥つたか、然らずんば此等作家の假托に瞞着せられたのだ。其の作品を墮落卑小ならしめた根本の、また唯一の理由は、

彼等の商業主義である。社會民衆の現に懷抱する心的要素の中、其の商業主義的なるものへ阿附し、屈從したのだ。精神冒險家として民衆の本質的なる心的要素へ點火する大膽と眞摯とを缺いて居たのだ。彼等は民衆を目標にしたとは言へ、其れは民衆への愛の爲めに動いたのでは無く、其れへの商業の爲めに動いたのだ。結局今日の作家の人格が甚だ卑小であつたのだ。

一例を擧げるとすれば、通俗作家が卑俗なる民衆への理解を顧慮して選擇したといふ、其の作品の題材と構想とは何であつたか。殆んど例外無く其れは資本家と貴族との家庭、其の交際社會であつた。彼等作家は、此れを以て通俗小説に運命的なる題材と構想だと考へて居る。如何にも商業主義下にある民衆の歪曲せられた一部の心的要素は、其れに相違あるまい。併し其事は要素の中の本質的なるものには無い。民衆に理解の最も容易な題材と構想と言へば、作家が卑俗なる民衆と呼んで輕蔑しつゝある其の民衆の生活以外には無い。今若し此處に偉大なる通俗作家があつて、其の階級の民衆生活を描き、側々人に迫るものがあつたと思ふれば、其れは確に通俗小説として大いなる成功を收めるに相違無いのだ。何故なれば其れは民衆に最も近い民衆自身の生活に外ならなかつたから。たゞ期す可きものは作家自身の冒險心と自信とだ。民衆に此の心的轉回を爲さしめるものは、作品の力以外には無い。作家の愛社會心が狭少であり、其の人格の内容が熾盛なる動力を持たない限り、此事は彼等に決して期待せられないであらう。

通俗小説なるもの、性質が通俗的理解を目標とする以上、其の作家は必らずや社會を念頭に置くであらう。即ち其の作品は確に藝術の社會化であらう。併し彼等によつて社會はより善くせられず、却てより悪くせられた。其れはブルジョアジイによる人生の商品化を一層助長するに過ぎないものであつた。我々は斷乎として此の如き藝術及び藝術家を排撃し否定しなければならぬ。

七 民衆藝術と社會的自覺

何時の時代如何なる社會にあつても、俚諺俗語は其他すべての藝術を凌駕して、無産者の生活の間に歓迎せられ、流通せしめられて居る。其の作品の興趣と題材と構想とが通俗的民衆の理解を得、且つ實生活の感情の中に織り込まれることの大なる所以を以て、藝術鑑賞の標準と爲すならば、恐らくは俚諺俗語ほど偉大な藝術は見られないことにもなるであらう。藝術家の民衆藝術が一般衆俗の間に期望を得ようと思ふならば、此の藝術に學ぶ可き要素を見ることと思ふ。殊に此等の俚諺俗語に就き興味深いことは、其れが民衆の社會的集團生活と密接なる關係を持つことだ。又特に其れが社會的集團生活の中でも社會的勞働の共同生活に關係の深いことだ。藝術と社會、藝術と勞働とが常に緊密に結合す可きものとすれば、俚諺俗語は確かに成功した藝術の一つ

だと言はなければなるまい。今日専門的藝術家の手になつた作品は、其の一つでもがかうした悦樂を民衆の中に得ることは出来なかつた。殊に現在の婦人雜誌や新聞の上に掲載せられる通俗小説は、社會的共同生活の代りに個人主義的商業競争を、生産的勞働の代りに華美贅奢なる消費を其の精神として與へるものに過ぎなかつた。

兒童が生れて最初に鏡を覗いて見たときの驚異はいかに大なるものであるか。自分が笑へば其れに即して一瞬の間隙も無く鏡中の人物も亦笑ふ。我れ打てば彼打ち、我れ憎めば彼憎む。若し兒童に完全なる記憶があつたとすれば、恐らくは此時以後兒童の人生觀に一大革命を経験し始めたことを、彼は告白し得るであらう。何故さうした驚異を持つかと言へば、此時彼は自らを表現し、且つ此れを反省するの機會を與へられたからである。人間の自覺は先づ自己反省を根基とする。併し自己反省は、自己表現無しには起り得ない。何故なれば自己表現が無ければ、其處には自己反省の資料を全く缺くのであるから。其れ故に我々が他人の肖像畫を見たときよりも自己の其れを見たときに、比類の無い、全く特有なる喜びを感ずることが出来る。社會の文明が進めば進むほど、社會表現の分量は増大し、且つ複雑細密になつて行く。野蠻民の社會には其れが乏しい。彼等の表現には自己が現はれず、自己の畏服する天候や自然、鳥獸や蟲魚が現はれるだけだ。併しトオテムの創作と同時に、其等のものに自己が結合し始めた。社會は此の傾向を取つ

て進化する。個人として及び社會としての自我生活の自覺が次第に高められるのだ。

俚諺俗語が一般民衆の感情に、名狀の出来ない喜悅を與へた根本の理由は、其等が直ちに一般民衆の所謂卑俗なる生活、随つて其の生活の中に生れる知慧と情緒と希望とを、直ちに表現してゐたことであらう。約言すれば彼等は自己の鏡を其等の藝術の中に見たから驚異の感に打たれたのである。卑小醜陋取るに足らないものと自ら考へて居た民衆の生活が、其處に美しい藝術的表現を持つて自己に對向したことは、如何に彼等を悦ばせ、且つ其の宿命的卑小觀を打破するに力があつたか。當に興隆すべき民衆藝術は、此の一大真理を忘却してはならないのだ。

露西亞文藝は革命と全く無關係なものでは無かつた。其等は民衆の階級意識を描寫したから革命心を鼓舞したのでは無い。藝術が農民と勞働者の生活を直ちに活寫したから、無産者は其の表現に即して自己の地位を反省し自覺する事が出来た。藝術史は又、或る作品が古典外國語を排し、自國の俗語を以て描寫せられたが爲め、民俗の集團的自覺を喚起し、國家の統一を招來せしめたことを語つて居る。藝術と民衆運動との關係は甚だ機微だ。通俗藝術家の職能は微弱なもので無い。其れは無産者運動の原動力となることが出来る。たゞ我國の藝術家は其れを自覺しないか、若くは自らの實力に危懼を持つたかして、さうした作品を生むことが出来ないで居る。一般民衆は所謂通俗文藝に即して自らの生活を反省し自覺す可き機會を持たない。

八 兒童文藝の更改

ラッセルは、現代の社會改造論者が自らの書齋に退隱して兒童の問題に冷淡であることを苦笑した。我國の藝術家特に文藝家が、今ほど濫費し得る精力を持つならば、何故其の精力を廻向して少年と幼童の文藝を改造しないか、私は其れを不思議に思ふ。一般民衆の讀み物が低下して居ることは既に述べて來た如くであるが、其れにも増して私が、今直ちに改造せられて欲しいと思ふものは、實に少年幼童の讀み物だ。少年幼童自身が自らの要求を主張し擁護し得ないとするれば、世の父兄たるものは何故其の子弟の讀み物を檢査し、批評し、且つ非難しないのであるか。商業主義の支配に絶對の自由を與へて居る點では、少年の讀み物ほど酷いものは又とあるまい。適當なる選擇を持たない兒童の讀み物に就ては、今や商業主義の上へ、何等か社會的制限の加へらるべき時が來て居ると私は思ふ。

兒童の表現生活は近時著しく擴大深化せられた。自由畫、自由彫塑、童謠、童話、童謡、童話、童謡などの言葉が初等教育者の間に頻りに語られることは、其の時代氣運の一端を示すものだ。私は此等を單に藝術教育の一部だとは見ない。其れは兒童の生活に自由表現の機會を與へるものとして、大いなる意味があるのだ。なほ言へば表現によつて自己の人格と個性とを反省し、自覺する、其の個體

生長の動因を得るものとして重要な契機なのだ。注入の教育は表現の教育に移らなければならぬ。此の意味に於て私は、其等の教育を始めて教育界に創唱した人達の功績を記録し感謝したい。殊に其等の人達が藝術家であつたことに於て私は大なる愉悅を覺える。何故なれば、其れは藝術家の取る可きまことの社會運動として、他の文藝家輩に意味深き模範を示したものであつたから。私はなほ此上其等の藝術家に希つて已まぬ一事は、其等の専門藝術家によつて開催せられる藝術展覽會に、少年幼童の自由創作をも併せて陳列することだ。大人の悦ぶ美を兒童も悦び得ない筈は無く、又兒童の感ずる美を大人も感じ得ない筈は無い。兒童は大人となる準備の美を享樂すると考へられてはならぬ。兩者は其れ以上に個性の質の相違だ。兒童の生活は其れ自身に意味を持たず大人への過渡だとする信仰は一の迷信だ。社會文化は男性女性の合作であると同じ理由を以て、其れは同時に大人と兒童との合奏する交響樂でなければいけない。文化の上の一の個性の獨占的支配を爲すは、如何に優秀なる個性に就ても容認せられてならないことである。

兒童の表現生活は其れほど豊富となつたに拘らず、大人によつて供給せられる彼等の讀み物は驚く可く貧弱だ。貧弱といふよりは甚だ有害だ。試みに幼童の見て悅樂する有り觸れた繪本を取つて一々に點檢して見よ。其の繪畫は低劣見るに堪へないし、其の文章は日本人の書く最も拙劣なるものだ。題材の選擇は教育的で無く、兒童の理解は顧慮せられて居ない。此の如きものが従來兒童に提供せられて居たのであるかと、恐らく彼等の父兄は、其の結果の豫想の前に慄然たるものがあらう。兒童文藝は一日も早く大革新が加へられなければならない。

少年少女の讀み物は、其れに比較すれば大分優秀のものになつた。甚だしく劣悪のものもあるが、其中の幾分かには確に革新の跡が認められる。併し其等の讀み物の中の大半は、今もなほ兒童の本質的で無い精神要素へ阿附しつゝある跡を蔽ふ事が出来ない。哀傷に沈溺するもの、英雄主義に奔放なるもの、標的なき好奇心に迎合するものなどが、讀み物の過半を占めて居るが、其等は先づ始めに排除せられなければならない。此の諸點は從來の批評家により既に指摘せられたことであるから詳論を避けるとして、なほ其外に兒童文藝の作家に忠告して置きたい事は二つある。第一には、其の文藝の構想なり、感情なりが、翻譯臭を帯び、到底日本の郷土に生れた童話とは見られないことだ。國際心は郷土心と背反しない。歴史の連續の中に生きない生活は死だ。童話は今以上に強く郷土文學としての特色を發揮しなければならない。第二には、其の文藝の精神からブルジョア、リベラリズムの支配を驅逐しなければならないことだ。此れは教材に一般的事として既に理由を詳論して來たから今は記述を省く。

現代の文藝家は通俗小説の範圍へ一步を踏み入れた許りで無く、兒童文藝の世界へも他の一步

を投じて居る。併し其の努力は通俗小説に於けると同様に、毫も全人的では無い。類型的の童話を語る職人としての彼等を見得たにしても、進んで児童の精神世界に新しい想像と希望とを建設する汎愛の心情の奔出するを感得することが出来ない。恐らくは児童文藝には其れに特有なる創作家を必要とするのだ。愛社會心に燃える新らしい藝術家の行動すべき範域は決して狭少だとは言はれない。

九 民衆の無宗教時代

我國は現に宗教國であると言へるか。社會の改造を論ずるとき、宗教は其の批判の對象として甚だ重要な地位を占めるものであるか。我々は今宗教の問題と接觸するに當り、其の事實の考察から出發して行かう。

外國の批評家、社會運動家などの書いた論作を読んで、我々が著しく異様の感に打たれるのは、其れに於て宗教の批評寧ろ正しく言へば宗教の否定が熱心に主張せられて居ることだ。其の批評家の立場が、經濟學の信念を基礎としたものでは無く、又其の批評の對象が社會組織では無くして社會の教育、道德、慣習などであつた場合にも、宗教の批判は其中に著しい部分を占める。若し此の批判を其の儘我國へ齎らし來るとすれば、少くも其の宗教批判の部分は、民衆に多くの

興味を持たせることが出来ないであらうし、又進んでは、或る民衆により其の部分の批評は全く無意味だと呼ばれることであらうと思ふ。我國は宗教國であるかと私が反省した場合の所謂宗教國とは、何等かの宗教を國教として居るとか、或は何等かの宗教が存在するとかを意味するので無い。我國は現に何れの宗教をも國教にして居ない。また我國には佛教、基督教を始めとし、數種の宗教が存在し、其の佛教寺院の如きは、他の社會集團に比較し、完備せられた組織をさへ持つて居る。併し其れだけで私は我國を宗教國だとは呼ばない。宗教は現に我々の社會の道德、慣習、制度、組織の中にどれだけ密に折り込まれて居り、且つ其等の進展にどれだけ強く動力として働いて居るか。一般に宗教は、我々の文化的良心にどれだけの影響を與へて居るか。私は今其れを問題にしたのであつた。

歐洲の文明諸國の場合には、確かに其等の國家は宗教國であるといふことが出来た。何故なれば、宗教は、今言つた意味に於て、社會の文化的良心其のものへ、執拗に喰ひ込んで居るからであつた。今若し社會の制度や組織を批判しようと思ふものがあれば、いかにしても其の制度や組織の基礎へ深く喰ひ入つて居る、或は寧ろ其等のもの、成立する文化的良心に根本動力となつて居る宗教を度外視することは出来ないからであつた。例へばマルクスは、神の批判を國家の批判前提とした位である。社會の道德や慣習を批判する場合には、尙更宗教は其の背後の勢力として

重視せられなければならない。併し此の意味に於ては、我國は少くも現に宗教國では無い。社會構成の文化的良心を批判するに、宗教は重要な對象となされる必要が無い。

勿論佛教は我國の文化史に既に十四世紀の展開を顧みしめる。我々の道徳、慣習、言語、風俗、美術、工藝、文學等には、閑却することの出来ない影響を加へた。其等すべてが徹頭徹尾佛教的着色を蒙つて居るとさへ言へるかも知れない。過去にあつては、宗教は社會構成の文化的良心に大いなる動力となつて働きかけて居たであらう。けれども今現に宗教の占める地位は、さうした重要なもので無い。少くも我々が社會問題を論ずる範圍内では、宗教は殆ど全く度外視せられて支障は無い。宗教は社會構成の文化的良心に、又個人の文化的價值批判に、其れが重要な要素となつては居ないのだ。

併し其れは我國に於て現に宗教が滅亡したといふのでも無い。宗教は確に存在して居るし、また現在のまゝの形態を以てすら、成立宗教は今後容易に滅亡しないであらう。たゞ現に宗教は、社會を動かしたるある民衆の有力なる部分に大いなる勢力を占めて居る、随つて社會構成の文化的良心に強い動力となつて働きかけ得ないといふのだ。熱烈なる宗教的信仰はある。併し其れは質的に、社會の重要な部分を占める民衆に於ては無いといふのだ。例へば世を退避しようとする老人や、科學と批判とを知らない愚夫愚婦やの間に宗教は大いなる勢力を持つては居る

が、其等の老人、愚夫、愚婦は、社會構成の展開に對して質的に幾干のものをも加へることが出来ない。此れに反して、工場労働者、官吏、銀行會社員等は、社會構成に有力なる一票を加へる組成員でもあれば、社會の文化的良心の支持者でもあるが、彼等は概ね宗教を持つて居ない。宗教的良心を根基として社會的價值批評を爲さうとはして居ない。今や我が社會構成の動的要素たる民衆は、無宗教者であると斷定して過言では無い。社會問題の考察に、宗教批判は殆ど全く不
必要の部分に見られると私が先きに言つたのは、其のことを意味する。

我國の民衆が現に無宗教者である理由は、明治以後の文明環境の激變と其れに伴隨する家庭及び學校の教育が、科學を主とし、情操を後にしたことであらう。其中に育つて來た民衆は、生れ
て以來宗教に就ての教養を全く受けて居ないし、又其の教養を持たないことは、社會人として立つて行くに何の支障をも與へなかつた。過去に於てさうであつた許りでは無く、恐らくは將來に於ても其の狀勢を續けるであらうと思ふ。

一〇 宗教的著作流行の真相

最近の思想界と文壇とには、宗教的作品が大いに流行して居た。其の流行は社會の無力なる部分に於ては無く、反對に其の有力なる部分に於てはあつた。我々は此の現象を何と解釋すべ

きであるか。流行した宗教的作品を支配する精神は、少くも古い傳統的の其れでは無く、何等かの點に於て傳統的宗教を新らしく解釋し直したものであつた。其の新らしい精神が民衆を動かした得たのである。然らば民衆は、既に一の宗教的信仰を持ち、其れに新らしい革命を與へたのであるか。舊信仰に幻滅して新信仰への信頼を持つたのであるか。決してさうでは無い。民衆は既に無宗教者であつた。彼等は幻滅す可き宗教を持たない。彼等は、自ら教養せられて來た内的環境のラシ・ナリズムに反感を持ち始めたのだ。現實を理解する爲めの自然科學的機械觀に寂寥を感じて、一の形而上學的情操を自らの内面に發見し、其れを生長せしめたのだ。言ひ換へれば、彼等は始めて宗教的要求に眼覺め、煩悶し、憧憬したのである。

けれども其の宗教的要求は、精確には宗教的とは呼ばれ得ぬかも知れない。其れには純粹に宗教的なる要求を含めては居るが、なほ其れ以外に、藝術的、形而上學的の要求をも含め、其等すべてが漠然と結合した反主知主義的要求である。藝術と形而上學と宗教とは、其れ々々に固有獨立の人生價值を持つものであるが、其れは我々により、此の漠然としたロマンティックの要求の中に發見せられ、形成せられなければならない。さうした場合、純粹の宗教價值は分化確立するに可成り困難のものだ。今や我國の民衆は漠然たる宗教的要求を持つたけれども、其の特異の宗教價值を創造し得ないで居る。言換へれば、宗教的歸依の對象を證識し得ないで居る。宗教的混迷の時

代が其處にある。流行した宗教的著作も亦正しく其の民衆の心理に應ずるものであつた。例へば宗教的文藝は多かつたが、其れに描かれたものは混迷時代にある人間であり、既に宗教的對象を證識し得た究竟の宗教的人格では無かつた。宗教らしい情操は描かれても、宗教其のものゝ情操は無かつた。神らしいものは其處にあつても、神其のものは見られなかつた。また其の混迷時代にある著作が最もよく民衆から歡迎せられたのである。宗教的傾向の強い文藝家も彼自身一の宗教家にはなり得なかつたのである。

今日の民衆は、宗教無き環境に育つて來た自らの機械的的人生觀に寂寥を感じ始めた。彼等は必然的に漠然たる形而上學的情操への憧憬を持つた。けれども其處に新らしい宗教は生れなかつた。一の價值範圍は、理論によつて捕捉せられず、自らの證識によつてのみ確認せられるものであるから、宗教生活への躍入も亦啓蒙では無い實行を必要とする。既に其の家庭と學校と社會とに於て、何等の情操的宗教陶冶を受けなかつた現代の民衆に取つては、宗教生活に入ることはすべての文化生活の實現の中の最も困難なるものであり、恐らく彼等は永遠に混迷の道途に彷徨するであらう。民衆は依然として無宗教者だ。

其れ故に我々は、宗教と社會改造問題との切線を考察するにしても、其れが歐洲諸國の思想家に問題として現はれた其れとは違つた形のものとしてなければならぬ。彼にあつては、如何に

して、社會構成の文化的良心へ深く喰ひ入つて居る傳統的宗教の不條理を批判し、新しい信仰の上に新しい社會を建設しようとするか、或は全然宗教生活を否定し去るかであるが、我れにあつては、如何にして、新社會構成の文化的良心に一の根基を與へ得べき宗教的價値意識を形成し、發達せしめ得べきかである。元より我れにも既成の宗教と其れの社會集團とがあつて、批判せられ、改造せらるべきは勿論であるが、其れによつて社會自體の改造に資するところは割合に尠少であらう。我々は今其れに多くの論議を費さうとは思はない。

一一 宗教家の所謂社會的活動

併し現在の成立宗教が社會改造の問題と現にいかなる接觸を持つて來たかを檢するは、必ずしも不必要なことではあるまい。

私を見るところでは、また恐らくは誰れにでもさう觀察せられるであらうと思ふが、現在我國の宗教は社會問題とは無關係に居ない。専門の所謂宗教家たる僧侶牧師等は、其れが自らの宗教を傳道するとき消極的に社會問題と接觸して居るのみならず、更に積極的に其の接觸を意識して活動する場合もある。其の一つは所謂社會事業であり、他は協調主義的宣傳である。此等は各派の宗教により競争的に爲される一の流行的形勢をつくりつゝある。佛教各派の本山の中には社會

課さへ設置せられて居る。

けれども其等の改造運動は、其の精神に於て我々により拒避せられ、排斥せらる可きものとなつて居る。宗教家の社會運動は少しも我々を助けはしない。其れは社會を改善するよりも却て改悪する我々の敵だ。彼等は現在の社會的狀勢に就き、何等の觀察も無く、また其れを理解する爲めの豫備的知識をさへ持合せて居ないに拘らず、單に社會の現状を支持し、勞資の協調を主張する。彼等の間の通り言葉は民力の涵養である。此の如き運動の何れに社會の改造があるか、また眞の意味の民力涵養があるか。彼等の爲す社會事業も亦其の同じ精神の上に立つが故に、よしかに其れの事功は相當のものを見せて居ようとも、私は此れに何等の尊敬をも拂ひはしない。何よりも彼等に憎む可きことは、其等の運動を爲しつゝ、其れが彼等の宗教的情熱より生れず單なる外形のために爲されて居ることだ。また進んで彼等は、其の運動により頻りに政治的當路者の歡心を求めつゝあることだ。其の態度には唾棄すべきものがある。

今日一部の評論家が全然的に宗教を否定しようとするのは、現在の宗教家の態度に顧みて無理からぬ點があると思ふ。彼等宗教家が其れだけの運動を續けても大した結果を擧げ得まいと私は思ふから、寧ろ常には彼等の運動を無視して居るものではあるが、併し其の態度の不純と淺薄とには、輕蔑と義憤の念を懷かざるを得ない。

然らば彼等宗教家は、社會の問題に對し、何故此の態度を取るに至つたか。第一には、成立宗教の現状による。今や専門の宗教家に、潑刺たる宗教的情熱は枯れて了つた。そしてたゞ社會よりの呵責の聲を聞く。彼等は現代の時勢に適應した何等かの活動をしなければならぬと思つた。其の物質的活動は社會事業となり、其の精神的活動は協調主義的宣傳となつた。其れだけの事である。其れ以外に彼等の運動の動機は無い。然るに今日普通の社會人が、特別の感激を持たないで社會改造の運動に携はつたとすれば、彼等の常識は過去のブルジョアカルトにより養成せられたものであるから、其の運動の精神も亦其の常識以外に出ることが出来ない。況んや今日専門の宗教家は、其の教養に於て普通の社會人に劣るのだ。第二に今日の成立宗教は民衆の非宗教心の爲め漸次に壊滅せしめらるべき運命に到達して居る。少くも經濟的に、今日の教團は危機を眼前に望んで居る。彼等は何等か其の地位の安固を齎らす計畫を爲さねばならなくなつた。其の最後の依據は政治的當路者だ。兩者は社會に對する態度に於て相一致するものをさへ持つた。其れはすべて現状にあつて多くの利益を享け、社會的變化によつて其の利益を失ふべき運命にあるものが、現状の維持を根本原則と爲す其の行爲原理の一致であつた。宗教家は政治的當路者に依據し其れを利用し、また逆に政治的當路者は宗教家に依據し其れを利用した。宗教家が其の生活の安定を計る代償として、協調主義的思想の一宣傳者となつたのは當然の進み方である。我々は此

の如き現代宗教家を忌避して、其の運動を排斥し壊滅せしめなければならない。

一一 社會否定と宗教否定

今私が例示した宗教家は違ひ、熱心に其の宗教生活に這入つては居るが、社會改造の問題に何等の興味をも感せず、其れに冷淡な態度を取つて居るか、或は進んで、さうした社會改造の問題へ専門の宗教家又は宗教生活にある社會人が關心を持つことを必要とするかして居る一部の宗教家がある。虚偽の前提の上に立つた現代社會制度の更改によつてのみ、眞實の人間生活が成立し得ると考へる世の改造論者と社會運動家に取つては、此の宗教家の態度は甚だ憎む可きものになつて居る。何故なれば、クラルテ團の公言の如くに、現社會にあつて何事をも爲さないものは、彼等から見れば現状維持の闘士に外ならないから。

私自身の考へとしては、宗教生活に這入つたから社會問題に没交渉となることはあり得ない。宗教的價值生活は、眞と善と美との生活より全然的に離れたものでは無い。いかにも宗教は倫理的罪惡をさへ淨化し、其の儘に受取る。併し其れは、宗教的價值生活が道德的價值生活と本質の違つたものであることを現示したに過ぎない。道德的背倫が藝術美の對象になり得ると同じことだ。宗教的價值生活が現實世界に發揮せられれば、殊更に偽と惡と醜との生活になることはあり

得ない。却つて人間が宗教の根基に立てばこそ、現實社會の不合理を根本的に匡正しようとする不動の信念を發揮し得ると思ふ。宗教生活は理想を認識するに止まらず、更に深く更に確かに此れを認識するものなるが故だ。

けれども或る宗教家が社會的現實の問題より没交渉にならうとする氣分を私は理解し得ると思ふから、深く彼を問責するものには無い。宗教は強制や説明によつて動かされ得ない。其れは我々の自律的生活の中の最も自律的なるものだ。彼が靜かに體驗し通した結果、猛然として其の着眼と意志とが現實の社會構成の精神の上に回轉せられて来る日を私は待たうと思ふ。此の無關心は宗教自身の本質から来る。宗教は我々の意識の最も深き源泉に歸り、たゞ其れのみを眞實在とし、宇宙と人生との上に其の眞實在の味識を光被せしめようとする。神のみ眞實であり、全體であり、其他は價值に於て乏しい。其れ故に彼は、社會構成の精神が現に何であらうと、其れに多くの關心を持たない。宇宙と人生とのすべてを毀るもひとり神を破ることは出来ないからだ。

唯物史觀説の上に立つて宗教を全く否定するか、或は此れを許容するも經濟的價值生活の上部構造たるに過ぎないとするものには、私は全然賛成し得ない。ナトルブも言つた如くに、唯物史觀説が經濟生活を生活開展の主動力と見たのは其説の弱點では無く、寧ろ其れの甚だ優れた着眼であつたとしても、價值の位列の逆轉を爲したことは、根本の誤謬であつた。宗教生活は否定せ

られることが出来ない。また其れは經濟に對しての上部構造でも無い。此等の論者に對しての最も嚴肅な反對としては、我々は多くの論議を費すまでも無く、たゞ我々の文化史を指して、其處にいかにも儼然たる歴史的體系的宗教生活が存在するか、及び其の生活の價值を發揮する爲めに、人類がいかにも容易に其の生物學的生命を此の生活の前に犠牲と爲し得たかを示せば其れで十分である。宗教はたゞ此れを生活し得るものに取つてのみ眞に實在する生活なのである。

一三 宗教の本質と社會問題

宗教とは何であるか。其れは我々の生活の嚴肅さを體驗するところから出發した。形而上學的の實在は、我々の知識により認識せられはしない。たゞ人生の嚴肅さの體驗は、其の嚴肅性の根據を形而上學的の實在に求めざるを得ない。其處に我々の靈のみの交通し得る一つの途が開けた。宗教が其れであつた。此の故に宗教的生活は、ひとり覺照し、ひとり充足する。靈と肉との區別は宗教の本質を明かにしない。宗教は靈と肉とを併せての生命其のものに對向する。其處には生と死とへの一元的信仰があり、眞と善と美とへの二元的價值對抗が消失した。

宗教は教育及び藝術と並び、我々の社會生活に理想主義の信念を確保し得る本據となることを私は既に述べた。併し宗教は其の自律的生活の中の最も自律的なるものなるが故に、理想主義の

生活の中に不動なる最後の確信を與へる。宗教によつて、無ければ、煩惱充滿の現實的人格を組
成員とする我々の社會は、究極の完成を爲す事が出来ないであらう。我々の本能は、我々の思想
と道德の價值により克服せられる資料とはなるが、其の對抗は永遠に互る。且つ本能は、其の價
値により克服せられて究極の圓滿具足を得ることは難い。其れ故にたゞ思想と道德とを本據とす
る社會改造は、常に何等かの不満を伴ふであらう。宗教は人類の社會的生活に取つても亦實に究
極の涅槃だ。

私は今さうした社會的生活の完成せられる一二の場合を例示するであらう。我々は所有欲を持
つ。其れは私有財産制度の生れる根本源泉だ。勿論私有制は此の私有欲のみの果實では無く、其
他に重要な數原因を持つが、其等の原因の悉く除却せられた時にも、私有欲は最後の絆しであ
る。此の煩累を脱するには宗教的確信に依るの外は無い。例へば今此れを我々の直ぐに當面する
問題として見れば、私有制を廢棄して其れで無い社會制を得る爲めには、幾多の改造案を得るこ
とが出来なければならない。其等の中の究極のものは、我々が今直ぐに自らの所有するものを捨てる
か、若しくは其れを捨てる爲めの準備を爲すことであらう。此の決心が民衆になれば、他のい
かなる改造案によつて、私も私有制は完全に廢棄せられはしない。然るに現社會にあつては、其の
所有するものを捨てるか捨てないかは其の個人の任意であり、よし彼が其れを敢てしなかつたに

せよ、社會は彼を道德的に責めることが出来ない。何故なれば私有制の社會には、私有制に適應
しての道德が成立して居るから。併し其の道德的に容認せられ得る行爲の積層によつては、社會
は永遠に私有制を脱し得ない。結局私有制の更改に最後の鍵を握るものは宗教に外ならないので
ある。

我々の英雄主義も亦人間の本能的表現だ。我々は何等かの點で社會から認知せられ、何等かの
卓越で他人の上に位置したいと欲求する。其れは勿論、現在の社會制度により異常に發達せしめ
られはしたが、社會制度を離れても滅却せられることの無い人類の根本性向である。英雄主義が
廢棄せられるのでなければ、社會構成は更改せられ得ない。併し其の廢棄がどうして起り得る
か。斷じて思想と道德とのみによつては無い。所有欲は天國を所有することによつて淨化せら
れた。他によつて認知せられたいとする性向は、神により認知せられることを以て救済せられな
ければならない。其時社會人は社會の何人の前に屈従し、其の平俗なる生活を生き通はしたとし
ても、毫も悔ゆるところが無いであらう。其れは社會に於ける英雄主義の究極の救済であり、其
れ無くしては、社會は完全に更改し得られないのだ。勿論天國の所有や神による認知の感情は、
普通の意味での所有や英雄主義とは違つたものであるが、人間的性向の發揮としては、同じ直線
を追求したものだ。たゞ宗教は我々の本能を完全に淨化し、救済し、廻向せしめることが出来

た。其れは思想と道德によつては期待し得られない最後の寄與を社會の上に爲す。

社會的倦怠は個人的生活に於ての其れの如く、正しく社會的生活の前に望む大いなる危機だ。個人的倦怠は、却て此の社會的倦怠を第一次的能因としての産物だ。社會組織網が緻密となればなるほど、其の變化形式は固定し、随つて社會的倦怠は蔽ひ難き險惡の空氣を醸す。其れは社會の不合理でも無ければ、又其の不道德でも無い。社會には正義と善さへあれば其れで十分だと考へるものは、まだ十分に社會生活を透察して居ない。社會には不合理と不道德とより以外に、なほ壊滅への力強き要因が動いて居る。社會的倦怠は其中の一つだ。然るに此の危機を完全に救済し得るものも亦人間の宗教的生活の外には無い。

社會的輕佻は社會的倦怠の對角だ。けれども其れは社會の對角線的形勢にあつてのみ現はれるとは限らない。寧ろ其れは同じ事情の上に平行的に現はれることが多い。我國現今の社會は正しく其の兩者を併せ含んで居る。社會的の倦怠と輕佻とは個人的の其等の誘因である。併し倦怠が我々の生命感自身の問題として道德的批判の對象となり得ない如く、同様に生命感自身に基づく輕佻の過失は、道德によつてのみ批判せらる可きで無い。例へば自殺は或る場合に輕佻であつたとは言はれても不善であつたとは決定せられない。此の如き社會的輕佻も亦我々の宗教的生活にあつての問題になるのである。

右の如くにして、我々の社會問題は經濟や政治や道德の關係し得ない多くのものを其中に含む。人生は其等の文化生活よりもより、深き圏域の問題に當面し、其れは結局我々の宗教的信念により解決せられる如くに、社會も亦其れと同じ究極の問題を其中に含むのだ。しかも其の宗教的問題は、すべての文化生活を覆ひ、其れが究極の祕密を握る。社會改造のあらゆる努力、理想主義の社會的實現は、最後に於ては宗教の殿堂に朝するのだ。

我々の時代は無宗教の民衆を以て充滿する。其處には永遠に社會改造の政策の實現期を見ない。民衆は新たに宗教的の教養を得なければならぬ。併し其れは再び我々の教育の問題だ。其處には餘りに宗教的空氣が缺乏した。學校と家庭に始まる情操教育は、今日最も蔑視してならぬものゝ一つになつて居る。

現今の政治

一 政治の遊離

政治は我々の宗教、藝術、學問など、並立する一つの文化生活である以上、其れだけが他に優つて特別の注意を惹かなければならぬ理由は何處にも無い。しかし民衆の文化が啓發せられず、諸方面の文化生活が其の調子を揃へて興隆して居ない時代には、民衆は其の生活の最も内的なものと、及び最も外形的なもの、生活の兩極端に特別の注意を置く。

最も内的なるものは、直ちに生活の神祕と結びつき、生きることの意義を考へしめるものであるから、いかなる原始人も其れを無視することは出来ない。のみならず文化の啓發せられて居ない未開の時代には、人間の生活は自然其のものと直接に面接し、文化的機構に關與する機會が少ないから、生活の享樂乏しく、自然の威壓を感ずる程度は高い。此くして一面には、宗教の諸形式が他と均衡の取れない發達を示す。其れと同時に個人の價値的自律心が發達せず、社會的機構が機械的に其の社會の成員を支配する力も亦乏しいから、社會の規制は専ら個人的英雄の力を

以てする外部的統制である。社會とは、互ひに相食む豺狼が其の相互的損失を無くする爲めに契約を以て組成したものだと言ふ社會學說や、其他すべて個人の諸本能を基礎として社會の成立を説く學說が過去に榮えて居た所以のものは、其の時代の社會機構が緊密に組織的で無く、個人主義的であり、またアナキカルであつた證據である。其の時代には政治生活が社會の主たる注意を引く。そして政治生活が個人の英雄主義的、浪漫的なる興味をそゝり、政治は才能ある人間の最も好ましい獵場となる。過去の歴史が殆どすべて政治の歴史であつた理由は其處にある。本來政治は個人主義的英雄主義と何の關係も無いものであるが、右の如き發達を以て兩者の結合が緊密になつたとすれば、民衆の文化が著しく啓發せられ、社會の機構が過去と比較の取れないほど構成的、社會的となつた場合にも、なほ其れの政治からは英雄主義的特色が離れない。そして政治は民衆の日常生活に關係の薄いものとなり、所謂政治家の集團は、一種の山師的人物を以て充たされる。政治は我々の社會的・文化生活の中で、他の何れよりも早く硬化し、腐敗した。勿論其れには資本主義が發達し、個人主義的企業と政治と結托することが、近世になつて殊更りに強く働らき出した事實を無視してならない。社會的、産業的機構が緊密に構成的となるに隨ひ、社會の外部的規制は、其の機構自身の機械力を以てすることになり、民衆の政治生活は自づから其處に満足せられたから、民衆が日常普通の生活を營むには、所謂政治家の努力を借ること少なく、

政治に對する普通の民衆の興味は乏しくなり、隨つて政治家の腐敗を其儘に看過することゝなつた。政治の腐敗は層一層其れの程度を深めて行く。其れは世界的狀勢といふ可きで、敢て我國に特有の現象では無い。

例へば現在の立法府に參與する代議士を始めとして、府縣郡市の議員なるものゝ素質人格乃至教養を考へて見よ。我々が個人的に其の私生活を熟知するものゝ何れに就て見るも、私は彼等を純良の政治家だと呼ぶことが出来ない。辯護士、醫師、地主、會社の重役などを其の職業の主たるものとし、其等を除き去れば後には幾千の人員が残るか。地主、會社の重役等は、其の經濟的利益を保障する爲めの利己心と名譽心との外に他意無く、辯護士、醫師等は純然たる名譽心から議員となり、議員となつて徐ろに實業家との結託を考へる。犠牲的精神を缺き、紳士としての氣品を持たない。國家乃至縣郡を経綸する爲めの教養と識見に至つては、全然此れを缺如する。其の病弊は議會に於て遺憾無く暴露せられて居るが、なほ地方の府縣會郡市會の實情を見るときには、其の腐敗は議會の其れの匹儔を超越し、眞に唾棄す可きものが多々ある。民衆の生活と立法府とは無關係に進んで行かうとして居る。

二 明治時代と軍國主義

日本が江戸時代より維新時代へ進んだときの社會的事情は、すべての點に於て革命後の勞農露國の其れに類似して居る。中にも著しい類似點だと思ふのは、他の諸國が産業的にも商業的にも可成りに眼覺ましい發達を遂げて居る中へ、産業的に甚だ未發達なる状態のまゝ突然現はれ出たことである。維新當時の日本に對して諸外國は速かに通商を開始しようとするし、革命後の勞農露國に對しては、正式の通商を開始しない許りで無く却つて其れを封鎖しようときへして居る點で、兩者の間には著しい相違があるとも見られる。けれども露國に對して通商しなかつたのは、其の投資や爲替が回収せられ得るや否や露國の經濟的實力を大いに疑問にして居たのであつて、通商其のものを欲しなかつたのでは無い。何れの強國も、出來得べくんば一日も速かに、露國を經濟的に公認したかつたのであつて、當時と雖も出來得る最高可能度に於ては通商を爲し投資にも着手して居た。維新當時の日本は、經濟的に世界の貧弱國であつたから、諸外國は熱心に通商を希望したにしても、其の經濟的實力を甚だしく超えての其れを希望しては居なかつたであらう。また我國の産業を大いに興隆する爲めに大量の外債を募集しようとしても、其れは不可能に終つたに相違無い。要するに産業的に著しく未發達なる状態にある日本と露國とが世界的地位を維持して行く爲めには、同じ性質の國家的努力を爲さなければならなかつた。

其の國家的努力の第一は、軍事的に他の外國より侵犯せられないことであり、第二は、産業的

の構成を發達せしめることである。日本は維新當時確かに此の二つの事業に全力を費やし、其の努力は世界大戦の頃まで続けられて來た。露國はやはり其れと同じい仕事を革命後に爲し、今なほ其の方向に進みつゝある。産業的に未發達の状態にある國家が、先づ第一に軍國主義となることは今日の世界としては已むを得ない。日本は最初に隣國の支那と戦ひ後に歐洲の露國と戦ひ、ともに勝利を収めることが出來た。支那も露國も、其の戦争の當時世界に恐れられた強國の一つであつたから、其れと戦端を開くことは、日本の國民に取り偉大なる試練でもあればまた冒險でもあつた。たゞ此の一點に國力を集中して必らず勝利を収めるので無ければ、日本の地位は世界的に危険であつたのだ。日本の民族を今日までに興隆せしめた第一の功績は、全く軍國主義に歸せられなければならぬまい。勞農露國が其の革命を成功せしめた所以も亦専ら軍國主義の勝利にある。トロツキイは全力を擧げて赤衛軍を訓練し、國內の叛亂を平定し、諸列強の侵入を防禦し、其の難業の何れにも幸運に成功した。露國は遂に世界の一強國として、其の独自の地位を確保することが出來たのである。若し今日にも露國の軍備が薄弱になつたとすれば、勞農露國なるものは永遠に壊滅しなければならぬであらう。日本の軍國主義でさへも世界のあらゆる侵犯に堪へることが出來、また其の實力を世界に容認せしめ得るまでには、半世紀の歴史を閲みした。日本は全國を擧げてひたすら其の軍國主義の完成に努力したのであるから、國民の理想は單純に統一

せられ、且つ其の理想の重要さが國民の誰れにでも容易に理解せられることが出來て、國民の行動はたゞ其の一點に向つて進んだのである。

三 産業的構成と道義心

産業的構成は、維新當時既に福澤諭吉先生の如き先覺者が現はれ、熱心に國民へ其の必要を説示せられたため、國民は次第に其方へ動いて來たが、しかし封建制度より突然商業主義の國家へ移る無理をしたから、所詮は士族の商法となる失を免れず、産業的發達は軍國主義の其れと平行することが出來ないで、半世紀の歴史を造つた。併し其れにはなほよい特色をも伴つて居たといふことには、國民は封建時代に特有の士魂を完全には失はなかつた。實業家の中にも紳士道を守るものはまだ幾らか残つては居た。

産業的構成の發達が顯著となることの出來なかつた日本へ、好運にも其れの發達の最もよい機會を與へたものは世界大戦である。數歳に互る其の大戦の間に、日本は完全に世界の經濟的強國の一つとして加はり、其の産業なり商業なりは、言葉通りに世界的地位を占めることになつた。併し此のときは同時に國民一般へ道義的頹廢を加へる絶好の機會となり、商業主義的自由主義、即ちブルジョア、アナキズムの道義觀念は國民のあらゆる階級に行き互つて、永久に挽回し難

き趨勢をつくつた。日本は大戦を經過し、物質に於て大いなる利を取り、精神に於て大いなる失を爲したのである。

四 明治の理想と大戦後

のみならず世界大戦後の世界の形勢は一變した。列強の勢力關係には變更が加へられ、各國の經濟的生活には着眼の根本的改革が必要とせられ、社會制度に對する民衆の良心には革命的轉回が起つた。まことに大戦を一期として、其の戦後に價値の劃時代的顛倒が生起したのである。何れの國家も今は國策の建設に惑つて居るのだ。

國家の經濟生活の上からも、從來各國の取つた自由商業主義は、必ずしも國家を安泰ならしめる所以で無いことが氣付かれ始めた。例へば先きに私が英國の一實例を擧げた如くに、英國の生きる經濟生活は國民に大いなる危険を負擔せしめるものであることが、英國民により自覺せられ出した。其れは同時に、封鎖の苦難を経験した露國の自得させられた感銘でもある。海洋中に貿易上の好地位を占める英國や日本は、其れにより却て大いなる危険を前途に望むことゝなつた。各國は世界の強國たる地位を永遠に確保せんが爲めには、其の國家的經濟生活を先づ自給的たらしめなければならぬ。近時バアトランド・ラッセルが、世界列國の將來を豫言したところを見て

も、今後の強國の資格は、第一に領土の大範圍を持ち、其の領土の生産物を以て十分に其の國民の生活を保障し、敢て外國貿易に依據しないことであると言ひ、其の條件に適合するものとして、米國と露國と支那とを擧げて居る。ラッセルが豫言して居るやうに、今後の世界は、米國と、支那と聯關した露國と、亞弗利加と歐洲とを併せての歐羅巴聯合國と、此等の三大區劃に分割せられ、勢力の均衡を保つことになるや否やは、全くの推測であるから然りとも否とも答へられない。しかし其の何れにせよ、世界の列強が從來強國として立つて來た資格に一大變化の來たことは疑ひの無い事實であるし、隨つて列強の勢力關係に今後は一層大きな變更が加へられ、各國は其の國策の根本的建て直しに着手しなければならぬ。日本も亦其の渦中より脱することが出来ない。明治維新以來取つて來た國策の軍國主義にも産業的建設にも、根本的の反省が必要となつた。今や軍國主義は其の役目を完全に果たし、産業的建設は機敏なる方向轉換を策しなければならぬ。一例を擧げれば、生絲や絹織物によつて貿易の世界的地位を占めて居ることは、國家の大いなる危険であるとすれば、國內の養蠶業に斷然たる方向轉換を行はなければならぬかも知れない。産業の發達を個人的企業に自由を委し、養蠶に適するが故に生絲を、茶を産するが故に茶を、國家の主要物産と爲し、世界的に有無相通じようとする自然主義、自由主義は、今後の産業方針として立つことが出来ない。ラッセルの如きも、日本は現在の地位を將來に支持

し得る希望を持たないとする悲觀説の理論根據を公平に提示しつゝある時だ。我が國民に新らたなる奮起の覺悟が目今痛切に必要とせられる。併し日本は、其の國民は、今現に其の國策を持つて居ない。過去の目標は既に達せられ、新しい目標は未だ成立するに至らないから、國民の理想に混亂を生じ、其の統一は根柢より破壊せられることゝなつたのである。

國家の理想に就き、さうした變革の起つて居る他方では、資本主義對社會主義の争闘が大戦以來殊更に顯著となり、日本も亦當然其の渦中に投せられた。社會主義は資本主義よりも正しい道義的基礎の上に立つて居るから、國民が理性的に自覺せしめられ、ば其れだけ強く社會主義的思想へ傾くのは當然である。のみならず日本も大戦以來は、殊に顯著に其の産業組織を發達せしめ、國民の經濟的生活基礎は歐米の其れと本質に於て何の相違をも持たぬものとなつたから、勞働争議や小作争議を頻發せしめ、民衆のあらゆる着眼に階級的特色を強烈ならしめたのは、社會的狀勢の自然的推移といふものである。しかし民衆は、日本として、世界の列強の一つに伍する國家として、此の問題をいかに解決すべきかにつき確乎たる見解を持たない。國民の理想に動搖を加へる要因の一つが増加したのである。

私は先きに大戦以來國民の道義的良心に頽廢の起つたことを言つて置いた。既に理想を失ひ、今また其れの根據である良心に頽廢を見た以上は、日本として現在は重大なる時期に際會して居

ると私は思ふ。其れは民衆の普通なる日常生活には何等の影響をも及ぼさないかも知れない。随つて民衆の政治生活には、相變らず幾干の新味をも加へないであらう。けれども其れは將來に於て民衆の普通なる日常生活にさへ、大いなる關係を及ぼす問題となることは必定だ。我々は斷じて舊式の政治家に國家の政治を委ねて置くことが出来ない。我々自ら立つて彼等の手より我々自らの政治を奪ひ、我々自らの創見と生活とに立脚した新政治を、今やいとも堅實に、雄渾に、建設しなければならぬのだ。

五 既往の政治と我々の政治

歴史は一貫した生命を以て動く。民族の傳統と現實とを以て動く。其の理想は歴史の初發創造とゞもに定まり、或は甲し、或は乙することが無い。個人、家族、郡、縣、地方の狭少なる、すなはち抽象的なる領域より、全民族的、全社會的、全國際的、全世界的である廣大の領域、すなはち生活の全我的具象性へと自己を救済し、其の雄圖の確信を強めて行く。併し我々の政策は、甲の目的を完了し、乙の其れに着手するといふやうにして、展開不息のものであるが、私が論じ來つた如く、日本は今や甲政策の目標を現實化し盡して、乙政策の萌芽を衝動の混沌裡に内感しつゝある。既往の標準を以て現今の時代を察知しようとするものは誤謬に陥る。彼の標準とする

ころ既に業に其の用處を失つたのだ。政策の目標こそは實に一機一境なるものだ。我々はたゞ自らの衝動の洪波浩渺白浪滔天處より悲痛三昧裡に凝結し來るものを待望する。此れを生むは此の衝動を内感し得るものにのみひとり可能だ。即ち其れは我々青年者の偉大なる責務でもあれば、また當然なる特權でもある。

我々は近來はご事毎に其の批判を老年者と異にすることを痛感するときは無。老年者と青年者と、其の標準、其の要求の矛盾し、衝突する、恐らくは維新以來今日を以て頂點とするであらう。老年者の可とするもの、すなはち我々の否、老年者の不能とするもの、すなはち我々の能、老年者の逆とするもの、すなはち我々の順だ。既成政治家の全般を擧げて新代未成の其れに席を譲る可きときが來た。いな彼より譲るのでは無い、彼れ自ら謝するの外無く、我れ自ら得るの已む無き推移だ。固定を流動へ廻向するのだ。抽象を具體へ轉入するのだ。

過去の政治生活にあつては、政治家たることは特殊の職業であつた。民衆は自ら政治に能力無きものと自認し、一切を擧げて其の職業的政治家の手に委ね、敢て顧みるところが無かつた。政治が實生活より遊離し、表皮的の現象として萎縮した既往にあつては、其れに關與するに職業的の専門知識が必要とせられたであらう。今後の政治に其れは必要で無く、政治は民衆のものである。其の問題の實相を解するには勿論、いな既往よりも一層、専門知識専門研究が必要とせられ

るが、其れの批判の識見と良心とは職業的、専門的であつてはならない。

既往の政治は地方的利權にのみ汲々として、全國的利權を眼中に置かなかつた。政治家の氣宇小さく徒らに私欲私情を固守したからである。政黨者流と言へば一種の臭氣を持ち、健全なる民衆の指彈を受けて居る事實が明示するやうに、過去の政黨は國家の政治に大害を加へた許りで、何一つ利福を加へはしなかつた。何々會社への補助金、何々鐵道の敷設、何々産業の保護と、議會で問題にせられる企畫の裏には、如何なるときにも政商と會社屋と辯護士と請負商人との唾棄すべき隱謀結託が成立して居た。一度甲政黨が政權を得れば、其の黨員の持つ自働車の數からして殖え、乙政黨が長く政權を離れて居れば、病氣の時の入院料さへ拂へないといふ事情が、其間の消息を語る。我々は現在の政治家、政黨を日本の現實に持つことを、何よりの耻辱と感じて居る。

既往の政治に於ける着眼は一時的であつて永遠的では無かつた。甲政黨乙政黨の黨是とするものを比較して見れば分かるやうに、彼等政治家には、一貫した具體方針が無い。甲政黨が政治の責任者として立つたときには乙政黨は常に是々非々主義を取るといふが、一定の標準を取るべき政黨に是々非々の語のあらう筈は無い。

既往の政治は外形的であつて内面的なる思想問題の理解を缺いた。思想問題を理解し、若しく

は少くも其れに興味を感じ得るだけの心的弾力性を既往の政治家は持ち合せて居なかつたのである。然るに此點こそ我々に取つては最も重大なる問題であり、彼等政治家の一擧手一投足がすべて我々に不満を與へて來た所以である。政治家の中の相當に新らしい人物だと言はれて居るものでさへ、思想問題を受け取る準備態度をつくつて居ない。例へば彼等は自らの英雄主義や官僚主義をさへ、其の人生觀の中でまだ克服しては居ない。

既往の政治は、殊に外交問題に就て高邁なる執意を缺いて居た。英國に對して、米國に對して、また露國と支那とに對して、日本の外交には一國家としての日本の人格が表現せられては居なかつた。其れはたゞ隨時の交誼を盡くすに止まつた。私は日本の外交が非紳士的であつたとか、或は辛辣であつたとかいふのでは無い。恐らく日本の外交は、道義的に最も惡意の少ないものであつたらうと思ふのであるが、其のかはりにまた、積極的に特に道義の熱情を湛へて居るものでも無かつた。要するに可も無く不可も無い、中性的なる凡俗外交であつた。

六 人口問題と農業問題

我々は今眞に日本の政治問題を熟慮し、甲か乙か何れかに國家の取る積極的方針を決しなければならぬ。其れは從來の政治家により一度も顧みられることの無かつた問題許りである。何故

なれば其れは一地方的、一會社的、一政商的問題では無く、眞に日本が國家として、全國的、永遠的、共同社會的に解決しなければならぬ問題であるから。日英同盟は信頼するに足らない。日露、日支、日米のいかなる同盟も畢竟するところは國家の存立に最後の安心を與へるものでは無い。日本はひとり日本の途を、日本の國民を以て歩まなければならぬ。自然の成行きを常識によつて判定しつゝ進む國家の政治は、今後の國際關係を以てしてゆゝしい危険事である。日本の生活を安定ならしめる途は、日本の國民自身が創見して、此れを發展せしめるのでなければならぬ。其の問題を解決したからと言つて政商と會社屋と辯護士と御用商人とは何の利益をも受けないであらう。たゞ其れは日本の生活の宿題を解決するものとして我々のゆるがせに出来ない事業なのである。

現代の日本が今直ちに根本の方針を決定しなければならぬ問題には次の如きものがある。此れを研究し、熟慮し、聰明なる批判と堅固なる操守を持つることの出来る人は、眞の政治家と呼ばれ得るであらう。

日本は第一に、人口問題を解決しなければならぬ。日本の人口が、今後なほ絶えず増殖するものか、増殖するとせば其の原因は何處にあるか、殖民または移民を爲し得る餘地は何れにあるか、其れが不可能とすれば日本は如何なる處置を取るべきであるか。日本の人口が今後なほ絶え

す増殖し、我國以外何處にも其の殖民地または移民地を求めることが出來ず。國內の産業は其の全人口を收容するに足らず、此れを養ふ食糧も亦十分で無かつたとすれば、日本は結局自滅するの外は無い。然るに政治家は從來此の重大の問題に一瞥をすら與へて居ない。所謂政黨者流の腦中には嘗て其の問題が風の如くに一過したことさへ無いのである。世界平和の途を論ずる歐米の識者は必らず日本の帝國主義を問題視するが、日本の帝國主義を問題視するものはまた必らず日本の人口問題を世界平和の途への脅威の一つとして論じ、日本自身が其れに就き何等の方策をも講じて居ない不誠實を暗々裡に責めて居るのである。恐らく世界は、日本がいかに其の軍國主義的精神を改廢したにせよ、依然として其の人口が増殖を續けて居る間は、日本の精神を帝國主義的に見るであらうし、また其の推測は當然の理由を持つて居ると私は考へる。世界の觀察如何に拘らず、日本が自ら人口問題を閉却することは、日本の將來に重大なる危機を齎らすものである。

日本の食糧自給の問題、随つて農業の將來、小作問題の根本的解決は、日本の運命を決定する重要な仕事である。由來農業者と工場労働者とは、其の經濟生活の單位を異らしめる爲め、兩者の根本的調和は現在の社會制度の下では不可能なるものであるが、日本の如くに特殊の食物を取り、且つ其の農業が從來とても可成りに集約的に經營せられて來たところでは、農業問題の將來

は、國家の運命を決定する主たる要素となつて居る。政治家は現在、此の問題に全く頭を用ひないのでは無く、殊に小作爭議の頻發以來、世人は農業労働問題の將來を憂慮し始めたけれども、何れの政黨も、また政治家も、其れに就き百年の大計を立てず、其れの窮極的解決を一日延ばしに徒らに將來へ延ばして居るやうの觀があるのは私の大いに遺憾とするところだ。

七 教育保健其他の問題

朝鮮と臺灣の將來をどうするかは、日本の國策に大いなる影響を與へる問題だが、其れに就ても政治家は何等の意見を持たない。また國家は其れに關してのあらゆる論議をさへ全然許さない状態にある。

支那と米國とに對する外交の根本方針を樹てることは日本の運命に絶大の關係がある。今や米國は世界最高の支配的勢力であるし、支那は地勢上、日本の運命の半ばを負擔するものと言ふ可きであるが、今日此の二國との關係は従前の如くに簡單なるものでは無い。

國民の教育、國民の保健に就て、國家が根本的の計畫を立てないことは、現在及び將來の日本の生活を卑小ならしめる。職業的政治家は、國民の教育を無視して居るとは言はず、政黨はすべて其の綱領に教育の振興を掲げて居るけれども、彼等の信念には外形的のこと許りが考へられ、

教育の効果をさほど大きいものとは考へず、寧ろ國民を愚に止める方が、自らの地位を安固ならしめる所以であることを彼等は知つて居るから、事實に於ては國家として幾千の教育費をも費さず、何程の教育施設をも爲さないのである。國民の健康を進め、體格を改造することは教育と並んで重要な事業であり、此の二の計畫によつて國民の能率は根本的に改良せられるのであるから、國家は國民の健康状態を詳密に調査し、傳染病の豫防に徹底的の施設を爲すは言ふまでも無いこととして、更に國民の保健に重大の影響を及ぼすのは其の榮養と住居とであるから、國家は國民の食料品を管理し、住宅を保護しなければならない。例へば國民の榮養に必要な分量の脂肪が供給せられて居なかつたとすれば、國家は何等かの方法を講じて、其れを供給するやうに努めなければならぬ。其他の食料品の粗製なるもの、監督は最も嚴重でなければならぬ。今日全國の兒童には、其の生育に必要なだけの榮養分が供給せられて居ないことは疑ふ餘地の無い事實であるから、民族自衛の目的から考へても、其れを救済する方法を講ずるは刻下の急務である。國民の素質に關係することの最も深刻なるもの、即ち榮養と住居とを、依然として商業主義の目的物となし、自由競争に委ねて置くことは甚だしい誤謬である。其れは教育を商業主義の目的物にしてならないこと、何の相違も無い。學校が認定せられ、監督せられると同じやうに、食料品と住宅とは亦政府により認定せられ、監督せられなければならないのである。併し現在の所謂政治家

は、此の如き計畫を目して既に政治の範圍を超えたものだと考へて居るのである。

八 新 分 子 の 聯 盟

最も重要な政治の問題でありながら、既往の政治家が其れに就き何程の考慮をも費さなかつたものを私は幾つか數へ上げた。併し其等の問題を解決する仕方に就ては、既に述べたものに述べようとするもあるが、概ねは私自身も其れの解決の途を今直ちに考察し得ないものである。何故なれば其等の問題が正しく解決せられる前には、先づ其れの周到なる調査研究が必要とせられて居るからである。其れ故に私は各方面の専門家を網羅した調査機關を組織し、大膽にして慎重なる解決の方策を講ずることが切要であると考へるものではあるが、大震火災後の帝都復興計畫が、其等の計畫に就き何の豫備知識も無い所謂政治家の感情眼と政黨眼との嫉視を受け、全く無意義に歸せられた苦がい経験を基として判断すれば、よし各方面にさうした調査機關を設けたにせよ、其れの最後の判断者が職業的政治家であれば、結局は日本の政治に幾分の新味をも加へることは出来ないであらうと思ふのである。

其れ故に我々が、現今の政治を改造する爲めには先づ其れへの着手として、舊式の職業的政治家を残り無く、我々の政治生活の中から排除しなければならぬ。此くして我々は、再び我々の

一般改造方策へ歸つて來た。國民の中の新しい分子は、其れのみを以て成立した獨立の聯盟をつくり、一括して舊來の政治家に代替を迫る可きだと私は信するのである。

第十九章

現今の經濟

一 生活に於ける經濟の地位

現今の經濟生活を批評する爲めには、凡そ經濟生活なるもの、本義は何處にあるかを見極はめなければならぬ。法律は生活の形式であり、經濟は其れの内容だと考へるものがあり、經濟を法律に對せしめたときに、此の言表は可成りの點まで正當だと言はれ得るけれども、單に經濟を生活の全部的内容だと言ふことは出来ない。生活の内容としては、經濟の外に宗教、藝術、道德、教育、其他すべての文化生活の内容を數へることが出来、法律、政治をも其中へ包容する。經濟は其等の文化生活の一部分、寧ろ正しく言へば、生活内容全體の見方の一部面だ。しかも生活としては最も特質ある、また最も普遍的なる見方の一部面だ。藝術の價值、宗教の價值、又は哲學の價值を人生の中に容認し得ないものは可成りに澤山あると思ふが、經濟の價值を容認し得ないものは、先づ一人も無いと言つてよい。宗教の價值、哲學の價值は絕對的文化價值であるが、生活を強制することは無い。此れに反して經濟價值は、社會的文化價值であるが、最も確實に生活を

強制する。個人的の生活にあつて、法律の社會的強制は消極的であり、我々は其の強制と没交渉に生きることも可能であるが、言ひ換へれば法律を通じての社會交感も消極的であることも可能であるが、經濟の社會的強制は積極的であり、いかなる個人の生活も、何時、何處にあらうと其れと没交渉に生きる事は不可能であり、言ひ換へれば經濟を通じての社會交感も積極的である。社會性を最も稀薄に味はつて居るやうな人物にあつても、經濟生活の社會性だけは甚だ濃厚に味は、れなければならぬ。其れ故に經濟生活は、我々に社會的制約の必然性を痛感せしめ、随つて我々の社會的生活の内容のすべては經濟生活だとの感をさへ懐かしめる。随つて我々の經濟生活の更改は、其他すべての部面生活を更改せしめる全動力だとの感をも我々に與へる。此れは經濟の意義を過當に誤視したものだ。經濟は我々の社會生活を制約する條件として、また同時に動力として、現在のところでは普遍性の最も強いものだとは言へる。其の斷言は、過去にも全く同じく適用せられることは出来なかつたし、また今後も常に同じく適用せられるとは言へない。生活の一面觀として見た唯物史觀は誤謬ではない。しかし其れと並行して、唯宗教史觀、唯道德史觀、乃至は唯法律史觀も成立することは可能である。其等すべてを排斥しての唯物史觀を主張するものがあるとするれば、私は其時明かに唯物史觀の誤謬を斷言して、此れを排斥し、其の理論の上に立脚した社會改造方策を一括的に打破することを辭しないものである。

二 物質的基礎の豊穽

我々の社會的經濟生活の本義として私の數へるものは、次の四つである。此中の一要件でもが缺けて居たとすれば、其れは既に本義としての經濟を離れて居る。其れ故に此等の四要件は、直ちに現今の經濟生活の價值を測定する爲めの標準になつて居るのである。

第一に、經濟の意義は、我々の物質的生活の内容を豊穽ならしめることにある。此れを言換へて、我々の文化生活の物質的、または資料的基礎を醇澤ならしめ、其等の文化生活の充實に遺漏を感せしめないことだとしてもよい。併し後の言表は、我々の所謂物質的生活を餘りに手段的、資料的のものに見、其れの自律的意義を損する怖れがある。文化生活の價值は歴史的努力の中に發見せられるものであり、現在の價值附けは其れの全部では無い。新しい價值附けは生活の超越的方面にも求められるが、また同時に現在に手段的、資料的と見られて居るもの、中へ沈潜して、其れの内在的價值を發見する方向にも求められなければならない。現在のところ、經濟生活は其等未發見の價值の總名となつて居るやの觀がある。其れ故に經濟生活を物質的、資料的なる生活と呼んだときには、其處には今後發見せらるべき價值の實現の孤線が、彈力的に無限に交錯するものと考へなければならぬ。其れだけの意味を含蓄せしめて、經濟生活の本義は、我々の

物質的生活の内容を豊醇ならしめることにあると私は言ふ。

社會的機構が我々の生活を不自然に、機械的に壓迫すればするほど、其等の彈力的、可能的なる價值實現の意味は没却せられ、單に物質的、資料的なるものへ墮落するのである。そしてなほ單に物質的、資料的なる生活をだけでも保障せられることの要求を痛切に社會へ對して發するものである。其の社會にあつては、其れと同時に、藝術は娛樂としての地位を、道徳は功利としての地位を、宗教は方便としての地位をしか社會的には與へられない。即ち經濟生活の價值は、單に物質的、資料的なる其れ以上のものを發揮しては居ない。現代は正に其の時代だ。經濟生活の價值其のものが、本義として物質的、資料的以上のものを持たないのでは無い。食ふことには食ふことこの價值、着ることに着ることこの價值、同様にして衣食住のすべての部面に、其れの自律的價值がある筈だ。そして其等の價值は、無限に醇澤に、豊富に、實現せらる可きだ。

實現の可能力を越えた餘剰充足を私は必要だとは言はない。何故なれば、其の餘剰は、單に物質的なるものへ墮落するからである。例を以て示せば、ピアノの弾けない人へピアノを醇澤に供給することは物質的だ。またピアノの弾ける人からピアノを奪ひ去ることも同じく物質的だ。ピアノの弾ける人へピアノを與へ、ピアノの弾けない人にピアノを與へず、更にピアノの弾けない人へ、其れの弾ける様になる刺戟と教養とを與へることが、生活に物質的餘剰を持たしめず、其れの

の全面を價值的に生かす仕方だ。經濟生活の本義として私の擧げた物質的生活の内容の醇澤とは、さうした意味だ。

三 生産作用の自律

第二に、經濟の意義は、社會の物質的基礎を醇澤ならしめるために行はれる生産の作用が生産の作用自體として自律し、人間の創造作用としての悦びを其れにより享受し得ることにある。

私は今前段よりの順序として、生産の作用は社會の物質的基礎を醇澤ならしめる目的を以て起るやうに言つたが、生産が生産として自律する以上、生産の目的は消費にあるとは言へない。少くも消費によつて拘束せられ、指導せられる經濟は、生産か消費か其の何れかの作用に缺陷を持つたときだ。消費の爲めに必要な貨物を生産すると見れば消費は生産の目的だ。貨物の消費により、それよりも高い價值の貨物を生む。言換へれば現在の貨物を將來の貨物の資料と見て、其の貨物の價值騰價を起す作用を、消費より生産への作用連續とすれば、現實貨物の減價は消費、將來貨物の騰價は生産だ。此の場合に生産は消費の目的だ。併し消費と生産とは何れが第一次、何れが第二次として起るものでは無く、同一の創造作用の中に於て、其れの減價の側面を消費、其れの騰價の側面を生産と言つたに過ぎない。生産が創造作用と見られ、創造の悦びを享受する

この出来たときは、直ちに消費が獨立の創造作用と見られ、創造の悦びを享受することの出来たときだ。

併し消費が創造の悦びを享受することは、たゞ一色の心理學的快樂を得ることではなく、例へば學問を學ぶ悦び、藝術を鑑賞する悦びを得るといふやうに、其れの内容として、質的に其れ々々異つた悦びである。併し其の悦びを享受するときに、其の作用は最早嚴密には消費だとも言へず、たゞ人間の價值創造の絶對的悦びである。同じことは生産に就ても言はれる。生産は確に創造だ。人間の創造行動の中でも、最も創造らしい、最も人間らしい行動だ。しかし其れを絶對的に創造として體驗して居るときには、最早其れは生産だとも言へない。其處にはたゞ人間の絶對的價值創造の過程あるのみだ。此等の消費と生産とを、一の經濟的價值の創造過程として見たときには、其の唯一絶對的なる行爲は、社會よりの決定を受け、社會價值としての評價を受けなければならぬ。例へば一枚の繪畫を描くことは、自己の藝術的理想を具現し、藝術價值の絶對的實現を爲したいといふことだけでは無く、社會に對し一枚の繪畫を提供し、社會の藝術的鑑賞の資料、即ち藝術的富を少くも一點だけは社會の中に増加せしめたといふことだ。創造と生産とは、絶對的價值と社會的價值との相違だ。我々は創造に、生活創造としての悦びある如くに、生産には生産としての生活創造の悦びがなければならぬといふ。併し勿論生産の價值は社會的である

から、其の悦びの性質は絶對的價值の創造に於ける悦びの其れと、全く同じいものだとは言へない。生産に生産作用としての悦び、労働に藝術としての悦びがなければならぬといつても、すべての貨物の生産に伴ふ悦びは、藝術創作の其れに伴ふ悦びと必然的に異なる。労働の藝術化は、比論としては興味ある説だが、眞實は労働の人格化だ。大工が家を建て、農夫が耕作し、車夫が俵を牽く労働が、藝術の如くに悦びであれと言つても、其れは可能で無い。藝術は沈潜であり、其の悦びは直接に努力の苦しみを救済する。然るに右に述べた労働は、藝術と同じい沈潜の悦びを齎らすことが出来ない。其の労働の苦しみを救済するものは、ひとり社會的なる價值見地である。生産は社會的富の生産だ。また社會的労働の分擔だ。其の悦びは藝術的といふよりは寧ろ倫理的だ。其れ故に我々が經濟生活の意義として、生産作用の自律を挙げたとすれば、其れは生産價值の沈潜的自律を意味せず、其れの努力的、倫理的、随つて人格的なる自律を意味したものである。社會に於ける汚穢なる仕事は、いかに理想的なる、寧ろ極樂的なる社會に於ても絶滅するものでない。即ち人生よりは苦惱的要素を絶對的に除滅し得ないのだ。社會主義やアナキズムは、從來汚穢なる仕事の除滅を、其の理論の構成の重大なる要素として論じて來たが、汚穢なる仕事は藝術化せらる可きものではなくて人格化せらるべきもの、倫理化せらるべきものだ。労働の人格化とは、労働の主體たる人格が、他の人格の手段となつて命令せられること無く、其の主

體たる人格自身の社會的義務意識により、自主的に命令せられ、指導せられて行動することを言ふ。我々は勞働の解放を期する。機械としての勞働、使役としての勞働を解放して、人格の自律的決定による社會的勞働にまで進めることを、經濟生活の一つの意義として内感する。

四 消費と生産との社會的平等性

第三に、經濟の意義は消費と生産との社會的平等性を得ることにある。消費の獨占が不當であると同時に、生産の獨占も亦同じく不當だ。消費と生産とは社會的價值への關係であるから、其れ自身に社會的公正の倫理的要求を持つ。社會的公正とは通俗的には直ちに消費と生産との平等性を意味するまでに、公正の意義は經濟に於て發揮せられる。

社會的平等性とは、此れまでも述べて来たごとく、異質的平等性だ。各人の社會的參畫の能力に相應する相對的平等性だ。此の平等性を社會的の制度にまで固定したときに、其れは法律となり、政治となる。其れ故に社會的平等性は其のまゝに法律的要求、政治的要求であるやうに考へられるが、法律又は政治の形式へまで固定せられないでも、經濟が一つの社會生活であり、社會的價值の實現である以上は、社會的平等性は經濟生活自身の自律的要求である。そして經濟生活に於て社會的平等性の最も典型的なるものを見るのである。社會が公正の理念により規制せられ、

各人が社會的富の消費と生産とへ正しく參畫し得た時に、其の參畫は消費若しくは生産の社會的分配である。分配主となり、消費若しくは生産が其れに追隨するのでは無いし、また逆に消費若しくは生産が主となり、分配が其れに追隨するのでも無い。行爲は一の創造的行爲だ。其れが社會的價值に關係し、經濟としての特異の生活領域を開展したとき、社會的富の減價は消費となり、其の騰價は生産となつたが、消費と生産とは社會的價值への關與によつての生活名目だ。なほ其等の消費と生産とが、其れの正しい地位と程度とを保持し、社會的價值としての意義を發揮しようとするとき、其等の消費と分配とは、直ちに社會的分配としての意義を持つのである。消費は生産を豫想し、生産は消費を豫想する。また同じやうにして消費と生産とは分配を豫想し、分配は消費と生産とを豫想する。消費と生産先づあり、其等の間の交換行はれて、最後に交換の社會的公正があるとするは心理的、發生的順序だ。此の意味の交換的公正は、社會的平等の基礎となることが出来ない。其れ故に論理的には消費と生産と社會的平等性とは、人間の創造的行爲が經濟としての部面を開拓したとき、即而に、相依的に開展する經濟の本義だと言はる可きだ。

五 國民經濟單位

最後に經濟の意義は、一國民の集團的社會生活を單位とすることにある。經濟がつねに國民經

濟の名を以て呼ばれる所以は其處にある。世界的、國際的經濟生活は、我々の終極理想だ。今日といへども世界的、國際的に有無相通する經濟は行はれて居るから、經濟の本義を我々の國際的生活に取ることは至當であり、且つ事實にも合致するやうに見えるが、經濟價值は一つの社會價值であり、随つて其れに歴史的制約性を考へなければならぬとすれば、今日の經濟生活を制約する歴史的社會的單位を一國民の範圍に限るは、實は已むを得ないことだ。經濟生活は甚だよく規制統一せられた社會組織を持たなければならぬ。其の作用が複雑緻密となればなるほど、其の社會的構成を支配する規制は複雑緻密とならなければならぬ。經濟はこゝに政治と法律とを必然的に要求する。そして其の經濟生活の社會的單位を一國家に取らうと要求する。

經濟の意義として先きに挙げた三つの要件は、經濟の純理的要素だ。今挙げた要件は其等のものと根本的に性質を異らしめ、經濟價值が社會的、歴史的價值なる限り考慮せられねばならぬ歴史的要素だ。兩者の間には本質の著しい相違がある。最後の歴史的要素は、歴史の發達によつては、其れで無いものへ變化推移し得る、また必ず變化推移するに相違ない性質のものである。しかし現在の經濟生活の價值を批判する場合には、經濟の社會的單位を一國民的に考へ、其れで自足自給し得ることを本義とし、國際的經濟を其れの從と見るか、或はまた國際的經濟を經濟社會單位と見、國境を超えての有無融通を經濟の本義とし、國民經濟を其れの從と見るかに、我々の經

濟政策を立てる上に於て、着眼の著しい相違を示す。私は其の前者の見方を正しいとするものだ。純理論、純理想に於て正しいといふのでは無く、今日の經濟生活の發達は其點までへしか達して居ないと觀察した結果、標準を其點に置くが適當だと言つたまでのことだ。

經濟生活の社會的單位を一國民的に見るとは、經濟的貨物交換を國際的に全く禁絶せしめる意味では無い。我々は經濟生活の社會的單位をむしろ國際的に擴張したい希望を持つが、また現在其の希望は或る點まで達せられ、事實となつて現はれては居るが、其れを本義とするまでに歴史的事實は進んで居ないから、我々の規定は己むを得ないとしたのである。其れ故に有無相通の國際經濟が平和的に行はれ、次第に其の希望を高めて我々の經濟的理念にまで進むは少しも支障の無いことである許りでは無く、むしろ大いに歓迎すべき傾向なのである。たゞ其事を經濟に對してのみ期待するは、策の中つたものでは無い。

以上四つの要件を擧げて、私は其れを今日の經濟生活の缺く可からざる論理的前提だとする。要件の四つは經濟價值の論理的分析により必然的に成立した、其れの現實的諸面相であるから、相互に聯關して其の一をも失ふを得ない。此等の中の何れか一要素を特に取り出して、經濟生活の理想に取つたとすれば、其れは經濟生活を正しく認識し得ないことになる。例へば今或る經濟學者が、要素の中の第一を高調し、我々の物質的生活の内容を豊醇ならしめることを經濟生活の

理想であるとしたならば、其の高調の弊は快樂主義に陥ることにある。民衆の利福を増進せしめる厚生の經濟は、理想的なる經濟生活だといふことになる。併し此くの如き生活の利福より勞働の自律性、消費と生産との社會的平等性の理念は、論理的に演繹せられることが出来ない。また勞働組合が其の理想として取る勞働の自律性は、其のみ高調せられるときには勞働組合の社會的支配となり、民衆の消費生活が壓迫せられる趨勢をつくる。私は生産をのみ生活の創造だとは言はない。消費も亦同じ高さを以て生活の創造である。また創造は即生産で無い。生産は創造の一面觀だ。人間の一創造的行爲が經濟的に見られたとき、其處には消費も成立すればまた生産も成立する。其れと同時に社會的平等性の要求が成立し、また一國民的社會單位の條件も成立するのだ。此等は論理的一聯帶だ。經濟生活の理想として、其等の諸要件は同時に發揮せられるが至當だ。

六 經濟生活の現實的機械性

經濟の要件は即ち經濟の理想だ。我々はいま其の理想に照し合せて、現在の經濟生活現象を觀察するに、其れは餘りにも甚だしく經濟生活の本義より逸脱したもになつて居る。經濟生活が其の本義を發揮することは、經濟價值が自律することだ。現在の社會生活にあつて經濟價值は他の何等かの要件に従屬するものとなり、其れの固有の意義を發揮し得ないで居るのだ。我々が現在の經濟生活を改造する方策を建設することの眼目は、其れ故に經濟價值の自律性を現今の社會生活の中より救済するにある。

第一に、現在の經濟生活は經濟價值により指導せられず、經濟生活の現實的機械性により支配せられるものとなつて居る。先きに言つたごとく、經濟生活の發達は、社會的機構の緻密複雑に構成せられることを其れの必然的なる、重要な條件とするが、此くの如く高い程度に構成せられた社會は、機構としても、また機能としても、一の社會的惰性を持つこととなる。我々は此れを社會的機械性と呼ぶ。社會的機械性は其れ自身何等の罪惡でも無ければ、また生活の個性の魔酔でも無い。生活の各部局が愈々機械化せられ、構成化せられ、其れの全體的統一に於て個性的創意を示すことは、我々の文化生活の進歩だ。たゞ注意すべきは、其の機械性は生活の手段であり、生活により統制せられるものであつて、生活を手段とし、生活を統制するものではないことだ。

此の如き現實的機械性の第一に擧げなければならぬものは、利潤を主とする經濟の商業主義だ。また其の經濟の産業主義だ。原始的社會の經濟には商業主義の姿無く、交換の上の商業はあつても未だ商業主義なるものは生長して居なかつた。利潤が交換の中に成立した時代は甚だ古

い。しかし其の商業制度が利用せられて商業主義を樹立せしめ、文明の全機構が其れの俘囚となつたのは、割合に近世に近づいてからの事であり、一旦其の活動目標が成立するや、商業主義は加速度的の發達を遂げ、人間の活動は悉く利潤の標準を以て評價せらるることになつた。生産することが直ちに生活の目標では無く、生産に伴ふ餘剰價値の收得が其れであることになつた。そして利潤を收得するために社會的機構の統制が必要とせられ、自然と機械と人間とを併せて、大量的機械性の支配する一經濟單位が構成せられ、歴史に其の類例を見ない大規模の人間機械化が行はれはじめた。産業主義は更に商業主義よりも新らしい歴史を持つ。我々の世界に眞の意味の産業主義の起つたのは産業革命以後の事であるが、其の發達の加速度は商業主義の其れと調子を合せて居る。商業主義の要求無ければ産業主義は生れなかつた。商業主義は産業主義を其れの手段として取つたのだ。産業主義に就てはなほ後に論ずる機會を持つ。社會人の全活動が利潤を目標とし、活動自身の愉快を持たないやうになつたのは、人類として大いなる墮落だ。人間は生れ、人間は死ぬ。歴史の連續は悠久だ。しかし其處に生命を得て來たものゝ活動が、ひたすら其の文明の機械性のために虐げられ、衣食は薄く、獨立は失はれ、ただ此の大量的收利機械の中に蠢々たる生命を送つて其の死を待つより外に無かつたとすれば、此れは正に人類自身の手を以て人類自身の咽喉を扼したのだ。其の大規模なる生命虐殺の機械の中より人類を解放することはほど速急

を要する解放は無い。宗教は靈を救済するといふが、社會の商業主義的機械性を打破することを以て靈の救済の序幕は始まるだらう。藝術や教育の視角も其處に集中せられなければならない。今日の社會に於て、凡そ商業主義の打破を究極の目標としない如何なる活動にも、私は多くの價値を容認することの出来ないものだ。

現實的機械性の第二として、私は金融本位の經濟的社會構成を擧げる。金融本位經濟は商業主義の必然的演繹なること、産業主義の商業主義に對する關係と同じいものがあるが、其の機械性は商業主義の其れ、または産業主義の其れと性質に於て異なる。金融は金融独自の機能と構成を持ち、其れに独自の機械性をつくつたのだ。全産業を資本主義が支配する他面では、全産業を銀行が支配して居る。交換の中介として貨幣を使用し、貨幣を基礎として銀行の信用が發行せられた其の單なる機械性が、現代の經濟生活と交錯すれば、こゝに資本主義または商業主義とは自づから性質の違つた機械性を成立せしめることゝなつたのだ。手段が目的を率ゐることは人間の生活の各部分に見られるが、其れの最も適切なる實例は貨幣が人間を率ゐる場合の其れだ。今や人間は貨幣の十字架上に磔刑に處せられて居るのだ。

七 政治よりの支配

次に、現在の經濟生活は、經濟價值以下の政治價值により指導せられる危険の場合を頻出せしめる。政治運動の背景に經濟的要求あることを私は否定しない。其れ故に經濟生活を支配する政治的要求の背景に、更に他の經濟的要求があると考へることは部分的に眞だ。しかし政治は個人の英雄主義によつても動く。政黨の勢力争覇、獨裁的野心家の出現などが、強い力を以て經濟生活を支配するに至る場合は珍らしくは無い。經濟的機械性の程度の進んだ社會にあつては、其の機械性により社會の構成は緻密複雑になつて居るから、經濟生活は經濟生活自身を以て充足し、敢て政治的勢力の干渉を許さないが、其れの構成が其れほどの程度に進まない社會にあつては、此れを支配する政治的勢力の強さは甚だ高い。其れ故に我國の如くに商業主義の發達が中位に止まり、國の一方には周密なる産業文明が發達し、其の他方には依然たる封建主義文明の榮えて居るところでは、經濟を支配する勢力の中心は此等兩者にある。政黨が從來經濟的利益に干渉を加へ、國民の經濟生活に損傷を與へたことは、民衆の熟知するところだ。

八 國際的 通商の 強制

最後に、現在の經濟は國民經濟と國際經濟との板挟みに遭つて懊惱しつゝある。

經濟は本來政治と法律とより獨立した社會生活だから、緊密に國家的背景を以て填充せられる

必要を見ない。或る時代には有無相通する意味の國際的通商が行はれて居た。今日に於ても全く需要の無いところへ貨物を輸出することは出来ないから、表面的にはやはり國際的通商は有無相通のものになつて居る。しかし昔時に行はれた或る通商は、純粹に有無相通だけの意味を持つたものであり得た。貨物を輸入する土地は、其の輸入なければ生活が出来なかつたのでは無く、一國家を單位として自給的經濟は成立して居たが、なほ其の生活を快適なものとするために、異邦の珍寶を得ようとしたのだ。だから國際的通商は大した經濟的意味を持つものでは無かつたのだ。

然るに後稍々時代を経るに隨ひ、國際的通商は其の輸出先きの經濟單位へ珍奇なるものを齎らすことにより奇利を博し得ることが遍く知られ、此くの如き國際的通商を專業とする民族の集團も出來上がり、通商は専ら商業的快捷の目標にせられたのである。其れと同時に最も安價な原料品と半製品とを、やゝ未開野蠻なる地方より甚だ廉價に買ひ取り、製造工業の盛んな文化の程度の高い地方へ齎らして、奇利を博することが考へ出されたと言ふまでも無い。しかし其時はまだ國民經濟と國際經濟との間に密接の關係なく、國際經濟は世界の上に多くの害惡を生むことが無かつた。

茲に國際的通商に全く新しい色彩を齎らすやうになつたものは、産業革命とゞもに著大な發達を遂げなければならぬ運命を持つた資本主義である。機械と發明とが人間の有限的勞働力と

交替したことで、資本主義制度は其の制度の必然性に支配せられて加速度的に貨物の過剰生産を爲すの外なきことなどの原因により、資本主義の發達した國家は、自國內に其等の貨物の全部を費消する購買力を見出すことが出來ず、必然的に國際的通商を要求することゝなつた。國民經濟と國際經濟とが密接不離の關係を持つに至つたのは此時からである。先には國際經濟は自國の消費者の要求によつて起つた。今や其れは自國の生産者、特に資本家の要求により強制せられることゝなつたのだ。資本主義を維持しながら、其の生産を無限に繼續したとすれば、資本家と労働者との關係は如何にあれ、全體として生産側の貨物の價値は無限に増大して行くが、消費側の購買力は其れと釣合つた程度には増大しない。其の差引によつて生じた貨物騰價の捌け口が國外市場であつたのだ。だから國際經濟は一の壓迫だ。有無相通では無く、有の無理押しだ。

有無相通の國際經濟は、他の缺乏に乗じて奇利を博する不徳義を働らいて居たが、また其の不徳義によつての法外なる利得あるが故に其の貿易業者の悦ぶものとなつて居たが、資本主義發達後の其れは壓迫の通商だから法外の利益を計ることが出來ず、或は時にダンピングをさへ行はねばならず、其の意味では大いに道義的のものになつた。不徳義は、現在の國際經濟では同時に最大の不利益となつて居るのだ。併し此の徳義不徳義は表面的の意味のもので、眞實は全く其れの逆となつて居る。有無相通は其れ自身道義的だ。其れにより奇利を獲ること、其の通商に携はる

ものゝ動機が商業的であることは道義的でないにしても、有無相通といふこと自身は、少くも多少は道義的だ。何故なれば其處に成立した社會性は、本質的に協同的連帶的のものであり、且つ自他の人格の自律を害しては居ないからだ。此れに反して、資本主義により支配せられる國際經濟は、本質的に不道義的だ。貨物の價格や品質については道義的でも、此の場合の國際經濟は、意義に於て不道義的なのだ。自國の資本主義が何時までも繁榮し得るために國際的通商、特に貨物の國外輸出が必要とせられたのだが、隨つて其の通商は、輸出先きの國家が何時までも産業的に未發達の状態に止まることを欲し、また事實に於て其事を計らなければならぬ。例へば其國の産業が幾分でも發達しかけようとするれば、此れまで輸出を續けて來た國は、何處までも貨物の價格を低下せしめ、其の産業の倒滅を計らなければならぬ。のみならず此の通商は、輸出先きの經濟單位を自國の其れへ從屬せしめる性質を持つ。自國の經濟生活は自律するにせよ、其の自律への手段として他國の經濟生活を必要とするのだ。

此くして現在の國際經濟は、意義に於て他國の文化的發達を阻止しなければならず、また他國の經濟生活を自律せしめず之れを手段として取扱ふものであるから、其れ自身本質的に道義的では無い。資本主義は勞働の上に搾取するから、其れ自身道義的では無い。商業主義は人格價値を商品價値に從屬せしめるから、其れ自身道義的では無い。然るに今また私は國際經濟の意義を分

析して其れ自身道徳的で無いとする。すべて此等は現在の經濟的社會制度を一貫した精神だ。其の制度の前提こそは此等の罪惡を生まねば已まないのだ。

九 生活享受の粗惡

此くして現在の經濟生活は、其れを取る方向に於て確に邪路に陥つて居る。經濟生活の區々たる若干部面が罪惡的となつたのでは無く、經濟生活其のもの、軀幹と精神とが罪惡的のものになつたのだ。我々は其の機構を動かす某者々々を憎む可きでは無い。經濟生活其のもの、機構が理想を離れたのだ。其れの當然なる結果こそは戰慄すべき人格の汚濁だ。

第一に、我々の消費生活は、安價なもの、人格の創造性と光輝との失はれたものになつた。我々の使用する器具の脆弱にして非藝術的なるは言ふまでも無い。其れは一面機械文明の必然的結果だとも言へるが、機械による大量生産は必ずしも粗惡なる貨物をつくりはしない。或る場合には、機械は人力の及ばない精巧さを助けることが出来るから、機械を用ひての生産は、手藝的生産の創造性を持ち、併せて其れの粗野に代へるに練熟の技巧を以てすることが出来ることさへ言へる。然るに貨物の大量生産と其れの購買力との併進しないこと、社會に愈々富める少数者あると同時に愈々貧しい民衆のあることとは、生産せられる商品の性質に大いなる影響を與へ、商品に

は甚だ高價贅澤なる優良品あること、甚だ安價粗惡なる下級品あることとなる。そして民衆の大多數が消費する商品は其れの下級品だ。

我國には農民の数が多く、随つて其等農民の自ら所有する家屋も相當に多い数のものとなつて居るけれども、他方では借家と借家住みの人間とは、加速度的に其數を増加せしめつゝある。今日都會の借家に住んで居る人達の大部分は、嘗て其の幼時を農村の自家に生活したものであらう。然るに彼等は最早永久に借家住みをしなければならぬし、彼等の兒孫は其の借家の中で生れて居る。農業が經營として支持し得られないやうになつたときには、現在郷里の自宅に生息して居る農民も、其の郷家を離れて或は都會へ來り、或は他の利益多い農業地へ出稼ぎしなければならぬ。此くして現在の農民も亦借家に住む人となるであらう。國內の民衆を擧つて、借家人となる傾向は、今後蔽ひ難きものになるのである。然るに其等の借家も亦一の商品として生産せられるから、商品の被る法則の支配を受けなければならず、加速度的に愈々粗惡のものとなる。現在すら、大多數の借家は國民衛生的見地より見て住むに堪へず、のみならず其の收利の比率は法外のものとなつて居るに拘らず、法律は其上に幾干の規定をも加へて居ないし、また國家が進んで其の住宅を設立するまでに立ち至つては居ないから、住宅の粗惡となる傾向は目を追うて甚しいものとなつて行く。

食物の性質が劣悪なることについては、一々例證の要も無い。從來の日本人、殊に農民を國民の大部分とした我々日本人は、其の食物に蛋白質と脂肪とを缺乏せしめて居たが、其れの補ひとして、米麥蔬菜を多量に食して僅かに事無きを得た。蓋し彼等農民は其等の米麥蔬菜だけは相當に多量に、且つ相當に自由に獲得する便宜を持つて居たからである。然るに今や農業地を離れた民衆は、其等の米麥蔬菜をすら甚だ制限せられた分量を以ての外購買することが出来ず、他面蛋白質と脂肪とに豊富な魚獸肉を取らないで居るから、彼等の營養は從來以上に劣悪のものとなつた。國民の健康の將來、寒心に堪へないものがある。

要するに我々の消費生活は安價のものになつた。價格に於て安價では無いが、價值に於て安價のものとなつた。現代は封建制と資本主義制との中間に立つ。我々の父母、我々の幼時は封建制の中にあり、田舎へ行けばまだ至るところ封建制の社會的構造が残つて居る。其れだけ我々の生活も亦急迫を告げず、相當に安慰と單純とを味はひ得る餘地を持つて居るのだ。併し文明の牧野的情趣はいよ／＼其の影を薄くし、我々の現在、我々の兒女は直ちに産業的社會構成の騷擾なる交響樂中に其の生命を托して居るから、生活の資本主義文明化即ち生活享受の劣悪化は今後蔽ひ難き傾向を以て進むことであらう。

一〇 勞働に於ける創造性の缺乏

第二に、我々の勞働は生活創造の悦びを缺くものとなつた。我々は費消すべき貨物の分量を豊富ならしめ、生活の内容を醇澤にすることの要求を持つから、手藝に代へるに機械的生産を以てする大量經濟起り、且つ其れの意義は保障せられ得るけれども、元來機械的生産は勞働の藝術性を奪ひ、單に此れを物質化せしめ、手段化せしめる傾向を持つたものだ。蓋し機械は單に運用せられるだけであり、其の運用の經過には何の個性の介在も許されない。個性化をなす人と、其れに隨つて單に機械的に動く人との分業が行はれたのだ。

しかし其れだけの意味では、機械文明はまだ悉く生活創造の悦びを缺いたとは言へない。何故なれば、其れには創造の藝術性は排除せられたにせよ、なほ創造の道德性は少しも排除せられて居ないからだ。自己が社會的生産の一角に地位を占め、自ら動き、自ら制し、なほ鞏固なる社會的協働の義務心を内感して居るところには、社會價値の創造に參畫する人格の自律的道的意義が發揮せられて居るから、機械的生産に勞働することは、其れ自身意義として創造的で無いとは言へない。生活創造の悦びは單に藝術價値についてのみ言はるべきものではなく、道德についても科學についても、等しく感受せらるべきものである。其處に勞働する個人は、其れ故に道德人

だ。なほ此の如き機械文明が一絲亂れない協働を保ち、彼此相補して一の社會價値を創造して居る壯觀は、其れ自身文化の聰明と叡智とを表現する。我々は其れの内感に人智の綜合せられた一の創造意識を持つのだ。

しかし其れは人格活動が機械により率ゐられず、機械其のものを率ゐて居る場合のことだ。現在の經濟は少しも其語に適しない。労働者は機械的生産に従事することにより労働の藝術的創造性を失つたが、なほ其の生産が資本家の行動に屬し、労働者は手段視せられ、人格の自律を奪はれたことにより、労働の道德的創造性をも失つた。其の生産は社會的費消への義務的關聯を持つたものでは無く、單に資本家の利潤意識により經營せられるものであるから、生産單位として見ても、其れの動機は利己的であり、社會連帶的道義心を缺くものであるが、其の生産單位の手段として労働を課せられる労働者は、随つて二重の意味で他律的となつて居る。自らの強制せられた労働の中には、何等の創造的なる悦びをも味はふことが出来ない、労働者は單に無智なる労働者の地位に止められ、其等の機械的生産の整頓せられた叡智を理解し得ない。のみならず其の文明が私人の利潤心の奴隸となり、其れの本來の自由を發揮し得ない點で、現在の機械的生産を支配する動機は少しも聰明では無い。其れ故に我々は現在の産業的文明から人智の自由に解暢せられた科學創作の燦然たる價値を認識することも出来ないのだ。

一一 現代産業文明の浪費性

第三に、我々の社會の生産は甚だしい浪費をなしつゝある。共同社會は其上に何等かの抑制を加へる實力を持つては居ない。資本主義と機械的生産とが結合した結果として、どれだけ大量の貨物も生産せられ得ることゝなつたが、なほ其の構造の不斷に運用せられるとは、資本主義を倒滅せしめないために必須の條件となつた。其れ故に資本家の工場は、購買力の有無如何に拘らず、とにかく無限に生産を繼續する。試みに我々は都市の商業街を漫歩して、其等の店舗の中に満開した華樹を見るごとく陳列せられた商品の分量のいかに剰多なるかを仔細に認知するがよい。此等の店舗の在荷は、とにかく現に消費の外なる貨物である。其の在荷の分量は、現に消費するものゝ分量に較合し、いかに著大の比率を持つか。其れは消費への準備としては餘りにも過剰なる比率を示す。勿論其等の貨物のすべてが何れかの時に消費せられるといふものでは無く、其中の或る部分は永久に消費せられないか、或は甚だしく減價した貨物となり、其れが始めに持つた利用價値の極めて少ない部分が消費せられただけで廢棄せられるのである。現代の資本主義文明は其のあらゆる方面に於て浪費をなしつゝあるが、單に貨物の減價に基づく浪費だけでも驚くべき文明の損失だ。

なほ此等の生産せられた貨物と、地球自身の持つ可能生産力との比率に示された驚く可き浪費に對しても、我々は觀察を怠つてならない。我々の生産は機械と發明とを應用するから、どれだけでも豊富に貨物を産出することが出来るやうに考へられるけれども、其等の生産の原料と動力とだけは、いかにしても根本的には地球より得る外に途が無い。いかなる科學の發明も、原料をつくることは出来ないし、また原動力を生み出すことも出来ない。結局人間は永久運動を工夫し得ないといふことの根本的原因是其處にあるのだ。然るに其等の原料と動力とは、一旦或る方向へ其れの形態が變化せしめられたとすれば、其れの可逆の換元は一定の制限を持ち、いかなる科學の應用も其の制限點を超えることの出来ないものだ。

此くして地球上の原料と動力との使用し得らるべき部分は、幾分かづゝ再び使用し得られないものに變化して居るから、若し其の使用し得られない部分が極點にまで多くなつたときには、人類は地球上の生活を終熄せしめなければならないであらう。しかし勿論科學は其の可逆の換元を可能ならしめる幾多の發明を完成するであらうから、原料と動力とにより押し詰められて人類が絶滅すると考へることは、單に空想に過ぎないかも知れない。併しとにかく、最も使用しやすい原料と動力とが消費し盡されることを考へるは空想では無い。今若しかゝる使用しやすい原料と動力とが悉く消費せられ、後には利用の困難な原料と動力とのみが残つたに拘らず、科學の進歩は

此の趨勢に伴はず、其等を利用する新しい方法を發見し得なかつたとすれば、我々の文明は其時に傾廢し始め、人類の生活は粗貧のものにあるであらう。其れ故に今後各國家の競争は原料と動力との供給地を獨占することであらうと豫想するものゝあるも、單なる空想とは言へない。

使用しやすい原料と動力とは其れ故に、人類の或る一時代を以て消費し盡すべきものでは無い。其れは我々の生活を豊富ならしめるための自然の贈物である許りでは無く、我々が我々の兒孫とともにも共同に、公平に消費すべきものとして贈られた有限なる財寶だ。我々は我々の兒孫の文化を行き詰まりとしない爲めに、出来るだけ其れを節約して消費しなければならぬ。自然自身は其れの費消に何等自發的の制限を持たないから、此の制限をつくるものは共同社會自身である筈だ。即ち共同社會は原料と動力とを管理して、其れの私的獨占を許すべきでは無い。然るに現在の資本主義文明にあつては、原料と動力とは最初に其れを利用したものにより獨占せられ、且つ一旦其れが獨占せられたときには、其れの處分は全く其れの占有者の任意に委ねられて居る。然るにかゝる原料と動力とを利用し得るまでの形に變化せしめるには、相當に大規模の設備を要するから、結局其等の原料と動力とは少數の資本家により獨占せられる。資本家はたゞ利潤を本位として其れの利用を計るから、彼は第一に、此の二者を利用するに生産費と利潤との比較を考へ、出来るだけ多くの利益を收めようと計る。第二に、彼はどれだけでも急速に此等の二

者を利用しなければならぬ。蓋し原料と動力との利用は全く無價値のものを有價値のものとするに過ぎぬから、どれだけ急速に利用しても、大抵の場合に資本家は利益を受けることが出来るためだ。此くして資本家により利用せられはじめた原料と動力とは、非常なる浪費の目的物となるのだ。

我々は此くの如き浪費の實例として、石炭や石油の採取を擧げることが出来る。十九世紀より二十世紀に亙る文明の原動力として、石炭が人類に貢献したところは驚く可き程度に達する。今や石油は往日の石炭と其の地位を代へつゝあるが、此れが二十世紀の人類生活に寄與するものはいかに大であるか、計り知りがたい。然るに此等二者は、恐らくは前世紀と今世紀の生活を豊かにらしめるだけで消費し、其れ以後の世紀に生活する人類は、最早此れを原動力として利用することが出来ないであらう。恐らく人類の利用し得る原動力として、石炭と石油とは其の利用の方途の最も容易なるものであらうと思ふが、其等の動力は、人類の甚だ長い歴史の中の、僅に二三世紀をみたす貨物に變形せられるのだ。そして此等の貨物は、利用せられる以前の石炭石油のごとくに貨物としての減價を免れて居ることは出来ない。二三世紀間に生産せられた貨物は、勿論僅かに其れの一部より外には人類により費消せられないのであるが、其の残りの大部分は費消せられない間に減價し、貨物としての意義を失ふに至る。然る時には、採取せられた石炭と石油と

は、資本主義のために、人類の長い歴史の中のわづかに二三世紀の生活に就き、なほ其れの一部分に利用せられたゞけの意義をしか發揮し得ないで終つたのだ。此の如き浪費こそは人類の將來の歴史に恐るべき暗影を投ずる。十九世紀と二十世紀とが、物質的に繁榮を極めて居るのは、單に機械や發明のためではない。我々は實に將來の數十世紀の人類が享受すべき物質的享受を不當に掠奪して、其れを贅澤に使用して居るのだ。

十八世紀までの歴史が持つ罪惡は其の世紀を以て直ちに淨罪せられた。例へば過去の奴隸制度は、其れが廢止せられた今日へは多くの害惡を残して居ない。戰爭然り。封建制度然り。宗教的獨裁と君主的專制と亦然りだ。ひとり地球の原料と動力との上加へた罪惡は、永遠に人類の呪咀となつて止まる遺産だ。恐らくは後世の歴史家により、人類將來の文明に決定的の罪惡を遺した呪ふべき時代として記録せられるものは、其れの高い歴史を通過して、十九世紀乃至二十世紀の二三世紀であらうと思ふ。

一二 鑛山と水力電氣

石炭石油等の動力は勿論のこととして、多くの鑛物を採取するものが、甚だ不經濟なる採取の方法を取つて居ることは今に於て既に科學者の攻撃するところとなつて居る。其の鑛山の所有者

は、採取の費用と利潤との差額の出来るだけ大なること、大量の採掘を出来るだけ急速に得ることを眼目として、すべての指圖をするのだから、鑛坑は不經濟な仕方を通せられ、鑛石の精鍊方法は粗雑だ。其れ故に本來其の土地が含んで居た利用鑛物の僅かに幾割か利用せられるだけで、他は其儘廢棄せられる。勿論此の如きは、精鍊方法に就ての科學的知識が顯著に進歩しない間は、何時の時代にも已むを得ないことではあるが、現在は殊に其等の鑛山が不經濟に採掘せられて居る。しかし其等の鑛山が共同社會により管理せられ、其れの採掘の分量や方法につき何等かの制限が加へられたとすれば、其れの精鍊方法についての科學の知識は一層進められ、經濟的に利用せられるに相違ない。現在では、往時採掘せられ精鍊に適しないものとして廢棄せられた洋鑛を採取して精鍊しつゝあるところが可成りに多い。併し現在精鍊を加へた洋鑛が今後再び利用せられ得るや否やは甚だ疑問だ。何故なれば其等の洋鑛の現在廢棄せられたものは既に化學的の處置を受け、甚だ利用しがたい形態のものに變化せしめられて居るからだ。鑛坑の不規則に掘進せられ、不規則に處分せられ終つたものは、其の土地の鑛脈を荒涼に歸せしめ、なほ所在に多くの鑛石を残して居るにしても、再び其れを採掘することは不可能だ。然るに現在は、其の含有する鑛分の割合に乏しいものを採掘するは、企業として不利益であるから、よし相當に多量の鑛石を後とへ残して居るにせよ、利薄ければ其れに廢坑處分を加へる。此くして空しく廢棄せら

れる鑛物の分量は、寧ろ採掘せられた其れの分量の數十百倍に上るであらう。今後科學の進歩するとともに、其等の洋鑛、其等の廢坑を利用する方法は絶対に案出せられないと言へないけれども、併しとにかく容易に利用せられ得る原料の分量著しく減殺せられて、容易に利用しがたき其れのみが後に残されたことは疑ふ可くも無い。

動力として電氣が利用せられるやうになつてからは、水流瀑布もまた經濟的に重大の要素となつた。殊に我國の如きは石炭石油の産出に限度あり、其の最も多産的なるものさへ今後數十年を支へ得ないやうな状態にあるから、水力の利用は國家の産業的發達と不離の關係にある。然るに我國の河流の利用せられ得る限りは、其の事業の起工如何に拘らず、早くも少數の資本家の手に獨占せられて居る。即ちたゞ其れを將來に利用し得べき權利のみが豫め獨占せられて居るのだ。今後我國の産業が石炭石油の動力を離れて専ら電氣の動力に就くときには、水力電氣の社會有の問題は、恰かも英國に於ける炭坑國有の問題の如くに、民衆の社會問題の主たる地位を占めるであらう。なほ進んで言へば、小作問題と食糧問題との行き詰まりの結果現はれる農業土地國有論と、工業上の諸問題の究極の紛糾として現はれる水力電氣國有論とは、よし資本主義的文明が現時の如き繁榮を維持し得て居る場合にも、必らずや將來に於ては民衆により最も喧騒せられる政治問題となることであらうと思ふのだ。

私は嘗て木曾の勝景寢覺床を望見し、其の水深淺きが爲めに日本の一勝景たる意義を失ふに至つたことを知り、深く此れを哀惜したことがある。然るに後年機會あつて天龍峽の絶勝を見るを得、其の天然の奇工を讚嘆したが、奇景を縫うて峽中の岩上に測量の標旗の翻るを認め、此の勝景も亦將來は寢覺床の跡を追ふの外無き運命にあることを、天然のために痛恨した。勿論私は水力電氣が我國の河流を利用することは不可であると言はない。たゞ此の如き天然の美景は歴史上の古遺跡、古遺品と同じく、人工を以て再び獲難い絶對の價值を持つたものであるから、産業のため其れに毀損を加へるものは、三思後昆の批判を思ふ可きであるとするのだ。繰り返して言ふ。天然は人類の共有財産だ。一私人一世紀の此れを私有して、任意に處分し、毀損すべきものではない。二十世紀は其の世紀の物質的生活を豊富ならしめる爲めに、歴史の存続する限り人類永遠の財富となるべき天然の絶對價值をすべて無に歸せしめた、價值破壊の時代であると後世の歴史家をして記録せしめる途を、我々は今現に追ひつゝあるのでは無いか。

一三 戦争による文化の破壊

最後に、國民經濟の必然的演繹として國際的通商の爲めの市場を獲得しようとする結果は、當然世界の諸國家間の戦争を生起せしめた。

經濟と國家とは、本來必ずしも結着した關係を保持すべき必要の無いものではあるが、國際市場の争覇戦の行はれたときには、經濟家はいかにしても國家の武力を自らの背景に置かなければならぬことゝなつた。國際經濟は意義に於て有無相通では無く、資本主義的生産の必然的結果として生起した強制であることは既に言つて置いたが、強制は其れに物理力を伴はないでは強制の實を擧げることが出来ない。此に於てか當然各國間の戦争が起る。資本主義の發達を原因として起らない戦争は近代には無かつたが、また將來も其の原因無しには、絶對的といつてもよい位に戦争は起るものではない。

現代人は文化的に開發せられたから、戦争のごとき暴力を用ひての英雄的行動に興味を感ぜず、他の文化的創造行爲に主たる興味を注ぐやうになつた。また個人としてはとにかく何人も戦争の犠牲となつて其の生命を失ひ、或は他人の生命を奪ふことを悦ばないやうに、彼等の情緒を洗練せしめた。それ故に國家内の各人の間に、よし法律の制裁を顧慮しないで、相互に戰鬥的行爲を取ること避けて居ると同様に、各國家は容易には自國の運命を賭して他の國家と戦争を開始しようとはしない。戦争は正に經濟的生存の已むを得ない勢ひを支持するために起る。今若し何れかの國家が、他の國家の領域内に市場を求め政策を絶對に拋棄したとすれば、また同時に自國內で費消せられる貨物を他の何れの國家に於てよりも廉價に生産するがために、他の國家よ

り貨物を輸入する必要を殆ど全く見ない様な状態に達し得たとすれば、其の國家は必ずや今後戦争の慘禍より永久的に遠ざかることが出来るであらう。

戦争は二の理由を以て、二の性質の國家の間に開かれる。一は産業的に發達した國家が、其れの未發達なる國家を完全に自國の經濟單位下に置かうとする戦争であり、其の結果は當然後者の敗北となり、其の多くの場合に後者は國家としての獨立性をさへ失ふ。しかし此の種の戦争關係は今世紀の始めまでに概ね整理せられて了つた。二は同一市場の奪取を努めて居る二以上の産業的發達國が、自國家の優越的地位を確保せんがために起す戦争であり、其の勝敗は豫め決定するを得ない。此の戦争が名狀することの出来ない悲惨事を人類の生活の上に齎らすことは、何人も熟知するところだ。しかも其の悲惨の程度は、今後の大戦に於て愈々強烈に進められることも殆ど疑ふを得ない推測だ。戦争は實に人生の大罪惡だ。のみならず其れは人類の歴史への大脅威だ。人類の絶滅は、戦争により齎されるかも知れないとの推測さへ、實は推測とはいへない確實の論證の上に立つて居る。今後の戦争は人智の及ぶ限りを盡し、機械と自然とのあらゆる利用を盡し、國家の提供し得る全部の富を盡し、眞に國民の全運命を其れに托して、しかも長期に亘り、世界の國家のすべてを其れへ参加せしめて行はれることであらう。其の一戦の破壊し鎖盡する富は、恐らくは數十世紀の人類の生活を支持するに足るものであり、随つて其の大戦後人類の生活

内容は極度に低下せしめられ、甚だ久しきに亘り、歴史の暗黒時代が其の後へ續くであらう。勿論消費し易い形態の原料と動力とは悉く消費せられた後の暗黒時代であるから、或は人類は其儘文化人として再起する希望を失ひ、空しく絶滅の運命を見るに至るやも計り難い。恐るべきは産業文明の絶頂に現はれる世界の大戦だ。

一四 全民衆への課題

資本主義的産業文明は、人間の創造した知識と機械とを我々の生活へ適用することにより、我々の社會生活其のものを機械化し、非人格化した。知識と機械とを生活へ適用することの本來の動機は、人間の有限的なる能力を補充し、生活資料を豊富ならしめることにあつたが、またあるべきだが、現在にあつての動機は多く顧みられることなく、資本家の利潤獲得欲が其れの地位を奪つた。生活を本位とする動機の自づからなる結果は、また其れの經過は、常に其の動機により規制せられて居るから、其の結果または經過が動機を超えて生活を傷害する場合は少なくなるが、其の動機が利潤の獲得にある場合には、此の新らたなる動機はどれだけでも生活を本位とする動機を超え、其れへ無頓着に働き、ついには此の本來の動機に傷害を加へるものとなる。我々の現在の生活が正しく其れだ。そして此の結果起る大いなる破綻が世界の大戦であつたことは、

すべての人によく知られた事實だ。

資本主義的社會は、利潤獲得欲に随つて知識と機械とを支配することに何等の社會的制限をも置かない。知識と機械との爲す事業が、人間の其外の機能のなす事業に比較し、其れほど大きくない社會では、資本主義も大した害悪を人生の上に加へないかも知れないのだが、現代のごとく知識と機械との力が甚だ大きく展開せられ、人生の上に加へる大いさの、また如何なる強さの影響をも加へることが出来、ついには人生其のものを指導し得るに至つたときには、資本主義に此の支配力を許して置くことほど、大いなる脅威を人間生活の上に加へるものはあるまい。資本主義的產業文明の進歩する速さは加速度的だ。産業革命以後の其の文明の行詰りは案外早く來て、其の總勘定の序幕は世界大戰であつたが、しかし産業革命と大戰との間に相當の年數が隔たつて居るとも言へる。今後此の年數はたゞ狭められる許りだ。若し以前に一世紀を必要としたものならば、此の次には十年で澤山だ。次回に十年を要したものであれば、次々回には二年で澤山だ。其の社會が戰爭前の文化へ復活する力を戰爭により全部的に壊滅せしめたときにすべては已む。さうで無い限り、戰爭は加速度的に幾回でも右の順序を以て繰返されるであらう。そして此の戰爭の本來の原因が、資本主義的產業文明の特質にある以上は、戰爭の目的もまた次第に此の缺陷の意識に結びつき、資本主義的產業文明を改作して、其上に人格的統制を置かうとするもの

になることは、已み難き大勢であらう。

現代の經濟的機構が不自然な、また非人格的な前提の上に立つことから起る困難は、其の困難の程度が強く、且つ永續的であること、人間の知識の啓發せられて行くことにより、何れの時かすべての民衆に氣づかれるものとなる。併し世界の大戦までは、資本主義の發達も僅かに其れの序幕であるに過ぎなかつたから、此の機構を不満とする聲も大いに高かつたとは言へない。今後は資本主義に決して其の安逸を許さない。社會主義的傾向は宣傳を用ひないで民衆の中に愈々強く發達して行くであらう。そして此の資本主義的社會機構により自己の人格を汚損しなければならぬものは、ひとり労働者だけではなく、其中にすべての消費者と、資本家とを含むであらうから、此の機構を如何に修正するかは、労働者の消費者と、資本家と、其等すべてを含む全民衆の課題として、熱心に討議せられることであらう。此の傾向への序幕も、亦今すでに我々の世界では開かれて居るのだ。現今の經濟生活は如何に改造せらるべきであるか。其の間ひに答へる途は、此の行詰りを齎らした究極の原因を知り、其れへの對策を講ずることより外にはない。言ひ換へれば産業文明の全機構を社會自身の人格的要求を以て社會的に統制することより外にはない。其れはすべての改造への原則だ。經濟生活は意義として手段に止るものではなく、其れ自身目的として、其れ自身の自律的原則を持つのだ。

一五 生産の藝術性の恢復

現今の經濟生活を改造する原則の第一は、勿論生産作用に於ける人格性を恢復することだ。人格性の恢復は、前に論じたことにより、當然二つの方向に向つて爲される。其れの一つは、生産の藝術性の恢復だ。次に、其れの道徳性の恢復だ。

先きに生産の藝術性の恢復を問題とすれば、此の事業は或る點に限界を持つことを我々はいかにしても否定するを得ない。産業文明は機械文明だが、機械を利用する産業文明は、資本主義的でない社會にあつても全然的に廢棄することを許されて居ない。産業文明の缺陷を私は充分に容認するものではあるが、現在の産業文明の弊害は、大半資本主義から來たものであつて、産業文明自身の罪では無いと思ふ。其れ故に今後の社會がよし資本主義的の統制を受けないやうになつたとしても、産業文明自身は必らず今以上の程度に發達しよう。また我々は其の發達を拒むべきでは無い。然るに産業文明は生産の經過をすべて機械に托するから、如何にしても、生産の藝術性に侵略を加へなければならぬ。

併し人間の生活全體が、見方によつては實は機械化して居ると言はるべきであらう。其れは我々の生活の習慣といふものだ。生活の大部分によき習慣をつくることは、我々の生活を他律的に

するものではなく、實は其れを大に快適ならしめ、且つ自律せしめるものだ。我々の生活は、一面の見方を以てはすべて習慣であり、他面の見方を以てはすべて創造だ。すなはち習慣を材料として創造が行はれて行くのだ。此の場合の生活の機械化は、だから生活の創造性を破りはしない。我々の生活が徹頭徹尾創造であり、習慣化の要素を持たなかつたとすれば、我々の創作は却て錯雜し且つ其の力を弱めるであらう。此れに反して我々は自己の生活の甚だ大なる部分を習慣化し得れば、其の結果として我々の勢力と注意との濫費と混雜とから免れることが出来る。我々は純粹無雜に、且つ個性集約的に、其の創作を完成することが出来る。生活の習慣化は生活を毀損し、此れを機械性の奴隷となすことを目的とするものでは無く、寧ろ生活の創造性をより大ならしめ、純粹ならしめる爲めのものだ。其れと同じ原則が社會生活の機械化に就ても適用せられなければならない。

生産の機械化が其れの創造性を奪つたのは、其の機械化が其れに携はる勞働者の創造性に何等の貢獻をもしなかつたからだ。即ち徒らに機械化の分量を殖やし、其の創造性を極少ならしめるやうに進んだからだ。今若し其の生産の機械化が、直ちに勞働者の生活創造へ寄與し得るものになつたとすれば、言換へれば産業文明における機械性は、個人生活における習慣に匹敵するものとなつたとすれば、勞働者は其の機械化を嫌惡するものでは無い。

此れが爲めには、第一に労働者は單に機械化の生活を以て其の生活の全部を費消することなく、他に創造的なる仕事に關與することの出来る時間を當然自分に持つて居なければならぬ。其れは原則として、社會人のすべてが彼の個性を以て社會の創造事業に參畫し、彼以外の創造事業を助けることを前提とする。社會人のすべては、工場にあつて機械的生産に従事するの義務労働を持つ。併し其の時間は彼の生活の全勢力を奪ふもので無い程度の短いものだ。社會人は其の義務労働以外の生活に於ては、文化的傳統よりの教養を受け、且つ彼自身の創見に努力する。かゝる社會的機構にあつては、義務労働は機械の利用を以て行はれ、出来るだけ其の生産時間を短縮することは、社會人の大いなる利益であり、斷じて其れの損失では無い。そして其の機械的生産に従事することにより、一の知識的陶冶を受け、且つ其の機械的生産の經過に何等かの缺陷を見出して行くことを、生活の一の愉悅となすに至るであらう。

第二に、労働者は其の教養を進められ、彼自身の知識を以て、其の工場の機械の構造と運轉とを理解し得、なほ進んでは其の生産が社會的に占める正しい地位を理解し得、随つて同時に、技術的及び社會的の兩面に互り、其の生産機關の改作に對し、自由なる發言權を持つものでなくてはならない。

第三に、其の生産工場は、クロボトキンの考へた工場のごとくに、出来る限り藝術化せられ、

彼の言葉を借れば藝術家のアトリエのごとくに美しく、且つ快適なるものとならなければならぬ。

一六 生産の道德性の恢復

次に論すべき生産の道德性の恢復に就ては、敢て多くの言葉を費すを要しない。所謂労働運動は、すべて此の要求の上に立ち、今現に多くの希望と勇氣とをもつて戦はれつゝある。生産へ直接に自己の人格的活動の一部分、しかも最も主たる一部分を提供する労働者、現在の制度下にあつて其れは單に一部分と言はるべきではなく、其の人格的活動の殆ど全部、なほ適切には彼の正當なる活動の限度を大いに超過し、其れを提供しつゝある労働者が、其の參畫する生産に對して何等の支配權をも、また發言權をも持たないといふことは、確に道德的に非難を被るべき社會制度の罪惡である。だから労働者をして生産のすべてを自治せしめ、労働者の生産的活動、労働者の社會的生産と爲さしめることは、社會の活動自身が自律することの必然的前提だ。現に世界の労働者が實際運動を起して熱心に要求する産業自治は、だから經濟生活を破壊するものではなく、其れを救済するものだ。其の意義は協調的のものではなく全く革命的なものだ。資本家と労働者とが彼等の物質的利益の配分につき、利害本位を以て、例へば労働者に就て言へば彼等自身

の物質生活を向上せしめることを目的として其れを主張するのではなく、生産に於ける、更に廣く言へば社會に於ける彼等の道德的地位を恢復しようとするのだ。即ち人類の社會生活の中にあつて、其の人格を隷屬的、物質的たらしめて居るものゝ數をたつた一人でも減少せしめ、其の社會の人格品位を高めようとするのだ。

其れ故に生産者の革命的なるに對しては、社會人のすべては何等の反對をも爲す可きではない。また其れを妨害すべき理論根據を發見することが出来ない。若し何等かの理由を以て、生産者の此の運動を阻止し若くは阻止するための理論を主張したとすれば、其れこそ社會人の道德運動に障害を加へることを爲すものであり、其れ程社會の道義心を頽廢せしめるものはあるまい。私は近來社會民衆が正しい道義心の歸趨を失ひ、自ら混沌の途を彷徨しつゝあるの現象を觀察して居る。此の如き現象が最近特に著しくなつた所以のものは、主として社會制度其のものゝ前提に不道德的要素を含むが爲めに、到るところ其れの缺陷を暴露し、我々は眞に本能的に其れへの反感を起しつゝあるに拘らず、他面では社會生活其のものに革命的の意味を持つた我々の要求もまた、其れ自身不道德的なるかのごとき、此れ亦眞に本能的とも言ふべき反感を懷いて、兩者の深刻なる葛藤を自らの心中に經驗しつゝあるがためであらう。其れは亦現在、社會民衆の一般的水準が勞働運動に對して懷抱する感慨でもある。併し今若し勞働運動の根本的動機を單に物質的

にしか見得ないで、其れの革命的なる道德的意義を否定するものがあるとするれば、却つて其れは社會の自然的發達に人為の障害を加へて、社會混亂の端緒をつくるものがあるまい。勞働運動の道義的要求は、よし其れがいかに現社會に對して革命的なるものであつたにせよ、其儘現社會により容認せられなければならぬ。義しきをたゞ義しとせよ。其れ以上に社會を安定ならしめる仕方は無い。

現在の政治家や商人やの爲すところを放縱淫陋であるとして非難しながら、他面ではまた現在の新しい社會運動を危矯過激であるとして指彈する、所謂中正的態度は社會の中に今餘りに多く見出される。併し其れが道義の根本意義に於て主張せられつゝあるものだとすれば、其れは大なる誤謬であらうと思ふ。何故なれば現在の政治家や商人の放縱淫陋を非難するならば、意義に於て、新しい社會運動の態度を是認しなければならぬし、また反對に後者の態度の危矯過激を指彈するならば、意義に於て、當然前者の態度を採用しなければならぬ。道義的意義は純粹であり、系統立てられて居なければならぬ。私は右の所謂中正的態度の理論的に容認せられ能ふ根據を見出すことが出来ない。其處には原則意識の缺乏がある。

併し私はなほ此處に我々自身の道義の良心を具體的に反省して見たい。社會的安定を我々の生活に保障し得ることの要求は、殆ど本能的といつてもよい強さを以て我々を壓迫するものである

が、其れは生活の内容を豊かならしめようとの要求の外に、なほ一の社會道德的要求でさへあると思ふ。社會の安定性は我々の對他的活動に根本となる信用の依止處だ。信用とは結局は社會の安定性の信用だ。社會に安定が無ければ社會的信用は已み、社會的信用が已めば對他的活動の大部分は已む。其れ故に社會的安定の強不强により、我々の對他的活動の廣狹が定まる。社會が其れの安定性を絶對的に缺くときには、僅かに二人者の對他的活動さへ其の基礎を失ふから現社會制度を改作しようとする社會運動も亦其れの基礎を失ふ。其れ故に社會的安定は固定した或る社會的安定を破壊して、其れとは違つた形式の或る社會的安定を得ようとするのであるが、さうした革命の達成せられるためには、前の社會より後の其れへの過渡時代も亦同じやうに社會的安定を持つて居なければならぬ。言ひかへれば我々は、革命については一の社會的安定を破るがために、其れへ直ちに接續した社會的安定の存することを必然の條件としなければならぬ、一の論理的矛盾の中に捕へられるのだ。此事は必然的に、如何なる社會的安定も漸進的に行はれなければならないこと、及び其れは單に暴力的に行はるべきものでは無く、知識を以ての宣傳を其れは伴はなければならないことの理論根據を示すものだ。

此くして社會的安定は、單に心理的に快適なることの主觀的要求ではなく、其れは論理的に、また客觀的に是認せらる可き社會構成への前提だ。社會が當然に要求する我々社會人の道義的制

約だ。私は労働運動の道德的意義を革命的であつて協調的ではないとしたが、同時に他面では社會人に對し、一の道德的意義を要求するものとした。此に於てか意義に於ては革命的なる労働運動、すなはち労働者の産業自治の運動も、其れの實際的戰略としては寧ろ革命的とならず、漸進的となるは、社會人として我々の課せられた當然の義務だと思ふ。意義に於て漸進的となるは社會運動の墮落だ。經過に於て漸進的となるは社會運動の進歩だ。其れの經過もまた革命的であらうとするは思索として寧ろ甚だ容易だが、事實として其れは多くの場合に實現の可能なるものではない。露國の革命さへ、其の所謂社會的安定を以て實質的には幾干の社會的安定をも達成し得なかつたことに就ては既に述べた。我々は所謂革命の形式的なる美辭に憧憬して、意義としての、同時に實質としての革命を忽諸に附してはならない。經過に於ける漸進を以て意義に於ける革命を達成する方案を考察することこそ、我々の眞に困難なる思索だ。そして同時に最も實質なる事務だ。

一七 生産の社會的統制

現在の經濟生活を改造する原則の第二は、國民の經濟的幸福を保障することだ。其れは二つの方向について言はれる。一つは我々自身の社會について民衆の幸福を全部的に保障することであ

り、他の一つは我々の後に來るべき子孫の幸福を保護し、其れに傷害を加へないことだ。我々自身の社會について生活の幸福を保障するは、此の原則の一般論だ。然るに此の原則は實行として我々が第一に考察した生産に於ける人格性の恢復と別なるもので無い。即ち生産者としての勞働者が、人格の自律を失つた原因である社會制度其のものを改作しなければ、消費者としての幸福も亦保障せられることが出来ない。

資本家は最も多くの利潤を得しめることの豫想を與へる購買力に對して其の貨物を生産する。分析して言へば資本家の生産の目標となるものは、一つにはより多くの利潤、二つには購買力だ。然るに此の二者は民衆の實質的な需要と必然的關係を以て動くものではなく、單に貨物と貨幣との流通する社會的關係により決定せられる。民衆の熱心なる實質的需要が其處にあつても、其の貨物への需要は他の貨物に對する購買力を壓倒する實力を必らず持ち得るものではないし、また有效なる購買力は現に存在するとしても、其れより大いなる利潤を收め得るとの見込みを資本家が持ち得るのでなければ、其の購買力の方向に向つて生産事業は起るものでない。此くして生産の起る原因が右の二に限られて居る間に、民衆の消費生活は生産により絶えず虐げられる。そして其の程度は、資本主義の發達と共に加速度的に進むのだ。其の生活の幸福が社會的にいさゝかも保障せられて居ない民衆は、其の生活の苦惱を増加せしめるに隨ひ、當然此の苦惱の

根本原因を根絶せしめようとする方向へ動く。其れは生産機關の社會的統制といふことだ。さらに具體的に言へば、其れは生産全機關の國有化といふことだ。此くして生産機關の社會的統制は、我々の經濟生活の生産の方面からも要求せられ、また其れの消費の方面からも要求せられるのだ。

我々の後に來る子孫の幸福を保護するとは、地球の固有する動力と原料との消費せられ易い形態にあるものを、我々の時代だけで浪費しないことだ。其の生産が購買力と利潤とを目標にするのでない社會制度が成立したにしても、なほ其處での生産は、兒孫の幸福へは無頓着であることが可能だ。此れを防ぐためには、生産機關の社會的統制は其の着眼を擴張し、動力と原料とを費消するとき、其の兒孫の當然享受する幸福をまで剝奪しないやうに、社會が其上に統制を持つことは甚だ肝要だ。生産の社會的統制は、此點に達して其れの道德的意義を最高の程度にまで發揮することが出来るであらう。

一八 國有論の出發點

生産諸要素の社會的統制が一國民的に行はれたとき、其れは生産諸要素の國有だ。國有は勞働問題の最後の歸結として起つて來るよりも前に、消費者としての全國民の痛切なる要求となつて

現はれる。生活の缺くことを得ない需要あるに拘らず、物價は法外に高く、のみならず如何なる價格を支拂ふも、其の生活必需品の生産がない爲め此れを購買することが出来ないといふ、經濟制度の矛盾の自づからなる歸結として、消費者たる全國民が救濟せられることの出来ない悲況に立つたとき、其處に案出せられる改造案は、生産諸要素の全國民的統制、または其れへの段階にある何等かの實行策であらう。其の經濟單位としての國家の範圍が狭少であればあるほど、其の消費生活は不自然事を頻發せしめ且つ速かに行き詰るから、國有の要求は容易に生起するであらう。其のよき實例として我國を擧げることが出来る。關東震災は、偶然にも、我國産業の全部に互り、社會的統制を令しなければならぬ必要を生ぜしめた。我國の全面積と震災地の其れとを對比せしめれば、此の政策を實行するの外は無かつたのだ。其れは一時の現象で終つたが、恐らくは此の震災の影響より免れるだけの経過にあつてさへ、今後幾度か、生産と消費との社會的統制に類する政策を實行しなければならぬであらう。私は我國のごとき小範圍の國家は、かゝる震災の影響を受けないでも、經濟生活の機械性が異常なる發達を遂げた今日の世界經濟の中にあつては、自らの地位を支持する爲めに、今後最も速かに生産の社會的統制を必要とするに至ることゝ思ふ。

併し生産の社會的統制、即ち國有も亦、政策として實行せられるときには其れに漸進的段階が

ある。其れの究極に豫想せられる國家社會主義的構成にまで達しない幾多の國有がある。國有はたゞ其の名を聞いたゞけで大いに危険なるものゝ如く見られるけれども、今日でさへ現に我國では幾つかの産業や其他の機關は國有にせられて居る。何れの國家でも全然國有のものを持たないといふところは無い。英國の労働黨は其の綱領の一つに國有を提示して居るが、自黨の内閣を組織したとき全國的産業の國有を斷行しなかつた。蓋し彼等は國有にも其れ々々の段階あることを知つて居るからだ。併し労働黨が其の綱領に國有を掲げて居ることは、其の黨員の熱心なる説明にも拘らず、國民により此れまで誤解を受け、黨の勢力の増加することを妨害したのである。とにかく社會力を以て現在のブルジョア、リベラリズムに何等かの制限を加へる政策は、すべて國有への一段階だ。例へば物價を調節する爲めに、商品の最高價格を國家が規定することは、國有への一段階だ。少くも國有の理想を豫想しての政策だ。

産業を國有することには勿論大いなる弊害を伴ふ。其れの究極である國家社會主義から其れへの段階の諸政策に至るまで、其れには政策として同じい缺陷を伴ふ。其の弊害とは、第一に其の經營の官僚主義化すること、第二に經濟が政策よりの支配を受ける危険を多くすることだ。前者によつては其の生産の能率を減退せしめ、労働者の非人格化の程度を高めるし、後者によつては生産が資本家により支配せられたとき以上の利益占奪を、勢力ある少數の政治家または政黨に許

すことゝなる。其れ故に今日國有は、何處の國でも寧ろ國民の呪咀の的となつて居り、私的經營以上の害毒を流す場合は少くない。我國でも多くの國家的經營は官僚主義的であり、民衆化せられて居ない。なほ多くの國家的または半國家的なる事業は、政治家または政黨の好餌に供されて居た。鐵道の敷設が黨勢擴張の具となり、半國家的經營の諸銀行會社が彼等の喰物となつて居たことは、今日周知の醜事實だ。

其れ故に國有は國民が其の生活の行き詰まりにより、切に此れが必要を痛感するときまで實行すべきでない。國有の目的は、國民生活の幸福を保障するために現在の商業主義を廢棄することであり、國家が一の資本家となり大いなる利潤を受ける商業主義の實行者となることにあるのではない。國有は當然生産者自身による産業の自治と並行しなければならぬ。國家が此れを所有する、或は正當には國家が私有することに、國有の主たる意味はない。生産者の産業自治が國有の本來の意味だ。産業自治が其れに並行し、且つ其れと同時に消費者、専門技術家、其他の諸代表者機關が設立せられ、民衆自身の手を以て此れを統制し得るときには、國有に伴ふ諸弊害も亦直ちに拂拭せられるであらう。國有の弊害も亦實は現制度に伴ふ弊害其物であつたのだ。

一九 新らしき産業文明

最後に經濟生活を改造する方策の原則は、國民の生産力を増大せしめ、國民の要求する貨物の分量を大いに豊富ならしめることだ。

しかし此の原則は當然前の二者におくれて位置する。労働者が其の人格性を恢復せず、消費者としての國民も亦其の幸福を保障せられて居ないところでは、生産力を増大せしめることは、労働者以外の機械力を増大せしめ、のみならず労働者の生産能率を騰ぼすために賃銀を低下せしめ、其の労働力を極度にまで費消することを意味するであらう。其の結果は商業主義の畸形的發達を助長するばかりだ。此れに反して生産者も消費者も其の人格を自律せしめ、國家の全經濟生活を民衆により統制し得るに至つた場合には、其の生産力は増大せられ、貨物は豊富に生産せられなければならぬ。何故なれば其の費消する貨物の分量の少ないところでは、民衆は其の要求を全人的に、個性的に、發揮することが許されないからだ。

生産力を増大する爲めには、當然大いに機械力を利用しなければならぬ。此の理由を以て産業文明は其れに多くの罪惡を伴ふにも拘らず、今後永遠に廢棄せられるのではなく、寧ろ其れは今以上の發達を示すものであらうと思ふが、此のことを許容する以上、私は人生觀として産業文明の支持者にならなければならぬ。今日産業文明の缺陷を批評して、寧ろ其れの原始的復歸を至當だとして論ずる聲は甚だ盛んであり、私自身其の傾向に多くの同感を持つものであるけれど

も、人間の科學的要求も亦其れ自身純粹の人格的要求であり、且つ理論は常に其れの實行的興味を伴ふものである以上は、産業文明の發達を阻止することこそ、却て人爲的であり、多くの害惡を生むであらうし、また實行の事實としても全く不可能であらうと思ふのだ。

併し私は其の産業文明の内容まで現在の其れと同一であるとは言はない。利潤のための産業文明と幸福のための其れとの間には、恐らくは其の内容に於て革命的の相違を持つであらう。今後の科學的發達は、其の産業文明の特色を決定することに與つて力あるものだから、我々は其れの特色を豫め推察することは出来ないが、單に私一個の想像を語るとすれば、今日の工場生産に匹敵するものは案外簡單化せられて單色となり、其れにも拘らず大量的生産をなすが、其れ以外の生産は手藝的となり、細緻なる機械を利用しつゝ、家内工業的に、アトリエの如き彼の個人的工場の中で生産せられることになるものではないかと思ふのである。

二〇 國民的經濟生活の根本義

徳川時代を顧るに、封建制度下の各藩では、私的商業主義は今ほど自由に許されて居ず、各藩の政治家は原則として其の藩の民衆の自足自給的生活を顧慮した。かゝる自足經濟が何の缺陷も無く運用し得られれば、其の政治家の經濟政策は稱揚せらるべきであつた。同じことは、鎖國政

策を取つて居る全日本の經濟政策についても言はれ得たことで、あれだけ長い間大した危機にも遭遇せず、とにかく自足經濟を支持して來たとすれば、其時の政治家の努力には可成り推獎せらるべきものがあつたに相違ない。經濟といへば、單に其の藩の貨幣的富を増加せしめるといふでは無しに、其の藩の全體的生活の支持せられることを眼目として居たことは争へない。

然るに明治以後の我國は、一躍して國際的經濟場裡の役者となり、私的商業主義の自由を保證したから、其の生産組織に大いなる革命が齎らされ、四圍の事情と國內の生産力との合成結果として、とにかく國際的交易に其の輸出入の平均し得るだけの産業を興隆せしめることが出來た。重農主義は破れた。今や我國も歐洲の諸列強と同じく、重工業主義の上に國民的經濟生活の原則を建てようとして居る。土地の面積の絶對的に狭少なること、小農業經營の利益の殆ど皆無なること、は、民衆をして次第に農業を離れしめ、養蠶製絲工業と絹綿織工業との興隆は我國の經濟的立國の根基とせられたかの觀を呈した。此の大勢を今後に押し進めるとすれば、我國は原料品として綿花、及び國民の食糧の供給を國外に仰ぎ、單なる加工工業、換言すれば中間的工業を以て國家の經濟的生活を支持しなければならぬ。此の如き狀勢は、封建制度下の我國の夢想だになし得なかつた新事實だ。

私は勿論、資本主義制度下における商業の自由を尊重する。よし其れが商業であつたにせよ、

其れの自由の容認は、即ち個人の活動の自律を容認することだ。けれども我々は、我國の經濟的立國の根本策にさうした變動の起きて居るとき、其れの前途に望む危険を避けることに就ても、なほ大いに賢明であることが必要だ。歐洲諸列強は今我國が次第に移りつゝある其の經濟政策を取り、大戰を經過して其れの危険を暴露した。如何なる經濟政策を取るかは、第一に其れの自然的環境により決定せられるものであるから、歐洲は此の危機を經過したにせよ、今俄かに其れを廢棄することが出來ず、舊政策を踏襲するであらう。其他に於て此の缺陷を補缺し、若しくは回避し得る方策を發見することは、歐洲の生活に取り刻下の急務とせられて居る。カッセル教授が、軍備の制限、經濟的國境の撤廢、機會均等などの條件を力説し、諸國民の共同努力により生産を興隆せしめて現下の經濟的危機を脱しようとするのは、其等の事情より來たものと見るべきであらう。我國は我國として今後の危機を克服する賢明なる政策を建設しなければならぬ。

私は單に工業立國を排斥するものではない。其れ無ければ我國の貿易決濟はなし得られないかも知れぬ。また其の政策に、根本的の變更が加へられなければならぬとしても、急激に從來の工業立國策を廢棄することは我々の生活に却て大いなる危機を齎らす。併し我々には三省すべき時期が來たのだ。我國の經濟的立國策は、私が既に論じて來た根本原理に隨つて、新たに改造せられ、建設せられなければならない。私的商業主義の任意の發達へ國家の經濟生活の將來を

託任するは、大いなる危険である。國際的經濟生活の發達した結果、世界の一國は經濟的單位として往時の一藩の形態と意義とに匹敵する以上のものを持つては居ない。小國の生活に於て特に然りだ。米國の如き支那の如き、土地と人口と動力と原料とに何の缺乏をも感じて居ない國家と、其等の要素の平行に運命的の缺陷を持つ我國とは、其の取る經濟的立國策にも自づからなる差違を持たなければならぬ。我國は世界の商業場裡に立ち、其の持つ環境としては往時の一小藩に匹敵する以上の何物をも持たない。經濟的單位としては、其の内部に分裂を許さず、組織として單純極まるものだ。此處に立つて我々は國民的經濟生活の根本方策を建設しなければならぬ。

二一 食糧政策

我國經濟生活の根本の方策として、私は次の諸項を特に主張したい。

第一に、我々の堅固に打ち建つべきものは國民の食糧政策だ。私は先きに我々の取るべき政治的方策の第一に人口問題を擧げ、隨つて國民の食糧問題、及び保健問題に關説し、此等の解決こそは眞の意味の政治問題であるとしたが、其後起つた米國の徹底的排日案は、此の問題に特別の注意を拂ふ必要あることを我々に痛感せしめた。人口の過多には絶對的と相對的とある。絶對的

過多とは、地域に比較し、一平方哩に就ての人口密度の濃厚なることを意味し、相對的過多とは、消費せらるべき物資とエムプロイメントの分量とに對比して人口の過多なることを意味する。我國では其の前者にのみ着眼して後者を度外視し、人口問題は我國の地域的事情として運命的に來るもの、如くに考へて居るが、人口問題が重大の意味を持つは人口の相對的過多の場合である。其れの絕對的に過多なる場合にも、相對的には過多となつて居ない場合があり、相對的に過多なる場合にも、絕對的には過多でない場合があり得る。人口問題解決の第一策としては、當然食糧の問題とエムプロイメントの問題とを解決しなければならぬ。我國の場合には、此等は何れも非能率的に空費せられて居るから、完全に絶望的のものだとは言はれないと私は確信する。國民の賢良を擧げて組織せられた經濟的諸會議は、此れまで幾度と無く開かれて來たけれども、其等はつねに餘りにも分科的であり、小節に拘泥して、國民經濟の根本義を忘却した。國民の食糧問題を徹底的に解決するため、何等かの具體的調査がなされた場合は一度でも無かつた。然るに私は此處に我國經濟生活の根本方策があり、且つ人口問題の究極的解決があると考へるものである。

日本人は米以外の澱粉を主食となし得ない民族であることが一般的に迷信せられ、米の産額の不足を以て直ちに食糧の缺乏であるとす場合は多い。併し日本人の食糧は現に全部的に米では無く、此れを麥粉に求めて居る分量も亦決して少なく無い。食糧政策にして宜しきを得れば、今後

此の趨勢は一層進められるであらう。のみならず日本人の澱粉採食量は常食として多きに過ぎる。脂肪と蛋白質とを今以上に採食すれば、澱粉の必要量は減退する。其れ以上に不經濟なる米の消費は、此れから酒を醸造することであるが、酒の飲用を禁止することさへなし得ない我國は、食糧缺乏を言ひ、人口過多を訴へる資格を持たない。日本が移民問題により、世界の到るところより排斥せられ、日本自身を以て其れを解決するより外に途の無い地位に到達した場合には、期せずして酒醸造禁止の政策を取るであらう。

米の問題は右の如くにして解決せられるが、其他の動物的食糧に就ては、政府は慎重なる調査をなし、今後永遠に我國の領土の何れよりか其れを取り得る方策を講じなければならぬ。何故政府は國民の消費生活とは没交渉に、單に此れを商業主義の支配に任せて居るのであるか。國民の健康は日一日と頹廢して行く。國家非常の際には國民は第一に動物的食糧の缺乏を痛感しなければならぬ。政治家は此等の問題とは全く没交渉である。人間の物質的生活、特に其の生命を最低度に保證し得べき炭水化物、蛋白質、脂肪等を何程、また何處より得べきかをさへ考究しない國家は危険だ。殊に我國の如く、地理的狀勢の然らしめるところ、小區域を以て經濟的に獨立した一單位を構成して居るところでは、食糧政策を根本的に解決しないことは、累卵の殆ふい運命を前途に望むものといはなければならぬ。

酒の醸造を禁止すれば米供給の問題は解決せられる。水田に適しない土地では麥を栽培し、麥粉を自給し、麵麩を製造して米食を補ふ。北海道樺太及び朝鮮の近海からは安價なる魚類を供給し、朝鮮と滿洲とからは豚肉を供給し得よう。なほ内地の到るところに大規模の牧場が經營せられなければならぬ。此等の食糧を國民へ適當に分配する爲めにこそ、鐵道網は其の最善の貢獻をなし得る。此等の食糧政策は、何故國民の注意に上はり得ないのであるか。榮養採取の不足により、民に菜色あるも、所謂政治家は其れを個人の問題として顧みないのである。我々は今後結束して此の問題についての輿論を起さう。

二二 動力政策と原料品政策

第二に、我々は國家の動力政策と原料品政策とを確立しなければならぬ。動力としては石炭、石油、水力電氣が其れの主たるものであるが、私は原則として此等の動力の國有を主張する。しかし國有は生産者自身による産業の自治を離れて其の意義を持たぬこと、前既に論じた通りだとすれば、今直ちに此等の動力を國有として見たところで、大した効果を擧げ得ない。其れ故に現在では、國家は此等の産業に對して甚だ高い程度の發言權を持ち、且つ將來に於て其れを國有とする必要のあるときに其れの可能なる程度の自由を保留して居なければならぬ。

らない。

此等三つの主要動力の中でも、石炭の意義は今日のところ大して重要のものでは無い。石炭を主要動力とした時代は次第に去りつゝあるし、なほまた我國の石炭採掘はやうやく其れの末期に近づきつゝある。石油は今後石炭の地位を奪つて重要な動力となり、殊に交通諸機關と軍艦とは石油に最も多くの望みを置かなければならぬことゝなつたが、其の産額の我國に少ないことは遺憾である。我々は今後其の供給を必らず外國に仰がなければならぬものとすれば、石油のかゝる供給地を確定することは國家の運命を托した切要事だ。水力電氣は今後の産業界を支配する重要動力であるが、我國の河川は到るところ其れの根本動力を供給し得る。然るに其等の河川の使用權が、甚だ寛大なる條件の下に私的資本家の占有に委せられつゝあることは、將來に大いなる禍根を残すものと言はなければならぬ。私は、水力電氣の國有が原則として取られ、其れの經營が現在の如く私的資本家の占有に委ねられたときには、其の經營の條件は十分に嚴格でなければならぬと信じて居る。鐵道の電力化とともに水力電氣の國有は次第に國民の輿論になることであらう。

原料政策なるものは、軍事的目的のものを除き、從來其れに統一的なる何等の方針も考へられずは居なかつた。其の缺陷より來た苦痛を我々は現に痛感しつゝある。我國産業の大部分は、其

の原料の一部若くは大部を國外に仰いで居るから、原料政策の確立は一日も忽がせにすることが出来ない。併し原料は産業あつての原料だから、原料政策は當然次に考へる産業政策に随はなければならぬ。國內的需要に應ずる産業を主とし、國外的需要に應ずる其れを従とする産業政策は、原料政策に及ぼす影響の最も大いなるものだと思ふ。

二三 産業政策

第三に、從來全く無方針であつた産業の根本方策が建設せられなければならない。

産業の發達が單に其時の事情に委ねられて居た此れまでの仕方は、我國の如き小國には危険な進みであつた。産業の發達に對し、國家が一々干渉を加へる官僚的の仕方は、勿論産業の進歩を殺すものであり、企業と投資とは可成りの自由が保留せられなければならない。殊に現在の如く生産者自身の産業自治が其の目的を達して居ないときには、産業の發達に對し、政府が一々に干渉を加へることは、經濟的利權を支配しようとする政治家の野心を満足せしめる機縁をつくりやすく、却て排斥すべき傾向である。併し他方企業と投資とを私的資本家の放縱心に任かすことが、我々の生活に脅威を加へる原因になるものだとすれば、其處には政府と實業家と銀行家との共働を以ての産業の監視が成立して居なければならない。

今若しかゝる機關が成立したものとすれば、其れによる産業的發達の指導は、次の方針を持たなければならない。第一に、産業は國內的需要に應ずる性質のものを主とし、國外的需要に應ずる其れを従としなければならぬ。第二に、實利的目的に應ずる性質の産業を主とし、奢侈的目的に應ずる其れを従としなければならぬ。第三に、投機的企業を禁遏しなければならぬ。第四に、民衆生活の逼迫の程度に隨ひ、長期的事業と短期的事業の何れを主とするかを決定しなければならぬ。

此等の諸條件には、多くの説明を附加する必要があるまい。産業の目的が其の國民の生活を支持するにある間は、國內的需要に應ずる性質の産業を主とするは、産業發達の當然なる進み方でもある。また同時に國民的經濟單位を獨立せしめて其の生活の危険性を除き得る所以でもあるが、我國從來の産業的發達は其の方向を取つて居なかつた。我々は今や大覺悟を以て此等の産業種目の漸次的變換を實行しなければならぬのだ。其れは將來の産業政策の眼目だ。我々の實質的生活の支持を欲する産業が主となり、奢侈的目的の其れが従となるは特言するを要しない條件であるが、我國に於ける事實は寧ろ其れの反對であり、奢侈的目的の其れはよく生産費を支持し得るけれども、實利的目的の其れは常に輸入品に壓倒せられて居る。蓋し後者は生産費と價格との開きの少ないことを必要として居るし、前者は其れの大きいことが消費者には大して意とせ

られて居ないから、前者の産業を支持することの容易なるがためである。今や我國は國産品の消費を熱心に勸説して居るが、眞の意味の國産品に何かあるか。投機的企業の禁遏は、確實な途を歩んで居る實業家と其れに資金を貸付ける銀行家とが共働して監視するに於ては、可成りの程度にまで其の目的を達し得るであらう。最後に長期的事業と短期的事業の何れを主とするかは、其時の國民生活の逼迫の程度により決定せられる。金融逼迫し、民衆の消費生活が必要程度以下に壓迫せられて居る場合には、當然短期的事業を主としなければならぬが、其等の間にも國家の産業種目の漸進的變換は、全く顧慮せられないでよいといふことも無い。金利は低下し、民衆の消費生活も一定度に保證せられた場合には、國家の産業に永遠の計を立てるため、眞に國民の生活を豊富ならしめ得る堅實なる長期的事業へ、餘裕ある財力は轉向せしめられなければならない。

二四 對 勞 働 組 合 政 策

最後に、政府及び資本家は、速かに労働組合を公認し、此れと協同して我國の經濟政策を確立し、其れの實行にあたらなければならない。

すべての生産機關は究極的には國有化せらるべきであるとすれば、其れの運用は究極的には労働者の自治的統制に委ねらるべきである。併し其れの所有の原則に私有制度の廢止せられないと

きに、其れの運用に所有主を排斥した徹底的なる労働者の自治的統制を要求するは不合理だ。寧ろ其の實行は不可能だ。階段的順序として、現今の産業が資本と労働との合議により運用せられることに私は反對するもので無い。現代の産業經營の問題は、如何にして資本主義を廢滅せしむべきかでは無く、むしろ如何にして資本と労働との合議的經營制を最も賢く組織し得べきかであるといふも、主として實際的見地に立つことを條件にするならば、誤つた觀察ではあるまい。

勿論私は現在の労働組合を理想的なる形態だとは考へて居ない。我國現在の組合が、社會的正の見地に立たず、單なる集團的利己主義の上に立つて活動する場合も相當に多いと見なければならぬ。併し組合を公認し、組合と協同することは、むしろ此等の組合を進歩高上せしめる所以であり、資本家としても有利なる途を歩むものだ。労働組合の質が今以上に優良のものとなる條件として、政府と資本家とによる組合の公認と及び労働者教育の普及との外に、私は何等の期待をも持つことの出来ないものだ。資本家は組合を公認せず、組合の利益を壓迫しようとするから組合は資本家と闘争する。そして其の闘争の正義は、結局は組合側にあると見なければならぬ。何故なれば労働こそは生産の主要な素であり、労働こそは其れの成果に第一の發言權を持ち得べきものなるが故だ。けれども資本と労働との闘争は、産業自身としては確かに不利益であり、其れの成果を減少せしめるであらう。此の損害の現に最も顯著なるものは、地主と小作人と

より或る農業經營だ。農業が一の投資として成算を持ち得ないことは、今日もはや疑ふ餘地を存しないが、其れは地主と小作人との兩者に取り、共に成算が立たないのだ。私は小作爭議を一般勞働爭議の外に置かうとするものでは無いけれども、併し其れの程度の深刻化することも、地主と小作人と共倒れになり、我國の食糧政策に類例なき危機を招來するに至る日が來はしないかを恐れる。此の危機を免れるためには、地主は速かに小作人組合を公認し、農業問題の解決全部を擧げて地主と小作人組合と政府と消費者との合同會議に委ねるべきだ。

我々が現に取るべき經濟政策の根本的なる要件は、以上の四つを以て盡きる。其れにより我々の前途に望み得る目標は何であるか。曰く、生産の創造的悦びの恢復、曰く、國民的連帶生活の恢復、曰く、軍國主義の排斥と戦争の回避。現に國際的經濟場裡に立つ我國經濟の地位として、私は特に此等の目標に重要な意義が含まれて居ると信ずるものである。

第二十章

現今の勞働運動

一 勞働運動の現代的意義

勞働者が人格の自律的品位を恢復する爲めに起した現代の勞働運動の意義を、私は本書の中で幾度も論じたから、改めて其の問題を考察する必要は無ささうに見えるが、併し現代に於ける勞働運動は、多くの社會運動の中の最も有力なるものであるし、且つ其れ以外の社會運動も大抵は此の問題と關聯し、其れの展開如何によつては、諸般の社會現象に眞に革命的の變化を與へ得るものであるから、私は今一括的に現今の勞働運動を考察することとして、其れの内容を分析し、此の運動の將來に於ける方向へ、多少の忠言を發して置きたいと思ふのである。

勞働者は、言ふまでも無く經濟的機構の中にあつて働く生産者だ。だから勞働運動は、經濟社會の中に於ける生産者の人格價值恢復の運動に外ならず、名目としては確かに一の經濟運動であるが、我々の社會的文化的進歩に對して、其れは實質的にもつと強い意味を持つ。其れといふのは、勞働は一の人間の創造だからであらう。我々の創造的行爲には、單に勞働があるだけでは無

く、例へば藝術的創作の行爲の如きは、人間の創造の中の典型的なるものではあらうが、一の社會運動として藝術運動が現に大いなる意義を持ち得ない所以のものは、藝術家の創造は生活の全面より遊離し、生活の一面を占めるだけで、全生活を象徴し代表し得ないためであらう。其れに引き換へ、經濟生活に於ける生産者の創造的行爲は、生活の全面より遊離せず、また生活の一面に決定せられもしないで、其れが一の經濟的活動であると同時に、即藝術的活動、即政治的活動なるが爲めであらう。藝術や政治は平面的繪畫だ。現在のところ労働ほど立體的、彫刻的であり、生活其のものゝ全體の構成を残り無く表現して居るものは少ない。だから労働運動は、單なる生産者運動といふ單彩的のものでは無く、名目は生産者運動でも、其れの實質は全人格的、全社會的の運動になり、随つて労働運動の進展は、現今のところ確に社會的變化の主動因であり、立體的に、彫刻的に、社會へ、人生へ、全く新しい形式を附與することが出来るのである。

二 労働運動の第一期と第二期

我々の考察に於ける労働運動の見方は、其れだから單なる生産者運動の見方以上にもつと多面的全體的事であることが必要だ。私は今其の見方に三つを區別しようと思ふ。第一は本來の經濟運動としての見方、第二は政治運動としての見方、最後に國際的運動としての見方。

最初に、労働運動を本來の經濟運動の見方において考察しよう。

労働者は生産の主動力者だ。そして現代の社會的創造は經濟的生產より離れ、随つて労働者の行動より離れ、單に其れ自身を以て完結した行動としてあることこの不可能なるものであるから、労働者が其の正當に占むべき社會的地位を恢復しようとするは當然だ。其れは表面的には賃銀の値上げ、労働時間の短縮といふ如くに、資本家の立場に反した利害の要求を爲すけれども、利害は假面であり、實體は人格の自律だ。即ち所詮は生産者自身による産業の自治、賃銀制度の廢止に達しなければ終熄することの出来ない、其の根本的の要求を爲すものだ。我國においても、労働運動がまだ初期の發達を爲して居た頃には右の意義が社會へ常識化せられず、労働運動は労働者が自己の物質的利益の増大を希求する主我的運動であるから、寧ろ呪咀せらるべきであると思はれたが、今は其の意義は社會常識化せられ、此の理由を以て労働運動の大勢に逆行しようとするものは流石に少なくなつた。併し労働者自身としては、其點にもつとも危険なる誘惑を持つものと言はなければならぬ。労働運動の根據を人格權の確立に求める生産者の信念は、なほ一層徹底的に労働者自身の中に普及せらる可きであらう。

生産者が資本家の搾取と雇傭による人格の奴隷化を暴露して、資本家に對し自己の人格の自律を主張するならば、労働運動は一の道德運動だ。随つて生産者の憎惡は資本家の道德的罪惡に對

する個人行爲的非難だ。一の工場に就き、其れの被傭者は其れの持主に對して、個人的に道德的侮蔑を投げる。けれども此の見方は、労働運動の初期に屬するものであつて、現代生活の顯著なる社會的構成化を忘却して居る。運動が次期に進めば、必然的に労働者は自己の運動を一の社會運動として容認し、必らずしも一の工場、一の資本家を目標とはしない。甚だしい暴戾をなして憚らない資本家に對しての外は、我々は資本家を個人的に誹謗せず、社會的に、制度的に、かゝる勞資の對立をつくつた資本主義的社會制度其のものの不道德性を認識し、其れの變革を運動當面の目標と爲す。労働運動は一の社會的道德運動となつた。此れは労働運動の意義の、社會に常識化せらるべきものの第二段だ。

労働者が其の運動の中から有識階級者を排斥し、運動指導者の個人的生活を誹謗したりすることは、やはり其の運動の第一期に屬する傾向であり、第二期運動はかゝる個人的著眼に多くの價値を置かない。有識階級者も、資本家ならざる限りは現制度の道德的罪惡性を認識し、其れの變革の熱意を持つ。況んや世の多くの有識階級者は所謂知識労働者であり、其の生活は逼迫して、固い階級意識を持つ方へ向ひつゝある。労働運動の開幕の綱は有識階級者によつて引かれ、隨つて其れの指導者も亦有識階級者であつたが、有識階級者と筋肉労働者との生活様式の異なるところより、屢々相互の間に感情の阻隔を來し、また時には其れの指導者の中に忌避すべき賣名的不誠

實者を出したが、かゝる小瑕は所詮如何なる性質の運動にも免れがたい。運動の目標さへ明瞭となつて來れば、有識階級者と筋肉労働者との生活様式の相互に異なることも、現在の社會制度として已むを得ないことゝ考へ、相互に諒解し、相提携して運動の効果を發揮するに努めるであらう。また次に賣名的不誠實者をして名を爲さしめるのは、私の觀察するところでは、常に指導せられつゝある筋肉労働者が運動の目標に無識なるためであり、運動に對する彼等の理解さへ進んで來れば、彼等は容易にかゝる指導者を驅逐することが出来るし、また多くの場合には、彼等の理解如何に拘らず偽運動者の假面を剥ぎ此れを運動外へ驅逐するものは、他の有識階級者であつた。此くして運動が其れの第二期に這込つたときには、社會的に當然彼に加へられた地位や生活様式の變化には、個人的なる道德的非難が加へられず、労働運動は一意社會的に組織化せられ、社會制度の道德的缺陷は、社會を組成する各人の共同努力により救済せられなければならぬことが、すべての人に意識せられたのである。

三 道德的政治的より社會的經濟的へ

資本家は工場より驅逐せられ、労働者の上への資本家の搾取は已んだとしても、社會制度としての資本主義は減んで居ない。少数者が富み、多數者は貧しく、富んだ少数者だけが文明の果實

を飽食する社會は滅んだとしても、一人の富んだもの無く、社會全員の貧窮化せられた社會が其れに繼いで起る。露國の革命は此れの適切なる實例であつた。資本家が産業外に驅逐せられ、労働者は其れの自治を獲取したにせよ、既に長い歴史生活の基礎を持つ資本主義の社會的脈理には幾干の變改も加へられず、嘗て社會主義者が想像したやうに、社會革命は一舉にして其處に資本主義的經營と違つた性質の産業制度を開幕し得るものでは無かつた。資本主義と共產主義との中間は、單に過渡期と呼ばれるには餘りに複雑錯綜した社會的及び經濟的關係の下に立つ。急激な社會革命は、資本主義制度を道德的には革命し得るであらう。また其れは同時に資本主義制度を政治的には革命し得るであらう。併し社會は社會機能的に何等根本的の革命を受けては居ない。また其れは同時に經濟機制的になんら根本的の革命を受けては居ない。

其れ故に我々の労働運動は、其れの第三期に這入つて、前に道德的であつた義憤を科學化し、資本主義制度を眞に社會機能的に、また經濟機制的に變改し得る方策を求めなければならぬ。我々の社會が如何に深い根據を歴史生活の中に置いて居るかは、社會革命を實行した後、始めて痛切に感じ得られることだ。例へば露國の如くに、歐洲列強の中では資本主義的發達の最も幼稚であり、個人的活動の餘地の最も多く残されて居たところでさへ、社會的に、經濟的に、資本主義を廢止し得るためには、道德的にして且つ政治的である社會革命の達成せられた後、なほ少くも一世紀の超人的努力を必要とするであらう。

急激な社會革命が社會の秩序に根本的の變化を加へるため、社會的文化の創造に大混亂を興へ、文化と人格とを一時的に低質化せしめて、其の影響は少くも一二世紀に亘り、時には其の社會の復興を全く絶望の淵へ投ずるに至ることは、我々が急激な社會革命を出來得る限り廻避しようとする一つの理由であるが、なほ其外に重大なることは、其の方法を以てしても社會の實質的の革命は幾程も其れの目的を達しては居ないことである。道德的にして且つ政治的な變革も、社會的にして且つ經濟的な變革にまで實質化せられて居ない間は、其の社會を變革以前へ逆戻りせしめる力は甚だ強く働く、其れ故に我々は、労働運動の第三期としては、其の意義を道德的に見出すことを以て満足せず、此れを社會機能的に、また經濟機制的に發見しようとする。其れは労働運動の實現をもつとも具體的ならしめ、理想と事實とを其れが可能なる限りの最近距離に位置せしめたことだ。我々は必ずしも資本主義的社會制度を、急激に道德的に革命化しようとは欲しない。資本主義制度を其儘に許容し、其の制度を内面より社會機能的に、また經濟機制的に徐々に變革せしめる、極めて散文的なる、また一見機械的なる改造の方策を攻究する。産業化せられ社會構成化せられた現社會を轉回せしめるものは、個人的なる牧歌的浪漫詩では無い。我々は一層切實なるリアリズムを要求するのだ。細緻眞實の散文を以てものした曼荼羅圖に、雄大なる詩

心は直下に表現せられて居なければならない。

四 同盟罷業の道德性

生産者運動として見られた労働運動の意義が我々により発見せられて行く段階の三期は右の如く経過するが、時代發生の法則は同時に個人發生を支配するから、一人の労働者が社會における自己の地位を自覺して行く経過も亦此の三期を経過する。随つて現代は此等すべての意識の労働者を包容して居るし、同時に我々は其時の環境と一時的目標とにより、其の取る運動の方法をも此等の三期の何れか一つに適したものにしなければならぬ。例へば時代として第三期にある労働運動が現に取る方法として第一期の其れを選ぶといふことは、甚だ普通であり得べきだ。

労働運動の方法は、其れの意義の展開の三時期に相應して、其れ々々次の如くに異つたものとならなければならない。

第一期の方法は、生産者としての自覺を持たない労働者の大群を利害心により刺戟して、勞資問題への關心を持たせ、漸次に此れを教育して先きの利害心を道德化せしめ、労働組合を組織し、個人的義憤の代りに大衆的運動を起すに至るやう誘導することだ。此間に處する労働運動者の言動が煽動的であり、且つ其の言辭が主として勞資對立の利害本位であることは已むを得ない。其

れあるが故に労働運動は主我的だとは言へない。運動者自身は、如何なる言動を爲すにせよ、其の方法は運動の何期にあるかを自ら詳しく知つて居なければならぬし、また此れを批評するものも、最初に其の運動の進展段階を豫測することに慧敏でなければいけない。

労働運動が第二期に進めば、随つて其の取る方法は労働者の道德心、人格心を刺戟し、労働者をして運動自身の道德性に確信を持たしめるやう努力しなければならない。利害の背景には人格がある。労働運動は人格運動だ。此の確信を持つ労働者は、其の個々の人格に社會的表現を與へた労働組合への忠誠を守ることに良心的であり、大衆的運動は益々強く組織化せらるることであらう。此時の戰術として最も頻繁に用ひられるものは同盟罷業だ。生産者が其の人格性を擁護する非常手段として實行する同盟罷業には、随つて十分の道德性が容認せられなければならない。勿論同盟罷業は社會の小範圍に部分的混亂を與へ、時に其の影響は社會の利福に大いなる損害を與へるから、其れ自身稱揚せらるべきことでは無く、私は生産者が容易には此の手段を實行しないことを希求して已まないものではあるが、併し社會は、同盟罷業こそは最も有力なる、社會革命の緩和劑であることを知つて居なければならない。同盟罷業が合法的に發生して、常に勞資間の互讓堪忍した解決を得て居るところでは社會革命は起らないが、同盟罷業が不當に壓迫せられて沈靜であり、且つ労働思想の發達しない結果として、資本家は傲慢に、労働者は主我的であると

ここでは、最も近く社會革命への危険を望んで居るのだ。勿論私は他面に於て資本家が同盟罷業への準備を持つことを排斥しない。現在の事情としては、其れあることは労働者に緊張した意識を與へ、彼等をして單に主我的に行動することの誘惑より離れしめる。たゞ理由なく資本家が労働者に挑戦することは、其れ以後の事態を重大ならしめるから、固く避けらる可きである。社會も亦同盟罷業に慣れ、此れを一の常識として受け取らなければならぬ。自身の利害に反するが故に深く此れを憎み、罷業せられた資本家に加擔して罷業者側を壓迫することは、危険なる事態を醸成せしめるであらう。同盟罷業を社會の常識的行動にすることは、社會の活動を健康に保障する一つの主たる途だ。

五 協調的方法の三種別

労働運動が第三期にまで發達したときには、其れの方法として、労働組合は資本家に對し濫りに戰闘的とならず、生産機關の一部へ自由人格として參畫し、穩健に、順次的に商業主義を撤廢し得る方を講ずるであらう。其れを一つの勞資協調的方法だと冷笑するものがあるかも知れない。しかし今の場合の協調は、決して單なる勞資の協調では無い。凡そ勞資の協調する形式を持つた方案に、意義に於て次の三つの様式あることを私は今の場合注意して置きたい。

第一には、單に自由平和主義の立場を取り、穩和平靜を悦ぶが爲めに勞資の協調を説き、現在の資本主義的社會制度の罪惡性を反省せず、其れに深刻なる道義心を感じない態度がある。現に勞資の協調を民衆に教へて居る宗教家や教育者の大半は、此の部類に屬する。彼等は經濟學と倫理學との結びつきを知らない。協調の平和主義により人道を支持して居ると自らは信じつゝ、其の實社會の大いなる罪惡性を救済し得ないで居ることを自覺しないのだ。

第二には、資本主義的社會制度其のものゝ不道德性については正しい理解を持つが、其の制度を改變することに伴隨する社會の混亂を懼れ、出來得る限り社會の安寧を支持しようとして、勞資の協調を推奨するものがある。私は此の見方には可成りの同感を持ち得るが、しかし其の推奨する方法を以ては何時までも現状が支持せられ、結局制度自身には何等の變改も加へられないで經過することを大いなる遺憾事としなければならぬ。

最後に、現社會制度の不道德性を自覺する許りで無く、更に其れの機制を科學的に分析して、一歩づゝ其の機制を他に轉移せしめ得るごとき方策の原理を發見し、其れの實現を期する方法を持つが、此の方法は形式的には勞資協調的だ。併し其の方法が確實に商業主義を廢止し得べき原理を基礎とするならば、其れの精神は單に平和主義的なる協調の其れと類を異にする。形式が階級闘争的で無く、勞資對立的で無い理由を以て此の様式を攻撃する労働運動があるごすれば、彼

は道徳學を知るも、併し道徳の要求を現實化するための經濟學を知らないといふ批評を受けなければなるまい。労働者と資本家と協力して、此の最後の協調的方法を發見し得、互ひに忠實に其れの實行に努力するならば、労働運動は始めて其れの最善の途を進みつゝあるものである。私は労働運動の方法の三期に亘る其れの特殊性を考察し終つた。併し或る一つの時代を取れば、此等三つの方法が相平行して進行しつゝあることは言ふまでも無い。

六 労働組合相互の協調問題

労働運動の三期は、常に參差混在するから、我國の其れも全體として其れの何れの時期に位置するかを確言するは困難であるが、其れの最も進んだ程度のもは、既に第二期より第三期に移り進まうとして居る。然るに運動が第二期より第三期へ轉移するに當つては、其れと同時に運動の經濟的方面に於て次の如き二問題を生起せしめる。其の問題の解決は、單に一つの労働組合内部の問題を解決することよりも遙かに困難なる仕事となるであらう。

第一は、産業の種類を異らしめる労働組合相互の間の協調の問題だ。労働運動の第一期第二期には、等しく賃銀労働者であることと同類意識により、互ひに提携して労働者共通の敵にあたるを常とするが、既に運動が第三期に進み、理想的社會建設の豫望を近くするにおいては、産業の

種類を異らしめる労働組合は、随つて其の經濟的利害をも異らしめるが故に、相互の間に一致した歩調を進めることは困難となる。労働組合自身により社會を建設し得る期望が大となればなるほど、各組合の利害に随つての隔絶は大となるものであり、將來此の隔絶は經濟社會を占める闘争の最も大なるものゝ一つになるであらう。

我々は労働運動の第二期に臨んで、早く既に此の争闘を防ぐ目的を以ての産業委員會を設ける事を怠つてはならない。私は此の争闘を將來社會において運命的のものとして考へる。すべての人間が完全に理想化せられることの到底望み難いとすれば、其の利害葛藤は已むを得ない。併し出來得る限り合理的に此の争闘を解決する途は、産業種類の異なる労働組合より委員を選び、一の永續的委員會を組織して相互の間に融和し得る理解を見出すことだ。我國において此の融和の最も困難なるものは、農業労働者と工場労働者との組織する組合相互の間であるとは、すべての人々の一致して豫想するところである。

七 労働組合と一般公衆との協調問題

第二は、労働組合と、消費者としての一般公衆との相互關係を解決する問題だ。労働運動が進み、其の大衆的行動が組織化せられ、ばせられるだけ、労働運動が消費者としての一般公衆の利害

に影響を加へるところは大きい。消費者は直接には労働者大衆と何の關係をも持たない。だから労働運動がどんな経過を以て進まうと、例へば同盟罷業がどんな形勢を以て進まうと、一般民衆は出来る限り其れへ無干渉となつて居なければならぬ。私は前に主張して置いた。併し消費者は、労働者と其れを雇傭する資本家とを併せての生産者と利害を以て對立し、労働運動の経過如何によつては、一般公衆は甚大なる損害を受けなければならぬ。かゝる場合勿論責任は労働者にだけあるとは言はれない。公衆に對して責任を負ふものは、資本家と労働者とを併せての生産當事者だ。其れ故に消費者は、労働運動の経過により、大いなる損害を受けることを避けるために、つねに労働者と資本家とを合せての生産を監督し、調査し、労働と資本と、其の何れかの側の不正義を摘發し、警告する機關を組織して居なければならぬ。其の産業が單なる産業では無く、一の公共事業であつた場合には、其處での労働運動は最も廣汎なる範圍に亘つての影響を一般の公衆に加へるものであるから、かゝる性質の調査機關を設置することは、他の産業の其れに於けるよりも急務だと言はなければならぬ。

此の機關の設立せられて居なかつた缺陷を、私は現に大正十三年の大阪市電從業員罷業において經驗した。雇傭主としての市當局側と電從業員との其れ々に要求して下らない論據の精確なるものを、一般市民は知つて居ないから、其の罷業によりいかに甚大なる損害を加へられたにせ

よ、市民として市當局者或は從業員の何れかへ、一の警告をさへ發する事が出来なかつた。此の爭議に先んじて私の主張する如き機關が成立して居たとすれば、我々は一般民衆として其の理非の何れの側にあるかを知ることが出来、且つ概ねは其の爭議に先んじ、其の處置の非なる側へ警告を發して、消費者としての要求を表明することが出来たであらうから、其の機關の設立せられて居ない時に勃發しなければならなかつた罷業をさへ未然に防遏することが出来、隨つて一般公衆は其の巨大なる損害より遠ざかり、資本家と労働者とは當然仕拂はなければならなかつた犠牲を極少度にまで節約することが出来たであらうと思ふ。

私は濫りに勞資間の協調を主張するものではない。其事は從來幾度と無く論じて來た通りだ。また我々の社會理想が何を指示するかについても、論議を二ならしむべきいさゝかの疑念をも私は持つて居るものではない。社會理想に協調は無い。たゞ其の改造方法は、單に倫理的に正常なるところより進んで、出来る限り相互の犠牲を避け、共同社會の福利を損じないやうな、賢明に組織立てられた協調的のものとなる必要がある。殊に右に論じた如く、産業の種類を異にする労働組合相互の間の利害對立、生産者と及び消費者としての一般公衆との間の利害對立は、結局は技術的に、協調的に、解決せられるより外に途は無い。

八 労働運動の経済的諸方策

我々の労働運動の経済的方策として取るべきものは、右の理論に随ひ、次の諸要件である。主たるものは、現在の商業主義を克服し、吸収して、其れの最後には商業主義其のものを廢滅に歸せしめ得べき、何等か漸進的なる協調組織を發見することだ。其れは嚴密に科學的なる立脚を持ち、技術的、組織的のものであることが必要だ。併し其れの一方では、商業主義の支配圈より離れ、労働者自身を以て支持運用し得べき産業機關を實驗的に組織しなければならぬ。商業主義の氣勢を挫くに、よし其の實驗の設備は小さいにせよ、純粹なる理想型を社會へ示して、社會人の良心を刺戟するに、此の方法ほど勝れたものは無い。他方では、商業主義の缺陷についての知識を社會へ普及しなければならぬ。以上三項は、我々の商業主義的社會を一步づゝ其れの理想態へ進めて行くための實行方策だ。

商業主義の支配を節約し得る方策を講じなければならぬ。今日の経済的社會は、小賣卸賣業者の複雑な組織により、社會の中に多くの不生産者をつくり、高價な費費を支拂つて居るが、生産者と消費者と提携することにより、我々は現社會制度をいさゝかも破壊しないで、なほ其れを能率的に、社會の福利を増進せしめるやうに動かすことが出来るのだ。

労働者自身の眞實の生産價值を基礎として、労働者の支配し得る信用機關を設立しなければならぬ。労働者銀行の設立は其の一つの行き方だ。

産業の種類の異なる労働組合の間に、協調的なる一の産業委員會を組織すること、なほ其れは主として消費者側に關係の多いことだが、一般公衆の立場から生産者側の勞資状態を調査し、罷業を未然に防壓して消費者の利益を擁護する機關を組織することの必要は、前既に詳記した。

九 労働運動の政治的意義

次に私は、労働運動を政治運動としての見方から考察して行きたい。

政治運動とは敢て議會運動にのみ限らるべきで無い。議會主義を排斥した場合の労働運動も、其れの客觀的側面は屢々の政治運動となつて居る。私は労働組合が公然と政治運動を表明することを否定するものではないし、また同時に其れが議會主義を標榜することをさへ非難するものではない。寧ろ私は此の二つの意味を包括しての政治運動を、労働組合が進んで取るに至ることを労働運動の必要條件と考へて居るものであり、既に其の理由を論じて置いた。労働組合は、近き將來に其中より労働黨を出生せしめるであらう。また我々は其れの出生のため現にあらゆる努力を拂つて居なければならない。

労働組合より労働黨の生れる徑路に當つて一つの障礙となるものは、労働組合の内部に、早くも二つの勢力の争覇戦が行はれて居ることだ。AかBか、「或は」自由聯合か集中主義か」といふ聲が、今なほ執拗に労働運動界を賑はして居る。其の二つの勢力の一方は、思想的にアナルコ、サンチカリズム風の色彩を帯び、労働組合の互ひに團結する方法としては自由聯合の様式を取り、政治的議會主義を排斥して、經濟運動の一途を進まうと主張する。其の勢力の他方は、思想的にマルキシズム其れも主としてボルシエヴィズムを取り、労働組合運動の戰術としては集中主義を標榜し、最近には經濟運動の一途にのみ固執せず、政治的議會主義をも運動の一方法として取らうとする。此の二の主張は、單に理論的に對立するといふよりも、寧ろ個々人の人生觀の相違として互ひに對抗するものであるから、其れの融合は容易で無い。現に我國の労働組合は、此の二主張に隨ひ政黨的の分裂を見せて居るのであるが、其れの對抗反目は運動の到るところに發揮せられて居るのだ。

私は此の二主張が原理的に永遠の反目を續け得るとは考へて居ない。凡そ現時の社會思想の中心的要求を分解するに、ダグラスも既に言つた如く、其れは「支配」と「自由」どの何れか一方に屬する。カイザアであれ、聯盟であれ、國家であれ、トラストであれ、はた労働組合であれ、一の完全なる主權を確立しようとする企てのすべては支配の政策を取るものであり、聯合體により個

人の活動に自由の餘地を残し、其の聯合體に固有せられる機能の必要以外のものにより拘制せられることを避けようとする企てのすべては、自由の政策を取るものだ。ダグラスは言ふが、此の見方は適切だ。私も亦「文化主義原論」の中で、すべての社會思想は、「奉仕」と「自由」どの何れかの原理を高調するものだといつて置いたが、其の言葉は偶然にもダグラスのものと一致して居る。

我國のBは、社會主義を取り、ボルシエヴィズムの獨裁主義に賛し、組合戰術として集中主義を取る點で、支配政策を取るものだし、Aは、アナルコ、サンチカリズムを取り、獨裁主義を否定し、組合の自由聯合により各組合、各個人の自由活動に甚だ多くの餘地を残して置かうとする點で、自由政策を信するものだといへる。併し此の二つの傾向は、私が既に詳しく「文化主義原論」の中で論じた如くに、一つの原理として、互ひに背反すべき何物をも持つては居ない。

一〇 支配政策と自由政策

人格的活動とは、規範意識を以て經驗的意識を決定することだ。我々の具體的なる自我は、規範意識其のもの、または經驗的意識其のものでは無く、經驗的意識の規範意識を含み、地の天と結婚したものであるから、規範意識により決定せられつゝある經驗的意識の立場においては、自我

は其の小なる自我を捨て、大なる自我に信頼する意識を持つ。我は教法の命する規範に随ひ、一意理想的なるものへ奉仕するのだ。支配の政策の根據には、つねに此の意味の人格的奉仕が嚴存しなければならぬ。如何なる支配も超個人的なる規範意識の根に結びつかなければならぬし、また如何なる自由も教法の規定より離脱する放縱に陥つてはならない。其れが我々の取る社會的方策の一端の見方だ。

次に人格的活動は、規範意識の見方に立てば、經驗的意識の無規範的なる決定を突破し、逆に規範意識を以て經驗的意識を決定することにより、本質的なる自我を悠々たる絶對的自由の天地に生かすことであるから、此の意味の人格的活動こそは自我の眞實なる自由だ。聯合體の自由が其れの必然的控制を聯合體の機能の内面的本質に求めようとするは、趣旨において私の所論に同じい。随つてアナルコ、サンデカリズムの要求する自由、組合の聯合における自由は、人格的活動以外の何物であつてもいけない。

此くして私は、我々の活動の奉仕と自由とは、其れの眞實の意義において、即ち我々の人格的活動において、全く同一点に合着しつゝあるを見る。奉仕なるが故に人格的活動は自由だ。自由なるが故に人格活動は奉仕だ。ダグラスの支配の政策は、支配なるが故に自由の政策となるべきだ。自由の政策は、自由なるが故に奉仕の政策となるべきだ。自由を否定しての支配の政策は、

支配を強制化して居るし、支配を否定しての自由の政策は、自由を放縱化して居るのだ。

此の理論根據に立つて私は、社會主義とアナルコ、サンデカリズムとの合一する可能性を信じて居る。随つて集中主義と自由聯合主義とは、組合戦術として互ひに背反すべきもので無い。組合の聯結は、其の意義を示すものとしては自由聯合主義であり、其の聯結の強度を示すものとしては集中主義であるべきだ。自由聯合で無い組合の結びつきは專制的であり、個人の活動の上には固定法則を強制することゝなるが、集團力の集中せられて居ない労働組合は殆ど何等の戦闘力をも發揮することが出来ないであらう。労働組合が政治的議會主義を取ることの可否に就ては既に論じた。其れは我々の政策の支配と自由の二種別に對し、必ずしも理論的關係を持つもので無い。

併し事實の眞相を分析するならば、支配と自由とは恐らくは社會組織に對して懷抱する我々の人生觀の個性的典型の二つの相違であらう。其れは理論よりもより深き生活の根據だ。我々は此等の二原理を理論的に統一することは出来ても、二つの異なる個性的典型を一つに結合する事はどうしても不可能だ。其れ故に今後労働黨の内部に、此等二つの個性型に随つての政黨的對立が現はれたとしても、我々は其れを終極的に克服すべき何等の方策をも見出すことは出来ないであらう。たゞ僅かに最後の據り處として私の推舉し得るものは、教育だけだ。教育により各個人の

偏見を出来るだけ少ないものとし、本能的に生起する政黨的對立心を壓倒して行く仕方が此の場合考へ得られる最上の方策だ。併し單に各人の知識を進める教育は、此の目的を達し得ないといふことは、比較的高い教育を受けたであらうと考へられる人達を集めた現在の議會が、醜陋なる本能的政黨心を暴露し、野獸の如き爭鬪劇を繰返して居ることによつて想察せられる。本能の勢力は其れ程強盛だ。また屢々醜陋だ。

一一 勞働運動の國際的意義

最後に國際的運動として見た勞働運動の意義を考へよう。

勞働運動の進歩は同時に各國の民衆に國際的精神の發達を促がす。勞働者は其の國籍に關係無く、資本家階級と呼ぶ共同の敵に經濟的利害を以て對抗するものであるから、勞働運動の進歩に隨ひ、各國の勞働者は互ひに提携して其の地位を高上せしめようと努めるに至るは自然の勢ひであり、我々は寧ろ此の運動の間に育醸せられる各國の民衆の國際的精神を歓迎すべきだ。其れは恐らく如何ほど進められても、一部の民衆の疑懼する如く、民衆の民族的團結心を滅却せしめるものでは無く、寧ろ各國民の民族的偏執を減退せしめ得る效力を持ち、民衆の中の最も大なる部分を占める勞働者の國際的精神は、恐らくかゝる實習によつての外適當に養はれることは出來

ないであらう。

併し勞働運動は一つの經濟運動であり、國民經濟生活の一般的利福を進める責務の一半を擔ふものであるから、其の運動の間にも國民經濟の視點を目標の中より除去すべきで無い。經濟生活の目的を國民經濟の自律に置き、一國の不當なる商業主義を以て他國の國民經濟の上に侵略脅威を加へることを勞働者は其の勞働運動を以て防止すべきだ。然る場合に勞働運動は、國際的精神を發揮しつゝあるが故に各國家の帝國主義的經濟政策を壓倒することが出来るのだ。勞働運動の此の部面の意義は、今以上に高調せられてよいものだと思は信じてゐる。

現今の國際政策

一 國際主義への展開

世界を擧げて一家の如き活動をなすことは、我々の理想主義の目標とするところだ。人と人、地方と地方、國と國との間に何等の反目も無く、完全に兄弟の交誼をつくすは、文化の進展に伴ふ人間の當然なる義務だ。此の意味の國際主義は地方主義とは衝突しない。

國際主義とは、原理に於て世界のすべての集團、すべての個人が、同一の價值水準に立つて活動することであるが、其の價值水準の同一性は形式的同一性であり、生活の實質に於ける同一性では無い。國際主義は世界の各民族、各國民、各集團の持つ其れ々々の個性を没却せしめ、其の生活の傳統を空無に歸せしめるものだと非難するものは、じつは國際主義を生活の實質における同一性の高調と見たのであり、我々の見解には合適しない。我々は如何なる場合にも、個性の中に個性を以て、理想的に創始せられて行く生活原理を高調するものであり、其の個性主義、地方主義無き生活原理を、生活の根無き浮説とするであらう。併し同時にかゝる個性主義、地方主義

の目標を、我々は國際主義の上に置くものであり、世界を擧げての一家同胞を、地球上に生活する人類のひとり實現するを得る最高の理想形式とするのだ。

二 戦争と原始的本能

戦争の如き組織的野蠻事が、今なほ平然として人類の社會に行はれることは、靜慮すれば、確に我々の社會に残された最大の原始的遺物だ。個々人の意欲は、少くも現在の程度の文化的發達を以ては、戦争を欲するものではない。戰場に出で、自己の生命を危険に曝らし他の人命を奪ふことは、我々の文化意識として許し難き野蠻性だ。然るに戦争を完全に終滅せしめる組織的計畫は、今なほ發見せられず、各國は熱心に其の軍備を整頓し、科學的武器の發明に汲々として居ることは、文明の耻づ可き汚行と言はるべきだ。

戦争の原因は、其れの究極點を尋ねて見れば、やはり人類の原始的本能に基く。第一に、我々の英雄主義的欲求は、社會文化の進展によりまだ何程も減退せしめられては居ない。恐らくは人類の最も克服し難き原始的本能の一つであらう。各人が自己の人格的權威を主張し、同時に他の人格の其れを尊重する社會的感情も亦、近代社會の發達とともに大いに發達したから、個々人の對立した場合、往古の社會に見られたやうな人格の英雄主義的征服は見られなくなつたが、併し

近代社會の發達と同時に、其の構成せられた社會的機構を通じての個人による個人の英雄主義的征服は、寧ろ往古よりも大規模になつた。隨つて此の如き英雄主義満足の機會を望む個々人の原始的本能も亦容易には終熄せしめられ難い。

第二に、人類には動物としての殘虐性を發表したい原始感情が今なほ多分に保有せられて居る。たゞ我々の社會的連結が甚だ鞏固のものになつたから、我々は此の社會生活の中で、いかなる理由を以てするも、其の殘虐性を發表する機會を持つを得ない。併し此の如き欲求も亦人類が本能的に固有する性情なる限りは、人類はつねに何等かの機會を得て十分に其の欲求を發揮しようとするところへの誘惑をも感じて居る。遊獵、競技などは、やゝ其れを微温的に發揮する文明的機會だ。戰爭に於て一方の軍隊が他方の領土を侵略した場合には、眼を蔽ふべき殘虐的行爲の平然として行はれるを常とするが、其れは敢て戰爭を待つまでも無く、社會の統制的機關が麻痺せしめられ一時的に無政府状態を現出せしめた場合に、つねに繰り返されて起る人類の恥づべき非行だ。歐洲人は自ら文明的民族を以て自認して居るが、過般の大戦中には、いかなる野蠻民族のなすところよりも劣つた殘虐なる非行を敢行したのである。

第三に、自己と生活の様式を異らしめて居る他の社會集團を嫌惡する我々の原始的感情も、亦甚だ強い力で現今の生活を支配して居る。其れは結局原始的の宗教感情或は魔術的感情とも言はるべきものであり、冷靜に觀察すれば、我々の所謂文明社會の中にも其の感情はどれだけ強く發せられて居るか計り知り難い。慣習心、傳統心の中には、なんらの文化價值をも含まない、さうした排外的魔術感情は多分に含まれて居る。其れの本質的價值を批判するより前に、我々は既に其れの種族、慣習、信仰などが我々の其れと異なるところより、此れを排斥したい原始的感情を持つのだ。

第四に、右の感情とよく類似した性質のものではあるが、猜疑の原始的感情も亦我々には強い程度で殘されて居る。其れは英雄主義的對抗とも違へば、また異集團嫌惡の感情とも違ふが、其等により激發せられ、高揚せられるものだ。其れは一つの原始的感情だから、何等かの合理的根據を以て發揮せられるといふでは無い。たゞ個々人、個々集團の對立したとき、兩者の間に非合理的猜疑心を取り交はされるのだ。其れが幾分でも合理的なる根據を得た場合に、一層強い程度の激發を得るは言ふまでも無い。

三 將 來 の 戰 争

戰爭は一部の社會主義者の批評のごとく、單に經濟的原因より生起するものでは無い。其れの根基には、前に述べたやうな人類の原始的本能が潜み、此の文化的社會の中になほ其れの發

動の機會が待たれつゝあるものなる以上は、文化的社會に此くも大規模に組織的なる蠻行の敢てせられるを禁絶せしめる事は、難事中の難事であるが、併し其の困難の程度が大であるからといつて、我々の理想主義的努力を抛棄すべきでは無い。人類の理想主義的努力は、其れの無限の可能力に絶對の信頼を置くべき當體だ。また我々は自らの内に、性情の不合理を征服し盡すべき人格的勝利の確信を持つ。今後一切の戦争を禁絶せしめて我々の國際主義を發揚することは、其の確信に對しての永遠の課題である。

戦争が其の時代の文化を根柢より破壊することの慘況について、私は先きに述べて置いた。併し専門の經濟學者の計算するところに随へば、戦争自身が直接に破壊せしめる經濟的損害は、全體の損失に對すれば比較の取れない少ないものであり、戦争後の經濟的不均衡より來る損害こそは救済し難い高い程度に達するといふ。例へば歐洲の大戦にして見ても、戦争のために加へられた世界の物質的損害は、幾干の年時をも經ない間に恢復せしめられた。其の一例を挙げれば、大戦中巨大なる損害の加へられた船舶業の如きは、數年ならず大戦前以上の發達を示すことが出来た。其れ故に大戦の恐るべきものは、戦争が直接に加へる物質的損害では無いといふ。此の見方は全く商業主義の上に立ち、且つ商業主義を容認する限り正當だといへる。そして専門家の右の計算には恐らく誤謬はあるまい。現在の産業文明の發達を以てすれば、一つの商品に就きざれば

け巨大の分量をでも生産することの出来るものであり、現時の生産機關に何の妨害をも加へず、其の全力を働かせたとすれば、恐らくは現に生産しつゝある分量の數十倍を生産することも可能であらう。産業文明の發達に比すれば、現時の消費は餘りにも貧弱なる程度にしか達して居ないといへる。併し大戦中費消した戦争の浪費は、地球の固有する全生産能力に比較して驚くべき高率に達し、此の浪費を恢復する方途は無い。今後の戦争は、其の浪費を恐らくは數十倍、數百倍せしめるであらう。文明の進歩は驚くべき速度を持つが、科學的知識の最高水準が其の費用の如何に願慮なく應用せられるものは戦争であり、随つて戦争は科學發達のバロメータだ。戦争の費用の増大ほど著しい比率を持つたものは無く、僅かに一世紀或は二世紀前の戦争は、寧ろ笑ふべき程度の費用を使つて居たに過ぎない。今後の大戦は、恐らくは常に全世界の諸國を其の渦中に投せしめる。随つて戦争を回避する諸列強の努力も以前よりは強くなつた。併し若し今次の大戦の如きが勃發したとすれば、其の物質的損害は今次の其れと比較の出来ない巨額に達することであらう。

文明化せられた個々人は、其の生活が文明化せられればせられるだけ、個人的には戦争することを好まないやうになる。其れといふのは、近時の戦争はすべて科學戰であり、其間に英雄的行動を發揮すべき機會を少なくさせたから、實戰に参加して其の原始的本能を満足させることが出

來ず、人間は寧ろ科學の前に自らの微力を味は、なければならなくなつたからである。バルビュスが今次の大戦を描寫したのを見れば、科學の力を借り人工的に人間を戦争の偶人に化せしめる幾多悲惨なる場面が描かれて居るが、今後の戦争に於ては人間を無意識なる機械に化せしめ、其の機械を大量的に消費する方法は、愈々綿密に攻究せられることであらう。過去の戦争は、英雄的行動によつて人格價値を異常に高揚せしめる機會を與へたが、今後の戦争は、先づ個々人の人格價値を全然的に没却せしめるを、其の實行の前提となすことより始めなければならなくなつた。

四 戦争を回避する諸列強

我々の經濟生活にあつては、物質的損害は直ちに經濟的損害を意味しない。經濟生活は物質的基礎の上に成立した一つの機械的關係だから、我々は更に其の經濟的關係の受ける損害を計量しなければならぬが、戦争は其の關係を根本的に破壊するため、此れを恢復するは容易の業では無くなる。だから大戦後の世界的經濟困難を批評する財政専門家は、此の困難の由來するところは戦争自身に無く、大戦後に於ける經濟的處理の不備にあるとするが、併し大戦後、果して如何なる適切な經濟政策が此の困難を救済し得たか、其處には疑ふべきものがある。今後の世界的戦争こそは、全然的に此の經濟生活の機械的關係を痲痺せしめねば已まないであらう。

經濟的帝國主義が、過去において戦争の直接原因であり、また今後もさうであるに相違ないことは言ふまでも無いが、併し戦争をなすこと自身、經濟的帝國主義のために有利であるかどうかは大分に疑問となつた。戦争に大勝を収めた國家さへ、戦争のためには大いに其の國力を疲弊せしめ、一等國の實力は二等國の其れに下落しなければならなかつた。戦争に参加しなかつた、若しくは戦争の經過に僅かな利害關係をしか持たなかつた國家は、漁夫の利を占めて自づから其の實力を膨脹せしめる。のみならず今後の戦争にあつては、其の交戦參加國の範圍を世界の全面に擴大せしめるから、戦争に敗北した國家は世界環視の中に殆ど亡國としての待遇を受けるまでに其の國力を低落せしめる。現在の世界の勢力均衡を以てすれば、強國はつねに強國に、弱國はつねに弱國に止まり、其の國際的地位を根本的に覆すことが出来ないから、支配國は其の支配地位を失はず、其れの屬領は獨立國たる地位を恢復することが出来ない。ひとり此の國際關係に根本的の動亂を起させるものは、世界を擧げての大戦だ。

其れであるから世界の諸列強は、容易には自ら交戦國にならうと希望せず、出来る限り戦争を回避しようと努め、却て其れを經濟的帝國主義の利益となすのであるが、併し經濟的帝國主義自身は結局は戦争に達せねば已まない要因を自らの中に含むものであるから、社會の必然的法則に

支配せられる此の兩端よりの板挟みに、世界の列國は何時までも苦悶を續けて居る。今後世界の大戰は容易には起らないであらう。併し其の大戰までの原因は、前よりも一層激しい速力で世界の中に醸成せられて居るのだ。

五 國際主義への地理的障害

世界を擧げて兄弟の交誼をつくさうとする人類の理想主義的努力に、現に障害を與へて居る要素は次の三つだ。第一、地理的障害、第二、人種的障害、第三、經濟的障害。

第一の地理的障害は、地球表面の自然地理的形勢の與へた其れであり、我々は此れを如何とも變更せしめることが出来ない。其れこそは人類の生活に對して、眞に永遠に運命的なるものだ。殊に地表の主大陸が舊大陸と新大陸とに二大別せられ、太西、太平の二大洋が其れの區劃をつつて居ることは、我々人類の文化史に顯著なる特色を與へる所以であり、今後といへども我々の歴史が完全に此の環境の影響を脱することは不可能であらう。太西洋を圍繞して歐洲と米大陸とがあり、太平洋を圍繞して米大陸と亞細亞とがある。太西洋を圍繞する列強が其等の間の勢力の均衡を失ひ、一つの戦争を惹き起したとすれば、其の戦争を精算した結果として太平洋を圍繞する列強の勢力均衡が失はれ、其等列強の間に戦争が起る。此くして地表は、太西、太平二大洋に

より大陸を二大別せしめるが故に、其の二大洋を中心として、世界の列強の勢力均衡戦を交互に惹き起すに相違無い。私は歐洲大戰の直後に此の兩大洋勢力交互均衡論を主張し、太西洋中心の戦争の終末は直ちに太平洋中心の戦争の序幕であることを断言し、其れの事例を擧げて置いたが、其後頻發する事例は、不幸にして私の主張を確認せしめるものゝ如くである。

今日文明の發達しつゝある地方として、我々は歐洲、歐亞の北部、東亞、南亞、北米、南米、濠洲の諸部分を擧げることが出来る。此等の諸部分の國際的形勢を考へる場合には、其れに併せて此等の諸部分に生活する各民族の特性をも考慮しなければならぬ。

歐洲の諸國は其の相互的關係の最も密接なるものであるから、結局は一の聯邦をつくらなければならぬ。其の利害關係は相互に共通ではあるが、其の國民の文化的個性と歴史の傳統とが餘りにも截然と區別せられるところより、此の聯邦を組織せしめるは、困難なる途であり、其れへ達するまでにはなほ幾つかの豫備段階を経過しなければならぬ。亞弗利加は永遠に闇の國だ。地勢上此事は已むを得ない。其れの北部は歐洲と結び、其れの南部は寧ろ亞細亞の南部と結ぶであらう。歐洲と亞細亞との北部は眞に世界の一大塊をなし、天産は豊かに、生活様式は單一に、まことに此れは獨立した一大陸だ。其の土地に文化と社會の根を持ち、如何なる霜雪にも散落することの無い孤立した一本の宿根草だ。亞細亞の南部、印度洋を圍繞する諸地方は、本來地理的

に利害を以て結合すべきであるが、人種、宗教など小さく區劃せられて居る結果として、相互の合同は妨げられて居る。今後其等の諸地方の文化が高い程度に開發せられれば、聯邦を組織する可能性を持たないでも無いが、今のところ自然地理的區劃は餘りにも細分的であり、且つ其れの結合に盟主となる執拗の意志を持った國家が見られないから、此の部分は近き將來に其の完全なる自律を恢復しさうにも無い。

東亞の主部を占めるものは支那である。獨立した文化の傳統と豊かなる物資の生産と、此の部分も亦世界に一つの獨立した大陸の觀を示すを得る根ある地表だ。結局は一つの聯邦を組織しなければなるまいが、現在のところ内に野心ある政治家の紛争多く、國家の主權は確立せられない。今以上に經濟上の組織と、教育上の組織とを得て、其の方面より國家としての結合力を得なければなるまい。

北米は、其の人種と文化とに於て比較的單純であり、天産物は豊富だ。此處も亦完全に獨立した大陸と呼ばれることが出来る。經濟的に早く進歩し、其れにより、國家の統一を得たことは、北米に取つて大いなる幸福であつたが、元來太西、太平の兩洋を其れの兩側に望んで居ることは、北米の優所にして同時に其れの弱點だ。常に漁夫の利を占め、常に世界の大戦と無關係に居ることが出来ない。將來の禍根は其處に潜む。南米の將來は今日のところ未知數だ。當分の間は

優良なる民族の團結する北米の勢力下に立つの外はあるまい。濠洲は小さいながらも獨立した大陸をつくり、天産に豊富なる點で小なる北米の觀を呈して居るが、併し其の勢力に何等の誇るべきものも無い。たゞ獨立して他と勢力を争ひ、戦争をなすの必要を永久に持つては居ないから、一つの戦争ごとに漁夫の利を占めるであらう。濠洲の政治家が他よりの侵略を恐れるは、餘りにも自らの自然地理的形勢を理解しないものだ。

六 國際的精神の本質

天には神の榮光、地には人間の平和とは、人類の理想主義的努力の永遠に亘つて完成せられた形だ。地は其儘に榮光を放つ樂土では無い。其處では救はるべき魂の芽生と、救ひを拒む暗き力とが永恒に争闘するのだ。世界の平和に脅威を加へる力として、我々は先づ此の地表に存する地理的の障礙を見る。次には人種的の障礙を、最後には經濟的の障礙を見る。其等の障害は、其實我々自身の人格の个性的内容と我々自身の社會の地方的特性とより起り、我々の生活を豊富ならしめるために働いたものであり、また現に働きつゝあるが、大いなる力は自らのうちに葛藤を含み、矛盾を生みつゝあるから、随つて其の生産力に對抗する内面的反對力として此等の障害を造つたのだ。此れを克服するものも亦我々の内面に潜む創造力だ。たゞ其の力強い障害を克服す

るためには、創造力の源泉である人格は、決断するところを必らず實行する熾烈なる意志と、すべての反極を包容し、此れを統一して餘さない豊富なる構想力とを持たなければならない。其れが眞の國際的精神と呼ぶものだ。視野の一方的なる、構成の平面的なる意志は斷じて國際的精神では無い。

偏見を去るとは、偏見を征略し、此れを消滅せしめることでは無い。あらゆる一方的見方を統一的構想の中に收めることだ。人格の創造的源泉より消化し悉くすることだ。其處には人格の逐次的生長が見られ、我々は其れを教育と呼ぶであらう。國際的精神を世界の上に擴張するためには、教育運動は根本に豫想せられる人類の總活動でなければいけない。我々は先づ其の運動を我國の民衆の中に起す。更に此れを擴充せしめては、其の運動をあらゆる國家の民衆の中に起す。此れが途上に横はる小なる障礙によつて、此の大なる發願を止めようとは思はない。地理的に、人種的に、また經濟的に多くの障礙と當面して、國際的精神の世界教育運動を起すに最適な地位に置かれた我々日本人は、其の光榮に歡喜すべきだ。世界平和への最も力強い要求と運動とは、結局は我國の民衆の中より起るに相違無いと私は信じて居る。

我々は如何なる困厄に當面しても輕舉妄動を慎しみ、徒らなる興奮を避けて、國際的精神の大量を示さなければならぬ。次第に自己に對抗する強い外力を感じたときには、我々は更に自己

の内生命の深いところへ歸つて、對抗する力を内面化し、寧ろ生活内容の緊張充實することを自識しなければならぬ。我々自身の民衆の中に、國際的精神の本質を理解せず、外力に對抗する一の外力を自らの中につくり、互ひに對抗毀傷することを欲するものがあるとするれば、我々はなほ大いに我々の中に國際的精神の教育運動を起すべき餘地あることを痛感する。教育とは、つねに反省して生活の中心に復歸する力だ。そして今日の國際的國家對立、國際的人種對立、國際的利害對立を、根本的に克服するものは、全世界を對象としての教育運動の外には無いのだ。

七 労働者と國際的精神

労働運動の進歩とともに、世界の民衆の間に國際的精神の育醸せられて行く事は、既に此れを述べた。「無産者に祖國無し」とする社會主義者の主張は、無産者の經濟的利害の關與する世界と民族的團結の生活を基礎とした國家領域とが、其の境界を交錯せしめ、前者の集團力は次第に後者の其れを打破しつゝあることを表はすが、併し二つの集團は、若し此れを事實の問題と見るならば、其の一方は其の他方を決して蠶食しつゝあるものでは無い。前者の力の強くなるに平行して後者の其れも強められて行く。其れ故に労働者の大群が、國境を超えて合同しようとする集團力は、本來世界の平和を目標とする國際的精神の理想的表現と見らるべきだ。其の集團力の次第に

強められて行くことは、既に論じた如く、民族的集團を外的に表現する國家の範域を除去するやうには働かず、其等の個性的特色を發揮し、以て其れ々々の價值位相を構成せしめるやうに働いて居る。労働者の國際運動は、恐らく其れでなければ現在に於て勢力を占めることは出来ないし、また我々は此の性質の運動を労働者によつてなされる國際運動の第一段階だと考へて居る。

併し労働者の此の運動は、大戰後の世界の經濟的勢力均衡に隨つて、大いに其れの發達を阻止せられる事となつた。勿論一方では、さうした國際的運動は組織化せられて有力なものとなりつゝあり、また労働者の自覺も大戰前とは比較の出来ないほど進んだものになつては來たが、各國の經濟的勢力があまりにも甚だしく其の水準を異らしめたが爲めに、各國の貨幣價值の間に不自然な等差を見ると同じく、其の收入、生活標準などに、大戰前には見られなかつた極端な差等を生せしめ、各國の労働者の國境を超えた合同形勢を妨害する力は強く働き出した。我國の移民が米國の労働者により排斥せられたことは、最近に起つた其れの一適例だ。如何なる低い生活標準にも堪へることの出来る日本移民と、自家用自動車を驅つて工場へ通ふ米國の労働者とは、其間に労働者としての感情を共通せしめ得ない。

此の意味の背反は本來労働者に固有する條件より起つたものでは無く、世界を擧げての國家商業主義の競争が、各國の間に商業主義的地位の優劣をつくつたことより起つたものであるから、さ

うした國家の經濟的地位の高下に均衡の與へられるまでは、此の背反は除去せらるゝことが出来ない。其れ故に我々は、各國の労働者の國際的聯結を促進して世界の上に國際的精神を建設するためにも、現に各國の上に生じた極端なる經濟力の不均衡を打破しなければならぬ。國際運動に隨ふ労働者自身の努力も亦其處に加へらるべきだ。現に諸國家の經濟力の極端なる不均衡は、愈々其の程度を進めつゝあるが、此の大勢が今の儘に進められるとすれば、世界の平和は遂に攪亂せられるより外は無ない。

八 國家の三様なる經濟的形態

資本家と労働者の對立するといふ生産組織は、少くも現社會の其れを説明することが出来ない。今や我々は此等の外に新たに成立した金貨階級と當面した。金貨階級と事業家階級と及び労働者階級とは、相寄つて生産組織を構成するのだ。一國內の生産組織に其れが見られると同じやうに、大戰後には各國家の間に、金貨國家、事業家國家、労働者國家の區別を生ずるに至つたが、甲國家は労働するのみで蓄積せられる資本を持たず、乙國家は他よりの負債を資金として事業主となり、自國と他國とに企業をなし、以て事業の成不成の危険と自國の國力の浮沈とを同一視しなければならず、更に丙國家は何等の事業をも起さず何等の労働をもなさず、たゞ他の國家

へ貸附けた債権の利子により生活することが出来るやうになつたとすれば、其の結果として三つの階級の闘争は其儘に三つの形式の國家間の闘争となる。

労働者國家は何れにせよたゞ搾取せられるのみであるから、世界の經濟的現勢其のものに不満であり、たゞ此れを打破して新しい世界視野を展開せしめようと努める。事業家國家は其の國家の經濟生活の不安定を避けるために、金貨國家と労働者國家との兩端に向つて其の負擔する危険性を轉嫁分擔せしめようとするが、其の轉嫁の視點が主として金貨國家に向けられるや或は労働者國家に向けられるやは、其國の經濟的事情の總和が此れを決定する。しかし結局に於て労働者國家と事業家國家とは、金貨國家の經濟力獨占到對抗しなければならぬが、危険なる戰爭の可能性は其間に醸育せられるのだ。

併し其れよりも前に問題となるのは、金貨國家の經濟的膨脹だ。金貨國家なる限り、世界の財界はどれだけ沈衰して居ようと、他の債務國よりは負債の利子として貨幣が移入せられ、其處に存在する貨幣の分量を漸次的に増加せしめることに變りはないから、金貨國家の保有する貨幣は天井知らずに増額して行き、其の不自然なる狀勢は、必然的に何等か巨額の失費によつて救濟せられなければならぬ。其れは單なる國外放資であつてはならない。何故なれば放資の救濟は一時的であり、且つ其の結果として利益を生み、數年後には却て國內に移入せられる貨幣の分量

を増大せしめるであらう。利益を生まない失費は、生活標準の高上による貨物消費の増加であるが、現制度の下では人間の消費生活にも限度があるから、此の限度に近づけば生活標準の高上も亦貨幣の國內増加と相殺することが出来ない。此時金貨國家を誘惑するものは戰爭である。勿論此れは事實の社會的客觀的説明だ。金貨國家の民衆を心理的に觀察するならば、彼等は増額した貨幣によつて心を驕らせ、其の爲すところに節度を失ひ、感情の奔逸に身を任せて、區々たる失費を顧慮しない状態に陥るをいふ。其の情の極まるどころ戰爭に至らずには已むまい。

九 米國の軍國主義

私は右の觀察の中に現在の歐洲諸國と米國との經濟的地位と、國際的精神に關與する限りの其の國民の心理を解剖した積もりであるが、最後に示した金貨國家とは言ふまでも無く米國だ。米國民は嘗て世界の國民の中にも平和を好む人間だと言はれて居たが、近時露骨に軍國主義的精神を發揮して、或は國民の大動員を練習したり、或は太平洋に艦隊を集合し、大規模なる艦隊運動と射撃練習をなしたりする態度を取るは寧ろ憐れむべきだ。今や米國民は其の爲すところに紳士の節度を失ひ、他の國民の思惑如何を顧慮せず、自らの欲するが儘を實行して憚らない國民となつた。我々は此の態度の背景に、先きに述べた經濟的情勢の動きつゝあるを忘れてはならない。

彼等は結局自らの中に起つた困難を内面の矛盾として解かず、外面の抗勢として此れに挑戦し、機械的情勢の傀儡となるに安んじて、其の情勢を支配し綜合すべき意志力を持たないのだ。我々は米國民の精神的能力の限界を見ることが出来た。

米國は日本を批評して言ふ。日本は其の遞増する人口を自制せよ。日本が其の人口の増加に何等の自制をも加へず、此れを其儘に放置することは、ひとり米國に就てのみならず、世界の平和に大いなる脅威を加へる所以のものだ。私は此れに對照し米國を批評して言ひたい。米國は其の遞増する貨幣の分量を自制せよ。米國が其の貨幣の増加に何等の自制をも加へず、此れを其儘に放置することは、ひとり東亞細亞に就てのみならず、世界の平和に大いなる脅威を加へる所以のものだ。しかも世界今日の情勢として、國際的平和の攪亂せらるゝ主原因は、露國のポリシェヴィズムでもなければ、聯合國に對する獨逸の復讐心、乃至は非白民族の白民族に對する報復でも無く、其れは實に米國の地上に堆積せらるる貨幣の山であり、此れに自制を加へて世界の平和を保障することこそは、今日世界の民衆が米國民に期待する最高の人類の責務であると。

一〇 平和への途

世界の平和を確保し、戦争を迴避するための方策として、私の考へるところは次の諸要件だ。

第一に、我々は國內的にも國外的にも教育の効果を擴充せしめることによつて、民衆に國際的精神を養ひ、戦争を好愛する人類の原始的感情を醇化しなければならない。此れがために我々は好戰的なる他國の浮薄なる挑戦に對抗して多くの勢力を空費するの要を用ひぬ。我々は自ら内に顧み、國民の雄大なる構想的精神を陶冶しなければならぬ。品位ある人格の創造力は本であり、一旦事あるに臨んで善處する軍國主義的精神は末だ。

第二に、我々は自ら進んで國家商業主義の競争戦の中に身を投ずる危険を避けるため、國民經濟生活を獨立の生活單位として自律せしめるやうに、其の取る經濟政策の上に大いなる修正を加へなければならぬ。

第三に、我々の外交は他くまでも國際的正義の上に立脚しなければならない。言ふまでも無く外交が國家間の術策として立つて居た時代は過ぎたのだ。我々は所謂外交を政府當路者にのみ委ねて置く必要を持たない。一國の民衆は直ちに他國の民衆と外交の問題を以て折衝すべきだ。

第四に、國境を超越して組成せられる文化的集團の多くを持ち、且つ其の集團の利害的團結力を大ならしむべきだ。學術的團體、運動競技の團體、宗教團體を始めとして、其等の集團の組成せられる可能性はまだ／＼豊かだ。此の種の文化的集團の實力が大となれば、隨つて國境を超えた人類の親愛感を強め、文化的傳統の破壊せられる戦争を忌避し、各人種を其れの創作價值によ

つて計る傾向をつくるから、世界の平和を確保し、戦争を廻避する實際的効力は甚だ大なるものとなるであらう。

第二十二章

結

論

一 生活價值標準の創建

ケインズの經濟専門眼に隨へば、世界大戰の物質的破壊は我々の文明に脅威を與へるほど大いなるものでは無く、しかも其の大部分は戦後數個年の努力を以て既に恢復せられたといふ。例へば佛國と白耳義とで破壊せられたすべての家屋は、西部歐洲のみで爲される一年間又は二年間の普通の建築の計畫よりも、多くは無いし、また其處での鐵道の損害は、鐵道發達の一時代における一個年の新敷設よりも遙かに少なく、土壤は農民の勞働により既に恢復せられた。物質的復舊の最も顯著な實例は世界の海運であらうが、其れの物質的損害は單に地方的では無く、廣く世界的であつたに拘らず、一九二一年の終りには、殆ど完全に修繕せられ、世界の海運業は其れが最初の勢力を恢復した。ケインズは右の如く觀察して居るけれども、其れと同じい意見を持つたものは、經濟學者の中にも甚だ多數だ。

氏はなほ大戰によつて受けた世界の損害を四種に分ち、其中三種の損害は注意さへすれば恢復

し得られるものであるけれども、たゞ一種の損害は恐らくはすべての影響の中最も大いなるものであり、容易には匡正せられ得ないとしたが、其の損害とは信用組織の破壊であつた。氏に随へば歐洲の經濟的困厄の究極原因は「價値の標準の不安定」其のものだといふ。

歐洲復興の經濟的考察をなしつつある専門學者の立論として、私はケインズの所説に甚だ多くの信頼を持たうと思ふものであるが、しかしなほ熟考すれば、彼の使つた「價値」なる語は何も經濟的文化生活範圍にのみ局限せられる必要を見ないやうである。其れは直ぐ廣義に考へられた「人生價値」だ。そして世界大戰後の我々の生活の混沌と無氣力とは、此れが究極の原因を「生活價値の標準の不安定」に見出すことが出来る。生活自身の物質的變動は、大戰直後の中部歐羅巴と露國とを除去すれば極めて大いなるものでは無く、また大戰後數個年の努力により救濟への曙光を見出し得たとも言へようが、救濟せられないものは生活價値の標準の破壊だ。随つて其れにより評價せられる生活自身の物質的變動は激甚である。

舊生活は破壊せられたが新秩序はまだ起らないといふのはまことだ。けれども其れはなほ生活體系の實質に向つた着眼だ。舊生活の破壊とは舊生活を指導し評價した舊生活價値の破壊を意味し、新秩序の未成立とは同様に新生活を指導し評價する新生活價値の未建設を意味する。生活の建設とはつねに生活價値の建設であり、生活の安定とは生活標準の安定だ。大戰後の世界民衆の

努力する究極目的は畢竟するに其の生活價値標準の創建だ。

二 秩序の安定形式と新精神的視野

經濟價値標準の安定策として、其處には二つの根本動向が見られるが、其れと同じく大戰後の世界の精神生活は根本的に二つの方向を望む。言ふまでも無く其れは古い秩序に向ふものと新しい精神に向ふものとだ。

新しい精神に向つたものゝ代表は、勞農露國であらう。併し露國が世界に新らしく建設し始めた社會主義的共和國の事業には現に一頓挫が來た。ポリシエヴィキの舊制度破壊は其の始め甚だ徹底的であつたが、後次第に軟化して、舊資本主義制度に讓歩をしなければならなかつた。勞農露國の所謂新經濟政策は、我々の如何なる生活革命も、歴史的傳統の內面的展開を無視して唐突には行はれ得ないことの一實證を示すものであつた。生活の革命とは我々の生活の見方が或る一局面に偏し、生活の全體に對する妥當性を失つたときに、其れの全體的見方から前の偏局した見方を修正して行くことを意味する。其の評價の方針が前の評價の座標軸の上に置かれず、其れとは根本的に性質を異にする點で革命はやはり字義通り革命的だ。併し生活はいかなる場合にも連續的なものであるから、革命の場合にさへ、一つの生活様式が無意味に滅ぼされて、其れで無

いものが無根據に起るのではない。一つの見方を生活の全體觀點において反省することを成る可く禁遏し、生活の歴史的連續性を根本的に排撃するものを革命と呼ぶならば、其れは既に革命の眞義を失つて生活の價値を無視するものであり、随つて事實的にも勝利の結實を得ることが出来ない。露國の場合は其の歴史的連續性よりの壓迫に降服した一實例だ。其の取る經濟生活の價値標準は眞に革命的に舊座標軸を拋棄したものであつたにせよ、其の拋棄は舊座標軸の内面的展開より來つた胎生でなければならなかつた。

併し勞農露國がどれだけ舊資本主義制度の標準へ讓歩したにせよ、我々は如何なる根據からも、其れだから露國の共產主義は失敗し、社會主義的共和國としての露國は滅亡するだらうとは想像することが出来ない。今なほさうした想像を持ち、其上に立つて國際政策を考へるものがあるとするれば、其れこそは全然の妄想だ。またよし四圍よりの國際的壓迫に堪へることが出来ないで、露國は今後滅亡したにせよ、一旦ボリシエヰキによつて建設せられた社會主義的共和國の理念は滅ぶものでなく、其れの實現の可能性は否定せられることが出来ない。我々は歴史的に既に成立したつた新社會的精神を望む。其れはまだ生活價値の標準と呼ばれるだけの檢證を得ず、また現に事實への妥當性を持つ程度に構成せられては居ないが、我々の新生活憧憬を其の精神の中より常に暗示し、展望させる効果は大きいものである。

大戰後の世界の通貨は、大抵の國に於て不換紙幣を主とするものになつたけれども、不換紙幣を其儘に本位貨幣とする試みは、大戰後に起つた變態的狀勢を常態として容認し、變態的價値標準を常態的價値標準に定位しようとする點で、大戰後の精神生活の新らしい方向に向つたものであり、勞農露國の承認と同じ傾向を持つ。此れに對しては金本位制を復活しようとする試みが、或る部分では強く主張せられる。其れは大戰後の經濟價値標準へ復歸することを根本の精神とするが、其れの全世界に成功したときは、同時に生活價値標準に就ても大戰前の其れへ復歸することだ。ドオズ案の實行は其れの前途になほ幾多の難關を控へて居るけれども、若し假りに其れが故障無く實行せられたとすれば、米國と獨逸とは完全に金本位國となり、大戰前の經濟生活秩序を現出せしめよう。其他の諸國も勢ひ此の古い價値標準へ復歸しなければならぬ。其れが世界の平和に大いなる寄與を爲すものかどうかは餘程の疑問だ。生活價値標準の安定は刻下の世界理念であるが、しかし其の價値標準が金本位制、即ち大戰前の生活理想であるがよいとは容易に斷言の出来ないことだ。世界全體が金本位制に歸るためには世界の通貨は驚くべき收縮をなさねばならぬが、其れにより生活秩序の破壊せられる犠牲は大きい。金本位制の復活は同時に舊帝國主義の復活だ。經濟的軍國主義の復活だ。其の結果は再び世界の大戦であらう。しかも其の大戦への傾向は從來よりも一層急速に進められ、其の結果は今より一層悲惨なものであらう。金本

位制への復活を準備するときには、我々は同時に軍備の復活を忘れることが出来ない。

此くして私は、世界の生活價值標準を露國の其れの如くに、事實への具體的妥當性を越えて遠望することにも賛成しなければ、價值標準の安定を古い金本位制への復歸と直ちに同視する舊經濟家の計畫にも同意しない。我々はとにかく新らしい精神に向つて解放せられた生活の歴史を容認しなければならぬ。一旦解舒せられた歴史の繪巻物は再び巻き收めることの出来ないものだ。其の新精神は直ちに現實の上への妥當性を保有して、現實を規制し、指導し得る標準となるべきだ。事實は此れ以上に換元せられ得ない。併し標準は歴史生活の傳統の中より内面的に、必然的に生み出されたものでなければいけない。

現代は此くして右の條件に適ふ生活價值標準の求められぬ事に困しみつゝある。其れがすべての困苦の第一原因だ。今やいかなる急進的人達も、とにかく生活を安定せしめ得る秩序の形式を必要として居ないものは少いし、また如何なる保守的人達も、大戦後に展開せられた新しい精神的視野を容認しないといふことは無い。

三 世界的孤立の問題

大戦後日本は國際的に孤立したとは一般の輿論だ。最も鞏固の結合と思はれた日英同盟は廢棄

せられ、可成りに親密なる關係に向つて居た日露の間は露國の革命とともに斷絶せられ、革命後の露國は國家として提携するまでに有力なものとなつては居ない。米國や濠洲は執拗に邦人の移民を排斥しつゝある。此等の國際關係を外面的に觀察すれば、日本は確に世界に孤立的形勢を持つことゝなつたのだ。けれども此事を以て直ちに日本の將來に大いなる暗影を投ずる原因と見るものがあるならば、其れは事實の意味を過大視するものだ。まことに言ふ如く日本は世界に孤立的形勢を持つに至つたにせよ、私は其の事實に何等の憂懼をも持たず、却て其の事實の内面的意義を根據として、其上に我々の政策を建設して行かうと思ふ。

日本の國際的孤立を憂懼するものに私は先づ報告しようと思ふが、國際的孤立はひとり我國の上に来つた運命では無く、其れは實に世界全體の國家的趨勢なのだ。例へば英國を見よ、米國を見よ、佛國と獨逸とを見よ。其等の何れが孤立的形勢ならぬ特別の關係を以て相互に結びついて居るか。其等の一等國を除いて、他の二等國以下の相互關係を見るも、其處には日本に於けると同じ性質の孤立的形勢が示されて居るのだ。そして現に其等の諸國の中には、我國に於けると同じく、自國の孤立的形勢の結果を憂懼する意見の行はれつゝある場合をさへ見る。

此の事實の第一原因は、大戦後日なほ淺く世界の國家的對立に新らしい形勢をつくるだけの歴史的背景を缺くからだ。其の新形勢のつくられるには、生活價值の共通標準が先づ其處に建設せ

られることを必要とする。随つてさうした標準の當分は建設せられさうにも見えない世界の狀勢として、各國家が甲と乙と結び、丙と丁と離れることは容易には起らないであらう。のみならず既に國家の意義に就てさへ新精神を解放せしめた世界の民衆は、本來國家間のさうした特別の離合を悦ばないやうになつた。併し生活價值標準の安定が大戦前の本位の上になされ、例へばドオズ案の如きが途中に何等の障礙も起らず實行せられたとすれば、世界の局面は大戦前の其れへ逆轉せしめられたのであるから、其時には大戦前に見たと同様の、各國家の集合離散が再現せられることであらう。併し其れは世界の民衆の眞の要求では無い。此の如き國際的狀勢の上には解放的精神よりの事實的壓迫が加はつて來るに相違ない。

第二の原因は、世界の各國家が大戦後經濟的に自給することを必要とした自然の形勢だ。大戦は何れの國にも其の國家を以て自給的經濟單位をつくることの必要を痛感せしめ、現に各國家は其の傾向を追つて居るし、また經濟價值單位としての貨幣は自由に世界の國境を通過し得ないこととなつたが、自給的國民經濟は必然的に其の國家の國際的關係を孤立せしめる。此の意味を以て大戦中は中立國であつた瑞典の如きでさへ、地理的孤立の狀勢を保ちつゝあることが瑞典人自身により注意せられて居る。

此くして我々は世界今後の國際的關係が如何に變化して行くかを豫測すべき何等の根據資料を

も持つて居るものではない。同時に現在のところ日本が國際的に孤立する狀勢を保ちつゝあることをも我々は何等憂懼しては居ない。他に對抗する意味を以て我々の聯盟すべき他國家を求めは政略だ。我國が地理的、文化的に、其の内面的發展に随つて當然特殊の友朋的關係を他國家との間に結ぶは政策だ。日本は其の現に占める國際的狀勢によつて外的に支配せられず、日本の生活原理を内面的に發展させて行けば其れでよいのだ。

四 國際理想主義

人類の文化生活は大體に於て向上の傾向を取つて來た。今後も恐らくは其の方向を取るであらう。我々は支那の歴史を顧る時に、ひとたびは燦然として開花した文化生活が、忽然として退化し、衰亡し、歴史の暗黒時代を經過して、再び他の個性を持った文化生活の萌芽を成育せしめたことを知る。埃及、バビロニアの文化は今僅かに考古學者、人類學者の研鑽の對象となるに過ぎない。此等の歴史的事實を反省すれば、我々の現に位置する文化的社會は、今こそ前古に比類の無い享樂果實の豊富を示しては居るが、其れも何れかの時代には埃及、バビロニアの先例を追ふもので無いかこの憂懼も起きよう。しかし大體に於て我々は、現在の文化的社會の根本的破滅を憂慮する必要を持たず、大きな着眼を以ては其れは次第に向上の傾向を追ひつゝあると信ずるこ

とが出来るのである。

何故なれば、往古の文化的社會が根本的に破滅したには、勿論其の社會の内部的動因を考へなければならぬが、其外には、其の文化的社會範圍が割合に狭少であり、全世界的では無かつたこと、政治的權力の支配が其他すべての文化價值を壓倒して居たことを擧げなければならぬ。此れに反して現社會は、全世界的に其の文化果實を豊かならしめ、野蠻未開明の民族の勢力を微弱ならしめたから、黒闇の民族の暴力によつて壓倒せられる危険を離れることが出来たし、また政治價值以外の諸他の文化價值が其れ々々社會に働きかけ、着々として、其れを世界的に組織化しつゝあるから、其の力は政治的權力による全的壓倒に對抗し、随つて我々の文化の連續を擁護することが出来て居る。今後我々の文化的社會に破滅の危険を齎らすものがあるとすれば、其れは最早歴史の過去における動因とは異つた方面より來るものでなければならぬ。恐らく其れは野蠻民族の來襲に代へるに産業主義の人間機械化を以てし、政治的權力の全支配に代へるに、經濟的勢力の獨占を以てするものであらう。

併し我々の時代の社會的常識は、確に往時の其れよりも反省の機能を増加せしめた。古代の社會は創造の機能を多く發揮し、反省の機能を完全に伸長せしめては居なかつたが、近代の社會は後者を十分に發達せしめたことに於て、特に其れを組織的に、體系的に發達せしめたことに於

て、確に近代的と呼ばれる特色を持つ。随つて現社會は、破滅の動因の侵入に對抗する反省的機能を常に鋭敏に働かせて居るから、世界文化史の途上に幾度か現はれたやうな、文化的社會の根本的破滅は今後の歴史の中に見られないであらう。併し勿論我々は其れを全稱的に主張することが出来ない。歴史の將來こそは全くの未知であり、其れを決定する力は、ひとへに我々の社會の意志が、それだけの強さを以て、それだけの自由さを以て、訓練せられて居るかにかゝつて居るのだ。

我々は、現文化的社會生活が將來無限に進歩し向上することを最初の信念として持たなければならぬ。文化的社會生活が無限に進歩することは、反思が破れ理想が勝ち、不合理が破れ合理が勝ち、暴力が破れ教育が勝ち、孤在が破れ綜合が勝つことを意味する。其の動的開展の決定要素は、我々の意志自身だから、文化的社會生活の無限の進歩を信ずるとは、結局我々の意志の自己決定力がいかに旺盛であるかを信ずることだ。換言すれば我が我の可能性を自信することだ。其の根本信念を離れて我々は生存することが出来ない。

實社會は其時の環境に影響せられ、其の社會的良心を動搖せしめる。例へば大戦後の國際的情勢が其れだ。社會の階級的情勢が其れだ。民族の排他的情勢が其れだ。人生觀の無包容排擠的情勢が其れだ。けれども其等は、人類の社會的進歩に對して、其れ々々の偶然的要因たるに過ぎな

い。大戦後の國際情勢は、一言を以て要約すれば、國際的アナアキズムの支配である。けれども我々は、其の國際的アナアキズムへ應急手當てを考へるにせよ、某々國が帝國主義を取るから我々も亦帝國主義を永遠の生活方針として取らなければならぬとは考へない。國際理想主義こそは我々の永久に取つて動かない中心意志の決定だ。大戦は世界の社會的情勢に一大衝撃を加へ、人類の解放に有望なる視野を展開せしめたが、其れと同時に多くの錯綜した社會關係を現出せしめ、其れを乗り越すことの困難から、一時的に、また部分的に、狹隘なる國際的アナアキズムの人生觀を養ふに至つたことも疑へない事實であるが、其れの根には文化的進歩の本幹が位置する。雲霧の如くに一時的なる、また部分的なる社會要素により支配せられて、我々の生活の根を培育することを忘却すべきでは無い。私は世界の帝國主義、汎白人主義、汎米人主義乃至共產主義を恐れはしない。私は日本の世界的孤立を恐れはしない。私は最後まで國際理想主義者だ。汎世界主義者だ。

五 古 典 と 傳 統

普遍妥當なる文化價値の實現を目標とする國際理想主義乃至汎世界主義は、同時に我々の地方的傾向・個性主義的要求を排斥するもので無いことは、既に幾度か論じて來た。歴史の進歩

は、我々の生活内容を合理化し盡すところに成立するが、生活内容自身は本來非合理的のものだ。歴史に於ける合理的構成のみを見て其の非合理的偶然性を忘却すれば、却て人生を狭量に認識したことになる。合理的の母胎は無限の未知内容を持つた非合理性だ。たゞ我々は此の非合理性を何時までも未照の非價値に止めて置くことが出来ない。非合理性が合理化せられるとは、生活の母胎たる非合理性の無限内容から、合理化せられ得る限りの生活質と生活量とを無限の経過に互り生産し行くことであるが、此の合理化せられた限りの非合理性が個性といふものだ。随つて如何なる文化も形式的には合理的、普遍妥當的であるが、實質的には個性的、一回性的だ。此の如き個性を持たない文化所産は、合理性を缺く文化所産といふと同じく、何等の實在性も持つことが出来ない。生活の價値は常に絶對的のものだが、併し其れが實在的となるためには、必ず何等かの性質の、分量の相對性を自らの中に含まなければならぬのである。随つて私が正しく國際理想主義的に、汎世界主義的に生きることは、私が日本人として、現に住む土地の一社會人として、私の家族の一員として、私が所屬する其他すべての社會的集團の一組成者として、結局は私として、最も正しく相對的に生きることだ。其等の地方主義的、個性主義的の制約は、生活の相對性であるから、國際理想主義的、汎世界主義的の絶對理念の中に没入し、不純の介雜物を燒燼しなければならぬが、同時に此く精鍊せられた結晶は金であるか、銀であるか、其他特

殊の元素的個性だ。

合理性の連続は例へば順序数を数へる如くなほ多少機械的なるを免れないけれども、非合理的母胎の反省より創造せられる個性的制作の連続は、まったく創造的であり、其處に人格の絶對的自由性を認識することが出来る。我々が宗教を創作しなければならぬことは、多少機械的に要求せられるけれども、基督教を生むと佛教を生むと、乃至空海、親鸞を生むとは我々の自由だ。併し此の個性的非合理性の内深には、所謂合理性の認識するを得ない高次の合理性が潜む。其れこそは眞に歴史の進みを支配する原則だ。空海、親鸞は佛教の中にしか生れず、ボオロ、プロチヌスは基督教の中にしか生れない。そして此く非合理性の内深に潜むより、深き合理性が其の非合理的の價値を發揮したときに、我々は此れを古典と呼ぶ。歴史の進みは、單に合理的の價値を實現する以上に、古典としての價値を發揮して進むものでなければならぬ。古典の世界こそは天才の創造する軌道だ。所謂藝術の美を意味づける眞、宗教の神聖を意味づける善、道德の善を意味づける靈性の世界、そしてなほ此等の理想の唯一歸入する人間性の世界だ。古典的歴史主義を我々は傳統主義と呼ぶ。

私は國際理想主義者、汎世界主義者なるが故に、地方主義者、傳統主義者の途を進む。其處では普遍と特殊、保守と進取とは統合せられて相反の問題をつくらぬ。現實の焦點はすべて古典

であり、生活の内省は直ちに傳統である。傍若無人といふことを若しも善意に解し、略ぼ大膽といふに同意なるものと考へるならば、傳統主義者は最も大膽に、随つて全く傍若無人に進む。英國、米國、フラスシストの伊太利、ポリシエヰキの露西亞は、我々の古典的生活開展、即ち我々の傳統主義に何等の關係も無いのだ。世界の産業主義は世界の經濟的全構成を以て滅亡せよ。古典に殉ずる我々の信念には滅亡が無い。軍國主義、労働黨、フラスシズム、共產主義は死物だ。其れは何人によつていも繼承せられ乃至摸倣せられやう。我々の傳統的生活は我々の古典を内省しつゝ生きるものゝひとり味到し得る深泉だ。

六 評 論 の 事 業

我々の社會は、今や到るところに評論の必要を痛感せしめて居る。傳統は新らしい解釋を要求し、國際主義は歴史を超越しての古典化を要望して居るが、此の如き新解釋、此の如き古典は未だ容易に出現しやうに無い。此れを創るものは人類の集團社會生活であるが、其の素地を準備し、材料を整理し、更に社會生活の努力と経過とに忠告するものは、専ら評論家の任とするところだ。

すべての文化科學と哲學の仕事は要するに評論だ。評論無き分析、評論無き記述は、此等の學

經濟の經濟的要素……………	四四
經濟の物質的要素……………	四四
現今の經濟……………	四五一
經濟生活……………	四五一
經濟生活の意義……………	四五三
經濟生活の現實的機械性……………	四六二
經濟生活の時形的發達……………	一七
經濟的帝國主義……………	五四五
經濟制度……………	二二五
經濟制度の根本形態……………	二二五
藝術……………	二九三
藝術文化の獨占……………	四〇〇
藝術の社會化……………	四〇七
ケインズ……………	五五九
現代人……………	九九
現代人の人生觀……………	九三
現代人の憂鬱……………	三三
原料品……………	四二
原料品の缺乏……………	四二
原料品の浪費……………	四七五
功利主義……………	一一六
功利主義的文明理想……………	四七九
鑛山……………	四七九
國家……………	二二七
國家の本質……………	二四〇
國家形式と資本主義……………	五七
資本主義國家……………	五五二
國家の二様なる經濟的形態……………	九五
國家と國際産業主義……………	二二六
國家哲學……………	四九七
一元的國家哲學……………	五二六
國有……………	五二六
國際政策……………	五二六
國際産業主義……………	九三
國際主義……………	五二六、五四六
國際的アナアキズム……………	五七〇
國際的精神……………	五四九
國際的通商……………	四六六
國際的孤立……………	五二四
國際聯盟……………	五二
國際理想主義……………	五二七
國際プロレタリア……………	五〇
古典……………	五七〇
ゴドウィン……………	一五六
最高經濟會議……………	二二六
産業政策……………	五二〇
産業文明……………	一一五
産業文明の得失……………	四七五
産業文明の浪費性……………	五〇〇
新らしき産業文明……………	一三七、一三九
サンザカリズム……………	四二七
宗教……………	四二五
宗教の本質……………	四一九
宗教の否定……………	四二二
宗教的著作の流行……………	一八二、五二五
宗教家の社會的活動……………	一〇〇
集中主義……………	五
資本……………	二五四
資本喪失の危險……………	六八
資本主義……………	一六〇、二六九
資本主義發達の加速度……………	六八
社會の定義……………	一六〇、二六九
社會哲學……………	一六〇、二六九
社會政策……………	一六〇、二六九
社會改造……………	一六〇、二六九
社會改造の不可避……………	一六〇、二六九
社會理想……………	一六〇、二六九

社會教育……………	二六九
社會成立の根本要素……………	一六九
社會の多元性……………	一七四、一八〇、一八九
社會主義の本質……………	六
社會主義的社會……………	九〇
社會主義的理想社會……………	一五七
ショオツ……………	五八
消費者組合……………	二三五
自由……………	五三二、五三三
自由競争……………	八七
自由聯合主義……………	五三三
自由教育……………	三七七
食糧政策……………	五〇五
食糧問題……………	四四六
商業主義……………	八九、三六一
職業教育……………	三七七
支配……………	五三二
シンフエイン黨……………	二四五
ジムメル……………	二四〇
新分子の聯盟……………	四四九
新世界の待望……………	三六
心的改造……………	二六四
信用……………	二六四
信用の失條……………	四二
人生觀……………	九九
人道主義……………	二五六
人口問題……………	四四四、五五六
人格權……………	一五六
スチルナブ……………	一五六、三六七
スノウアン……………	六八、八二
水力電氣……………	四七九
生活……………	四七九
生活價值……………	二四
生活價值標準……………	五五九
生活の低下……………	二二
生活の危機……………	三三
生活の倦怠……………	四二〇
生活享受の粗惡……………	四七〇
生活の不安……………	二六、八二
生産……………	二六、八二
生産の減退……………	四一
生産作用の自律……………	四四五
生産の藝術性……………	四八八
生産の道德性……………	四九一
生産の社會的統制……………	四九九
生産者組合……………	二二三
生存權……………	一五四
政治……………	四四一
政治の腐敗……………	二〇五
政治の遊離……………	四三二
政治運用と獨裁……………	三三六
政治教育……………	二〇五
政治機關……………	二〇五
政治機關の根本形態……………	一九一
政治機關の役員の法的性質……………	二二八
政治運動……………	三三六、三五〇
政治力の把握……………	二九〇
政界革新……………	三四一
政黨……………	三四一
現在の政黨……………	二二二
政黨成立の根據……………	二二〇
政黨政治の歸結……………	二二四
政黨政治の危機……………	二二六
政黨腐敗の原因……………	二〇七
制度改造……………	二六六
成人教育運動……………	二九一
世界の改造……………	二二五
世界の混沌……………	七
選舉制度……………	一九四

選挙運動	二四三	テモクラシー	二	ハアインク	四九
宣傳	二六七	アモクラシーの意義	一一	バアソナル、アナアキ	一六四、一九五、二四四、三五五
ソオレル	一四〇	個々活動のアモクラシー	一四	平等	一七二
創造	四七三	傳統主義	五七二	平等の権利	一七二
労働に於ける創造性の缺乏	四七三	テュルケム	四〇七	消費と生産との平等	四五六
		テロリズム	三〇、三三〇	評論	五七三
		獨逸	三〇	フウグア	四九
		獨逸の賠償	四六	フエレロ	三六
		獨逸と英國との貿易競争	五五	フエビアン協會派社會主義	一一九
		動産奴隷	二二〇	普通選挙	一九四、二四五
		ドオズ案	五、五〇二	福澤諭吉	四三七
		動力政策	五〇八	フラスシズム	五七三
		同盟罷業	五三三	物的改造	二六四
		道徳意識の内容	一〇六	アティン	一〇四
		獨裁主義	三三五	物價	八八
		獨裁主義の弊を救ふ途	四六	文明開化	一一八
		トロツキ	二六六	文化主義の定義	一七
		人間性	二六一	文化主義的理想社會	一五六
		人間性の情報	八九	文化生活的充實	一四九
		人間性の破壊	二六六		
		人間質改造	二六六		

アルジョア國家	二四〇	ホルシエグイズム	二六、三五二、五七二	エウトピアニズム	一三九
アルジョア文藝	四〇一	ホルシエグイズムの集中主義	二二〇	唯物史觀	一三二、三九五
アルジョア、テモクラシー	三五九	ホルシエグイズムの獨裁主義	一四三	唯物史觀の必然論	二五八
アルジョア、リベラリズム	二六八	ホルシエグイズムの理想社會	一六四	唯物史觀の批評	一三三
プロレタリア的テモクラシー	三五九	ホルムス	一一二、一一五	欲望の分類	一〇八
分離主義	三五六	マクドナルド	二九一	ラッセル	一〇八、一一二、四三六
平和	五五六	マルクス	一〇三、一一三、一三八、一五七、一六〇、一六五、一七二、一七五、一八六、四一七	理想	一、二一九
ヘエゲル	一六七、一七五、一七七、一八六	民衆藝術	四一〇	理想の本質	一三四
ヘエゲル派	一六九、一八一	名代	二二九	理想主義	一三六
米國	四八	無産者の獨裁	三三三	理想主義の誤解者	一三六
米國の参戦	四八	無産者の藝術	三九六	理想主義と社會主義との結合	六、二一九、一五八
米國の軍國主義	五五五	無産者代議士	三四四	理想主義的方法規準	二八四
米國の將來	五五五	無産者精神	二六二、二九九	理想社會	一六〇
ペンテター	七三、一一二、一一九	明治時代	四三四、四三六	リップス	一三六
ペルシニヌタイン	一四一	メンガア	一〇六、一一二、一五六	倫理學	五
法則主義	二六一	メンシエグイキ	一一二	ルソオ	一八〇
暴力	三〇八	モリス	二二	ルナチャルスキ	三九九
暴力の消極と積極	三〇八	ヤ行	二六	歴史主義	一一〇
暴力の道徳性	三〇四	エウトピア	二六	聯合體	一七九、二四七
國際政治組織に於ける暴力	五三			聯邦的國家形態	二四六
奉仕	五三三				
補習教育	三九〇				
保健政策	四四八				

レヒニン	二〇、一六五、二九一、三三八
労働者	三三八
労働者の勃興	三〇
労働者の新要求	三三
労働者の自給	八六
労働運動	
労働運動の現代的意義	五五
我國の労働運動	五九
労働運動の政治的意義	五二
労働運動の國際的意義	五六
労働運動の第一期と第二期	五六
労働黨	
英國労働黨の黨是	五九
労働權	一五三
労働全收權	一五三
労働學校	二六八
労働教育	二七二、二六八
労働組合政策	五二、五二六、五二七
労働者反對團	二九三
勞資協調	五二九
勞資協調の三種別	五二四
勞農露國	

勞農露國の實驗的刺戟	六三
ロマンチズム	二六
ワ行	
ワシントン會議	五二

大正十四年五月二十五日 刷
大正十四年五月三十日 發行

社會哲學原論
定價金四圓六拾錢



著者 土田杏村
發行者 大谷仁兵衛
印刷者 野田龍之助

内外出版株式會社代表者
京都市下京區三條通御幸町西入
京都市上京區下鴨黒川町

内外出版株式會社印刷部刷

發行所

京都市下京區西洞院七條南
京都市神田區錦町一ノ一九

内外出版株式會社

電話 六版 三三二九三
三五五番

土田杏村著

五版
文化主義原論

菊版洋裝五百頁
定價金參圓五拾錢
送料金拾八錢

現今の社會問題を哲學の高い立場から批判し、解決しようとする試みた日本で最初の文獻です。理想主義の哲學を何處までも深く掘つて行き確固たる生活の根據を人格の自覺に求め、人生における經濟生活の位置を基礎づけて、唯物史觀説や最近の社會思潮を細密に検討して居ます。哲學と社會問題との結びつきを考察するに指唆するところの多い名著として本書の地位は既に古典的のものです。

土田杏村著

島國家としての日本の將來

四六判百頁
定價金六拾錢
送料四錢

歐洲大戰後局面に大變動を來した島國家としての日本の經濟生活を分析し、其の將來を推論し、以て國策の根本論をなして居る。移民の將來、外國爲替の理論、物價對策、金輸解禁の可否、産業的立國の方向、通貨收縮の適否、社會主義の世界的現勢、此等の問題に就て、著者は大戰後に現はれた最新の經濟學説を論評しつゝ、一貫した經濟的恢復策を主張して居る。科學的の冷靜に包まれし筆端火を吐くの至情。

エトV9

著 村 杏 田 土

【書 叢 潮 思 育 教】

土田杏村氏が最も高い程度の教育學を最も平易な言葉で解説した
統一的講義録

自由教育論 上 卷

(1) 四六判洋装三百頁
定價金貳圓叁拾錢
送料書留拾八錢

教育の目的及教育者

(自由教育論 下卷)

(2) 四六判洋装四百頁
定價金貳圓六拾錢
送料書留拾八錢

創作鑑賞教育論 上 卷

(3) 四六判洋装三百頁
定價金貳圓五拾錢
送料書留拾八錢